
G・F～ガールフレンド～

南条仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G・F ガールフレンド

【NZコード】

N3402Q

【作者名】

南条仁

【あらすじ】

「先輩が好きです！」出会いっぱかりの美少女の後輩、琴乃にいきなり告白された翔太。恋愛経験ゼロの彼はその告白を受け入れて2人は恋人同士になる。初めての恋人。彼らは初めてながら恋愛経験を重ねていく。だが、琴乃が翔太と付き合うにはある目的があるようだ……？惹かれあうことが運命だと思える恋をしたことがありますか？初恋ラブストーリー！

序章・出会いで10秒、即告白

【SIDE・井上翔太】

これは俺の幼い頃の記憶だ。

夢に見たのはある一つの光景、俺の目の前には同世代の幼い少女。楽しそうに笑う女の子は俺に抱きついてくる。

『ねえ、今度はいつあえるの?』

『分かんない。でも、きっとすぐにあえるよ』

甘える仕草、可愛い彼女に俺はそう答えていた。
初恋だったのかもしれない。

それはまだ恋を恋だと認識できない年頃だったから明確には言えないけれど。

『ホント? それじゃ、ぜったいにまた会いにきてね?』

『うん。約束するよ』

小指同士をからめ合つ子供の約束をかわす。
照れを交えながら俺はその指をそつと離した。

『約束だからね。もし、会いに来てくれなかつたら、私が会いに行つてあげる』

そう言つて笑つた彼女の笑顔だけが印象的に覚えている。
それは子供の頃の消えてしまいそうなくらいに遠い昔の記憶。

……あれから何年も経つけれど、俺はひとつだけ後悔している事があつた。

それは……あの約束を俺は守れずに、それ以来、彼女に会う事がなかつたのだ。

俺の名前は井上翔太（いのうえ ショウタ）。

平凡な家庭に生まれて、平凡な人生をおくる、平凡な高校2年生である。

「お兄ちゃん」と呼んでくれるとびっきり可愛い義妹がいるわけでもなければ、かいがいしく世話をしてくれる万能幼馴染もないし、さらに部活には美人の先輩がいることもなく、本当に女性と縁のない普通の高校生である。

俺の容姿レベル、そこそこ……イケメンとは言えないがブサイクでもない。

学力も運動神経も普通、まさに特徴という特徴のない普通の平均的な高校生だつた。

自分で言つていて悲しくなる、恋人いない歴＝人生。

女友達のひとりすらいるはずもなく、ちょっとさびしい。まあ、別に女にモテないから辛いわけでもない。

モテる人間にはモテる人間なりの苦労がある。ならば俺はあえてその苦労をしないだけだ。

……ごめん、言つてみただけのただの妬みです。女の子にモテたいです、可愛い恋人が欲しいです。

思春期の男なら誰でも思うそんな野望を俺は抱えながら生きていた。

季節は春、新入生が入り、ようやく高校2年の生活になってきた
4月の後半。

「……人生って何が起こるか分からないから人生なんだ」

「いきなり何だよ？」

昼休憩、食事を終えてのんびりしていた俺にクラスメイトの中山（なかやま）は説教をする口調で語り始める。

「宝くじで1億当たるのも人生、可愛い彼女が突然、恋人になるのも人生。世の中、何が起こるか分からんとは思わないか？もちろん、幸運もあれば不運もあるわけだがな」

「まあ、可能性だけは何でもあるよな」

あくまでも可能性であつて、その幸運の確率は極僅かだろうが。

「だからさ、期待だけはしておけということだ」

「期待はしてもいいけど、実際に起きるとは限らないだろ？」「…

「分からんぞ。いきなり親が再婚して可愛い義妹ができるかもしない」

「……うちの親にそれを期待するのはやめておくよ」

俺は母子家庭で、父親という存在は記憶にもない。

それ自体はもう慣れてかまわないが、あの親が再婚とかいまいちなさそうだ。

「義妹はともかく、恋人はどうだ？」

「これまでまつたく彼女の一人もできていらないんだぞ？ 中山もそりだらうが」

「俺は違う。なぜならば、昨日、恋人がきました」

自信満々に言い放つ中山。

なるほど、妙な事を言い出しそうと思ったらそり言つ事か。彼の憎たらしい程の嫌な笑みに俺はうんざりしながら、

「一応聞こうじゃないか……どんな子だ？」

「年上美人のお姉様だ。バイト先の先輩でさ、昨日、バイト帰りに告白してみたらOKしてもらえたんだよな。相手にされると思わなかつただけに嬉しいぜ。マジでサイコー！」

「そりや、よかつたな……。騙されているんじゃないか？」

「はははっ。お前の妬みなど痛くもないね。羨ましいだろ？ 人生、何が起きるか分かんないんだからよ。お前も何があるかもしれないな。いろいろと覚悟しておけってことさ」

彼女ができたことに喜ぶ中山は置いとくとしても、日常に変化が欲しいのは事実だ。

これまでの俺には平凡という日常しかなく、刺激的な事が何一つない。

「……恋愛か。一度くらいちゃんと見てみたいものだ」

「いいぜ、彼女つてのは……今日も放課後にはデートなのさ」

「あつそ。存分に楽しんでくるといい」

恋人ができた瞬間、優越感にひたり自慢げに語る友人がムカつく
が、それは恋人がいるという事に対しての嫉妬だろう。

恋人が欲しいのなら自分で行動すればいい。

告白するなり、出会いを求めるなりしなければ何も起きない。

俺にはどうにもそのやる気がないんだよな。

本気になれないと言つか、望んでるわりに臆病だというか。

「恋人とかいれば人生、ちょっとは変わるんだろうか」

俺は独り言をつぶやきながら浮かれる友人の惚氣話を聞かされる。
誰かに告白でもされないかな。

できれば可愛くて面倒見のいい美少女を希望する。

スタイルもよければマジで最高。

……なんてな、そんなの宝くじが当たるような幸運的なイベント
でしかない。

俺の人生は残念ながらそこまでラッキーじゃないさ。

放課後、彼女との初デートだと意気込んで帰る中山を見送り、俺
は校内を歩いていた。

「……やれやれ、面倒な雑用を押し付けられた

両手には化学の授業で使われた実験器具。

教師に口直だからとこいつ事で持つていくよつに言われたのだ。化学室にその器具を届けた帰りの事である。

ふと、特別校舎の屋上に出たくなり俺はそちらに足を向いた。何となく外の空気を吸いたくなつたのだ。

ガチャッと重い扉を開けると春らしに陽気に包まれた太陽の光。すっかりと温かくなりはじめた4月らしさを感じる。

「うーん、良い風だな」

俺は軽く伸びをしながら、フヨンスに持たれて空を眺める。ゆづくつと流れしていく雲、そよ風が心地よくて眠くなる。こうしてのんびりとした時間を過ごすのは楽しい。

「……毎寝でもしたくなるな」

俺は欠伸をして、瞳をつむりそうになる。
あちらこちらから聞こえて来るのは体育系の部活の運動する声だ。
俺はどの部活にも所属していない帰宅部である。

中学の頃までは剣道部をしていたが、この学校には剣道部がなく、他の部活をする氣にもなれずに今にいたる。

何か部活でもしていれば少しは自堕落にならずにすんだろう。
アルバイトもしている事はしているが、ほとんどの日は暇だ。
睡魔に負けないように俺は一呼吸してから立ち上がる。

「さて、そろそろ帰るとするか」

青春を無駄遣いしてくる気がして俺はさうとさせじくな。

恋も部活もせず、無駄に過ごし続けている高校生活。

何かこの際、はじめてみたいと思つのは当然のことだらう。

部活は今さらだが、入部してみるのも悪くない。

その時だった、俺の視界に入つて来たのはひとりの女の子だった。彼女はひとり、日陰のベンチに座り、本を読んでいた。少し距離が離れているせいもあり、向こうはまづちらに気づいていない。

「……こんな場所で読書か？」

図書室で読めばいいのに、と思いながら俺は彼女に視線を向け続ける。

ぱつと見て、可愛い子である。

まだあどけなさの残る顔立ち、新入生だらうか……？

「あつ」

少女が声をあげて、俺に気づいた。

こちらを直視して驚いた声を上げる彼女。

よもや、俺を不審者扱いしてきたのではないだろうか？

今の時代、登下校時の小学生に「さよなら」を言つただけで「この付近に声をかけてくる怪しいおじさんがいるので気をつけてくれさい」という通報をされて警告が出される悲しい時代だ。

「挨拶はきつちりしなさい」と教えておきながら人に声をかけられたら無視をしろという、矛盾すぎる今の日本教育と現実に寂しさを覚えるのは俺だけだろうか。

不審者に気をつける時代なのは分かるが敏感すぎないだろうか。

そんな世の中で視線があうだけで気まずくなる。

俺はピンチなのかもしれない。

もしや、俺を通報するのでは？

すみません、可愛いから見惚れています。

悪気なんてひとつもなくて、何かするつもりはないからごめんなさい。

そんな風にビビッてる俺に彼女は本を置いて立ち上がった。真つすぐに俺を見ると、彼女は唐突にある発言をしてくるのだった。

「好きです。私と付き合ってください」

告白の常等句、定番のセリフに俺は呆然としていた。

出会ったばかりの目の前の彼女は微笑しながら俺に告白してきた。すらりとした細身の身体ながら胸のあたりの発育もよし。顔は小顔でどこか猫に似ている可愛さのある美少女だ。その彼女から何がどうなつていきなり告白されているのか。

「……はい？」

俺は出会って10秒の出来事に驚くしかなかつた。

笑顔で告白してきた少女に硬直する俺。

……人生、何が起きるのか分からぬ。

そんな友人の言葉が脳裏をよぎつていた。

第1章：初めての恋人

【SIDE・井上翔太】

人生において告白される経験というのは「ぐく一部の人間だけの行為だと信じてきた。

井上翔太、平凡に生きていた普通の男にはありえないシチュエーションだった。

それが何だ、俺は今、幻想のような現実のど真ん中にいる。

「好きです。私と付き合ってください」

出会つてわずか10秒の美少女から告白された。

「……はい？」

初対面の相手に告白されて、その告白を受け入れる人間はどのくらいの割合だろうか。

漫画とかではよくこういう時には「友達から始めよ!」「ごめん。俺、好きな子がいるんだ」という展開になり、ほとんどの場合、即告白を受け入れる人間はない。

というか、そもそも、事前に心の準備が必要なラブレターで呼び出す展開がないと、本当にびっくりするんだぞ。

「えっと、キミとは初対面だよね?」

悲しいが俺の知り合いに美少女はいない。

記憶にある限り、俺はこの子に会った覚えがない。

「……」

彼女は無言で俺の顔をジッと見る。
そのジト目、俺はドキッとさせられる。
何か責められているような気がするのは気のせいいか?

「え、あ、あの、会ったことがあったっけ?」

「いえ、初対面ですね。私が勝手に先輩の事を知ってるだけです」

……何と、向こうは俺の事を知っていた。

驚く事もないか、好きと告白する以上、誰でもいいわけじゃない
わけだし。

でも、自分が誰かに好かれているなんて考えた事もなかった。
俺はあることに引っかかりを感じて尋ね返す。

「……先輩? といつ事はキミは一年生か?」

「そうですよ。“初めまして”、私は藤原琴乃(ふじわら ことの)
。今年、入学してきたばかりの一年生です」

なあさら疑問だ、俺は一年生と接点なんて微塵もない。
そもそも、知り合いになることがなければ好きになることもない
わけで。

「あのさ、何で俺なわけ……?」

「人を好きになるのに理由は要りますか?」

「……普通はいると思うや。何かきっかけがあるものだろ?」

俺の事をカツコいいと思つたり、すゞいと感じたり……。自分で言つていてものすゞく悲しくなってきたぞ。でも、大抵は容姿だったり性格だったり、何があるよな。

「うーん、別にないです」

「ないんかいっ！？」

思わず地の関西弁になってしまふ。

それはつまり俺には好きになる魅力がないと言つ事ですか？地味にショックだぜ、その一言は胸に来た。

「あっ。先輩が悪いんじゃないんですよ」

そのフォローがきついっす。

彼女は俺に「私が一方的に想つてるだけなんで」と笑う。

「氣づいたら好きだつた。それでは理由になりませんか？」

「…………うーん。納得はできないけど、理解できるような氣がしないこともない」

「そう言つ事です。とこつわけで、お付き合にしてください」

どうやら交際宣言自体は本物らしい。

俺は驚くしかないわけだが、彼女は大いに真面目な様子で、

「ダメですか？先輩つて彼女いませんよね？むしろ、今まで女の子に告白された経験もなさそうですし……いいチャンスだと思いませ

んか?」「

「なぜに初対面の少女に断言されているのか、そこに疑問があるが事実だから肯定しておこなへ。めつむや、泣きたくなるけど。チャンスつて?」

彼女は自分の胸に手を当てて自信を持つて俺に向ひ。

「私つて可愛いと思いませんか?」

「……可愛い、と思つよ。一般的には」

見た目はかなりの美少女と言つていいだろ?。セミロングの黒髪もよく似合つ美少女だ。

「でしょ?、可愛い女の子から告白されてノーと言ふる人はいませんよね?」

「……可愛いのは認めるけど、ちょっとといい?」

俺は頭を抱えたくなる気持ちを抑えながら彼女に聞いかける。彼女が自分に自信を持っているのは人それだからいいとする。だが、いつも押し売り的な告白はどうなのだろうか。

「何ですか?先輩?」

「あのね、藤原さん。俺とキリは初対面だろ?」

「琴乃と呼んで下さい。で、初対面といふことが気になりますか?」

「普通は気になるだろ?」

俺は常々思つていたのだ。

初対面の呼び出し告白においての成功率について。そりや、俺も告白されてーとか思つてましたが、実際になるどびつくりだ。

「もうお互に名前を知り合ひ、こうして会話をした時点で私達は知り合ひです。このままお別れしても、どこかであれば挨拶ぐらいはできる仲です。そ、う、自己紹介をした時点でもはや見知らぬ他人ではありませんから」

「……ものすごく強引な気がするが

「よく考えてくださいよ。先輩が普通に学生生活していく私みたいな美人な女子に告白される可能性はほとんどありませんよね?」

グサツ、痛いところをつかれた。

俺の人生でそんな経験がないのは事実だ。

しかし、それを女子に言われるのは本氣でキツイ。

「恋人が欲しいとは思つたことありません?それとも好きな人がいるとか……?」

「そんなことはないけど」

「私、こ一みえて、スタイルも自信ありますよ?先輩を納得されらるると思います」

胸元を強調させる仕草に俺はドギマギする。

本当にこの子が可愛いのは認めます。

「……俺って恋人がいたことないからさ。そんな風に告白もされたことないんだよ」

「だったら、私は先輩の初めての恋人ということですね」

「何でそこまで自信があるんだか」

「ちゃんと“自信”持てるだけの努力しますから」

満面の微笑みで言い切る琴乃さん。

すげえよ、この子、普通なら自意識過剰だと言いたいが、努力しているという意味では否定できない。

何かちょっとびり尊敬できただぞ。

やっぱり、自信つていうのは努力がなければダメなんだな。

「……琴乃さんつてすごいな」

「呼び捨てでいいですってば。恋人同士なんですし」

「じゃ、琴乃ちゃんで……といつか、まだ恋人じゃないから」

「今、まだと言いましたね? ということは?」

恋する女子つてす』』としか言ひようがない。

ああいえば、いつ責めて来るのでこちらは大変だ。

そもそも、告白されてーと思つていた俺には断る理由なんてひとつもないわけだ。

人生つて何が起こるか分からない。

そう考えてみると、俺は一つの結論を出す。

「分かったよ。その、俺と付き合つてみる……？」

「はいっ。それじゃ、今日から恋人同士ですね。よろしくお願ひします」

俺の返答に嬉しそうに彼女は頭を下げる。

……何だらう、こんなにも自分が誰かに好かれていた現実が喜ばしい。

人生で今まで誰ひとり付き合つたことのなかつた俺に生まれて初めての恋人ができた。

この恋の始まり、俺にとってはただの恋愛じゃないのだが……それを知るよしもない。

俺にとって初めての彼女、琴乃ちゃん。

彼女は自信家であり、積極的な女の子である。

「井上先輩、お互に理解を深めあう必要があると思いませんか？」

帰り道、俺達は同じ方向に家があるようなので一緒に帰宅する」と。

彼女の方が家が遠いので中学は別だったみたいだ。

「それじゃ、さっそく先輩の家に行つてもいいですか？」

「ぶーつー?」

俺は思わぬ発言に吹く、いきなりかい！？

「や、そういうのは、もつ少し関係を深めてからでいいのでは？」

「そうですか？まずは家族の方に」挨拶をするのは当然でしょう。

「……あっ、そっち。そっちでしたか、すみません」

男の子ですから変な方向に考えてしました。

琴乃ちゃんは「変な先輩？」と不思議そうにいう。
彼女の知識ではその辺はまだ想定していなさそうだ。

「俺の家に来るのか？」一ん、家族って言つてもなあ

俺の家族、つまりは俺の母さんなわけだが。

母子家庭である俺は母親と一人暮らし。

母さんは夜勤も多い地元病院の看護師なので、家にいついるか分
からない。

「先輩つて母子家庭ですよね。ぜひ、挨拶しておきたいんです」

「……そんな期待されても、普通の人だが……ていうか、何で知つ
てるんだ？」

俺はまだ話していない自分の事を知る彼女に驚く。

「ふふつ、先輩の事なら何でも知つてますよ

彼女は手元に手帳をちらつかせて言い放つ。
ばっちり情報収集されてるわけね……何かすごい印象から怖い印

象に変わったぞ。

「一応、家に電話してみる」

母さんに連絡すると今日は家にいるようだった。

『彼女できたの？連れできなさいよ、母さんにも見せて欲しいわ』
そう言つて母さんの許可が下りたので俺は琴乃ちゃんを家に連れていくことになる。

何ていうか、展開のスピードについていけない自分がいた。
ほんの数時間前まではこんな可愛い恋人がいなかつたわけで。
俺は隣を歩く彼女を横目で見つめながら思つ。

「まあ、いいや。深く考えないよつじよつ」

実際、彼女ができる事はものすごく嬉しい事だ。
ただ、相手の素性を知らないのは問題かもしけないが、そもそも
俺には相手を選ぶこともないのだ。

どんな経緯であれ、美少女とお付き合いでできた今日の俺は幸運だ
らう。

恋人が出来てから1時間経過、せつやく親に紹介することになり
ました。

第2章・意外な接点

【SHIDE・井上翔太】

俺の住む家は築15年のマンションの一室だ。

8階建てマンションの3階、エレベーターを待つより、階段の方が若干早い。

俺達は階段をのぼりながらそれの事を話していた。

「先輩つむね母さんとふたりぐらしなんですね？」

「やつだよ。親父という存在は記憶にもない。「くなつたって話は聞いてないから、まだ生きているんだやつが」

「いかで生きてると思われる父親に会いたいとか思つた事もない。物じこじろついた頃から母さんとのふたりぐらしだ。

他の家とは違う、そういう事は感じているが、父親という存在を知らない以上、それにどれだけの存在価値があるのかも分からぬ。

「まあ、今時、片親つてのは珍しくないからな。琴乃ちゃんは？」

「私は両親いますよ。お父さんとは普通の関係ですね。嫌いってわけでもあつませんか？」

「やつなんだ。おつと、ついたよ、これが俺の家だ」

互いの家族環境を何となく察した俺達は家に着いた。

「先に言つておくけど、汚い部屋だから。一応、リビングはマシだ

けどね

まずはもう断つておかねばいけない。

女の子を家に上げる日など来ると想像したこともなかつたからな。俺はドアを開けて思わぬ光景を目にする。

「ただいま……って、なんじゅーじゅー…？」

いきなり俺を出迎えたのは、綺麗に掃除された部屋だった。

おかしい、今朝まではこんなに綺麗ではなかつた。

普段なら「ミミ」が散らかっている汚い部屋なのだ。

なぜなら、うちの母は掃除をあまりしない、といつか苦手な方だ。

俺は適度に片付けてるが、それを越す勢いで散らかすのが母なのである。

「あ、ありえない。あの汚い部屋を散らかすことしかできない母さんが部屋を整理していたなんて……ぐまおー！」

俺の顔面を直撃するのはスリッパだった。

それを投げた張本人、俺の母さんは睨みつけながら叫ぶ。

「そこ、失礼なことを言わない。非番で気が向いたから朝から掃除していただけよ」

「やつだつたのか。」めんなさい。母さん、えつと、その……

親に彼女を紹介するって難しいぞ。

俺が何と言つたか悩んでいると彼女の方から自己紹介する。

「今日から井上先輩の恋人になつた藤原琴乃ですっ」

「……あら？えつ、琴乃ちゃん！？」

「何だ……母さんがびっくりしているぞ？」

彼女は琴乃ちゃんの姿を見るや、びっくりした顔で迫る。

「久しぶりねえ、琴乃ちゃん。高校生になつたんだ？」

「はい、おば様。お久しぶりですね」

……はい？

軽く抱き合つたり、懐かしそうに笑い合つ。

どうやらふたりは顔見知りらしい。

果然とする俺をよそにふたりは話を始めてしまつ。

「翔太の恋人ってことは……ふたりは付き合い始めたわけ？うわあ、ホントに？」

「ええ。今日から付き合い始めることがになつたんです。まずは報告したくて」

「そりなんだ。嬉しいわ、琴乃ちゃんがそういう気になつてくれて。翔太つて全然、女の子と縁がなくて。彼女の一人くらいになつたら連れて来るんだつて心配していたのよ。その相手が琴乃ちゃんだつたなんて……」

おーい、勝手に話を進めるな。

俺を置いてけぼりにしないでくれ。

俺は放置され気味の寂しさを感じながら彼女達に、「ふたりは知り合いなわけ?」と尋ねてみることにした。

すると、母さんは「はあ?バカじゃないの?」的な視線を俺に向ける。

「何言ひてるのよ、琴乃ちゃんよ?」

「いや、俺の方こそ何言ひてるの?だが?」

「おば様。実は先輩は事情をあまり分かっていない様子です

「やうなの?バカだと思つていただけどホントにバカなのね

何で俺をここまでバカにされなければならないのだ。
場所を変えてリビングに連れてていき、椅子に座りながら話を続ける。

母さんは紅茶を淹れながら俺に説明する。

「翔太、琴乃ちゃんのことを忘れたの?」

「忘れたも何も、今日、初対面なんですが?」

「そんなわけないでしょ。はあ、この鈍男は……」

何かえらい言われようのですな。

「昔、会つたことあつたっけ?」

初対面だと彼女は俺に言つたはずでは?

「本気で覚えてないのね。記憶力ないわねー、だからテストで毎回赤点ギリギリなのよ」

「つるさこなあ。そんなことはいいから説明してくれ」

「翔太、子供の頃に預けてもらつていたの覚えてない？」

母さんに言われて俺はある出来事を思い出す。
あれは子供の頃の話である。

俺は一時期、母の親友に預けられていたことがある。
あれは確か俺がまだ小学1年か2年の夏休みの事だつたろうか。
母さんは看護師に復帰をしたてで忙しく、ひと夏の間を彼女の親友、藤原のおばさんの家族と共に過ごした記憶はある。

「藤原のおばさんって理沙（つさ）の事を呼んでたの。忘れた？」

「あーっ！？初日から“おばさん”ではなく“おねーさん”と呼びなさいと子供心に恐怖感を植えつけられた、あの入か！？」

「……そういうの、理沙らしいわね」

「すみません、母は歳をめっちゃ気にする人なので」

母の親友である藤原のおばさん、もとい、理沙さん。
皆が俺を受け入れてくれてひとつ夏とはいえ、楽しい思い出になつた。

「もしかして、あの時の？」

「そうよ。翔太を預かってくれていたのが、琴乃ちゃんの母親。だから、貴方達は小さな頃によく遊んでいたじゃない。忘れちゃうなんてひどいわねえ？」

「……昔のことですから。それに先輩の記憶力ってダメそうですし」

ひどい言われようだ！？

覚えていなかつたのは俺の責任だが、その失望感からなのか、諦めに似た彼女の呆れた表情に傷付くつての。

それともやつぱり、怒つてるのですか、琴乃ちゃん！？
すっかりと忘れていたのは俺が悪いのだが……。

『約束してよ。また会えるつて』

そつか、琴乃ちゃんつてあの時の女の子だったのか。

時々、夢に出てきては罪悪感を思い出してしまった少女。

楽しい思い出だつたからこそ後味の悪さみたいなものだろうか。
“記憶”では『琴乃ちゃん』と彼女の名前を呼んでいたことすら覚えていない。

子供の頃の話だ、小学生の頃のクラスメイトの名前を言えと言わ
れても覚えていないのと同じことで、仕方ないことなのかもしけな
い。

「私は年に何度か理沙に会うついでに琴乃ちゃんにもあつてるけど、
翔太は本当に10年ぶりくらいの再会かしら？一緒に高校に通つて
いたのね」

「はい。私も最近、偶然に知ったんですよ」

琴乃ちゃんは紅茶を飲みながら俺を見つめる。

昔の彼女の事を思い出す。

いつも笑顔がたえない子で、元気いっぱいの少女だった。本当に懐かしい記憶だ……って、ちょっと待て。

「それじゃ、俺と初対面って言つたのは嘘つてこと?」

俺が琴乃ちゃんに問いかけると彼女は頷きながら、

「どうせ、先輩は私の事なんて覚えていないでしょ」「から」

「どこの寂しげな表情を見せて言つから俺にはチクチクと罪悪感が……。

「ホント、私の息子ながらダメなやつ。しっかりしなきよ」

「ううせじよ、母さん。その、琴乃ちゃん。全然覚えてなくて、ごめんな?」

「気にしないでください。少しは思い出してもらえましたか?」

言われてみればどことなく面影が残ってる。

あれから10年、記憶の中の少女は本物の美少女へと変わつていった。

「そうか、あれから10年も経つんだな

彼女と過ごしたひと夏の間は多くの想い出を作った。今、また俺の前に現れて、しかも恋人になったなんて。何だか信じられないと言うが、夢みたいと言つた。

「でも、これからはまた一緒にですね」

彼女の笑みに俺は許された気がした。

その後は母さんが夕飯でも食べていきなさいと勧めて（ほとんど強引に）、彼女は家に連絡してみると席をはずす。母さんは夕食の準備を始めながら俺に言つんだ。

「……翔太が琴乃ちゃんを彼女として連れて来る日が来るなんてね。私としては嬉しい限りよ。いい子なんだから大事にしなさいよ。浮気とかしたら、私が彼女の代わりに翔太をぶん殴るわよ？」

「暴力反対！？それなりに努力するけどさ。ホントに今日会つたばかりなんで混乱してるんだよ」

「まあ、あれから私も忙しくて、全然、翔太を理沙のところへ連れていってあげなかつたからね。ちゃんと会わせてあげなかつた私も悪いか。それにしても、琴乃ちゃんもずいぶん明るい子になつたわねえ。高校デビューつてやつかしら」

そう言つて、母さんはフライパンを取り出して油を入れる。彼女の言葉に俺は「？」と疑問を浮かべる。

「明るくなつたつて？」

「琴乃ちゃんつて昔はものすごく大人しい子だつたのよ。覚えてない？」

「……いや、アレを大人しいと言うとどれが大人しいか分かんないけど。俺の覚えている限り、小さな頃の琴乃ちゃんは明るく元気な

子だったぞ。俺もよく振り回されていたくらいだからな

俺よりも体力もあって、いつも後ろを追いかけるのが大変だったのは覚えてる。

『遅いよーっ。そんなんじゃおいて行つけやつからねー。』

大人しいとか、そんな言葉の似合う子ではなかつたのは確かだ。

「……ふーん？私の前と子供の前じゃ違うものかしら。それにしても、琴乃ちゃんが翔太を好きになるなんて……。あとで理沙に電話して報告しておいてあげる。きっと、理沙もまた翔太に会いたいって言つに違ひないわ」

「また機会があれば挨拶にでも行くよ」

俺は母さんにそう言つと、部屋に戻つて来た琴乃ちゃんに話しかける。

その日の夕食は懐かしい過去の話をしながら3人で盛り上がった。

第3章・想い出の少女

【SHIDE・井上翔太】

……。

小学2年の夏、俺は母の都合で母の親友、理沙おばさんとの家に預けられた。

夏休み、まさにひと夏だけの家族体験。

『へえ、挨拶もしつかりしてるし、可愛い子じゃない』

『よろしくおねがいしまーす。おばさん』

『おばさんじやないわ。いい?私の事はおねーさんって呼びなさい。いいわね?』

俺にグイグイと迫る彼女の迫力に負けて俺は『お、おねーさん』と呼びなおす。

顔が怖かったよ、ホントに。

『よろしい。翔太君、遠慮しないでくつろいで。私の娘も呼んでくるわ』

理沙おばさんが連れて來たのはひとりの可愛らしい女の子。

俺の方を見るとすぐに近づいてきて笑顔を振りまく。

俺はその子につられて笑みを見せながら囁つんだ。

『夏の間だけど、よろしくね。俺は翔太って言つんだ。ヤハハ?』

彼女は長い髪をそつと揺らしながら、

『私は……私は琴乃だよ。仲良くなれよ、翔太君っ！』

それが俺と彼女のひと夏の思い出の始まり。
淡い初恋の記憶。

思い返してみれば、確かに琴乃ちゃんと俺は会っていた。
そういうや、そうだったなあ。

初対面の記憶を思い出しながら、俺はエレベーターのボタンを押す。

「先輩、わざわざ送つてくれなくともこいですよ？」

「そうはいかないだろ。こんな時間になつちつたし

時計の時刻は8時過ぎ、さすがにひとりで帰すには忍びない。
俺達はやつてきたエレベーターに乗りながら一階にたどり着く。
琴乃ちゃんの家つてここからどれくらい？

「歩いて20分つてところでしょうか？普段は自転車通学なんです
……今は壊れて修理中なんですけどね」

「せうなんだ。まあ、中学の学区違いで遠ことは思つてたけど

（ついで俺の家から離れた場所の居住区は中学の学区が違う。）

同じ中学だつたらもつと早く再会できたかもしないな。
俺はそつ思いながら自転車を出す、2人乗りの方が早い。

「自転車で送るよ。それならいいだろ?」

「……はいっ」

遠慮がちな彼女に俺はそつぱつと、後ろに乗るように指示する。
ちよこんつと座る彼女を確認してから俺は自転車を漕ぎだした。
夜の街並みを自転車はゆっくりと駆けていく。

「一応、俺の後ろにでもつかまつておいて」

「……ふふっ、何か雰囲気のいいシチュエーションですね」

彼女の言葉に俺は照れくさくなる。
そー言わると、照れるじゅん。

「あのや、琴乃ちゃん。言いそびれていたんだけど、『ごめんな』
「何がですか?私を忘れていたことですか?」

「それもあるけど。覚えていないか?俺たち、約束しただろ?」

そう、俺と琴乃ちゃんは約束をかわしていたのだ。

『約束しよ?また会えるつて』

そう言つたのに、俺は彼女に会えずについた。
忙しい母さんの都合もあつたんだが、毎年の夏休みは友人と過ご

すことを優先してたので、次第に歳を重ねる」とに約束すら忘れてしまったのだ。

それに機会がなかつたというのは言い訳だろ。」

家の距離も、昔は遠いように感じたが、今なら普通に行ける距離だ。

子供だった俺が忘れてしまつた約束、その罪悪感が今さらながらにわいてくる。

「……約束、ですか？」

琴乃ちゃんは思い出すように小さな声でささやく。
「覚えていないかな？」

「え、えっと……」

彼女はいいよどむと、突然、「きやつ！？」と叫ぶ。
少し石に乗り合わせてしまい、自転車の車体が揺れたためだ。
バランスは崩さなかつたが、振動は強く、背後の琴乃ちゃんに声をかける。

「あつ、大丈夫？悪い、2人乗りも慣れてなくて」

「いえ、大丈夫です。……その、約束つてなんの約束ですか」

「そりや、そうか。
いきなり言われても、どの約束の事が分からぬよな。

「琴乃ちゃんと別れる間際に『また会おうね』って約束したのを覚えていない？」

「……」

今度は彼女が黙り込んでしまった。

あれ、覚えていないか？

これだけ覚えていた俺の記憶違いといつもあるまい。

「……約束、思い出しました。そういう約束もしてましたよね？」

「ああ。10年も前だけども、ホントに」「めんな。俺、その後、会いにいけなくてさ」

会いに行くと言ったのに、約束を破つてしまつた。

彼女に実際に会つまで思い出せもいたのだから仕方ない。素直に謝ると彼女は「……約束」と小さくつぶやく。

「約束は気にしてません。また会えただけでいいです」

「琴乃ちゃんはいつも俺に気づいたんだ？」

「入学式の後ぐらいでしょ？ どことなく面影があるなって……それで、知り合いの先輩に名前を聞いたら本当に井上先輩だったんです。その、今日の告白、変な風になつて『めんなさい』。変に興奮して焦っちゃつたんです」

なぜかいきなり謝られた。

そりゃ、出会つて10秒の告白には驚いたが……。

今は事情も大体分かつてるんでそれ程、変とは思わない。

「私もびっくりしたんですよ。いつか機会をみて挨拶をしようとは

思つてましたけど、あんな風に会うとは思つていませんでした。先輩の事、好きだったんでつい口から出ちゃったんですね。強引に迫つたりしてびっくりしたでしょ？普段はあんなことしないんですけど、勢いつて怖いです」

「……俺の事をねえ？」

「先輩は覚えていないみたいでしたけど、私はずっと先輩に会いたかったんです。……ずっと、好きでしたから」

それだけ愛されていると俺も嬉しくなる。

でも、10年か……長いよなあ？

あの小さかった子（俺も同じくらい）の年齢だが）がこれだけ美少女に成長するくらいの年月。

俺達の人生では、10年と一瞬で詰つてしまはるすぎる時間だ。

「……ありがとう」

「え？」

俺は転車を止めて、振り返つてもう一度彼女言った。

「 ありがとう。好きでいてくれて」

俺の言葉に彼女は少しだけ瞳を潤ませる。

「 あとと、俺は琴乃ちゃんの事を好きになる。そう思えるんだ」

……こういう形で始まる恋愛があつてもいい。

俺はそう思いながら、「嬉しいです」と喜ぶ彼女に微笑んだ。

「あつ、先輩。じいでいいです」

彼女が俺を止めたのは住宅街のど真ん中、その家の外見に見覚えがある。

俺の家から自転車で15分程度、あまり来ない地域だがこれほど近かつたとは……。

「送ってくれてありがとうございます」

「いいよ、じねぐらー」

「家に寄つてこきますか？母もこると思こますけど？」

「いや、今日は遅いからもうやめておくよ。また別の日こでも挨拶にくるから」

というより、理沙おばさんに会うのは心の準備がいりそうだ。の人もうちの母さんの親友ってだけあってすごい人だからな。顔を合わせるのは日を改めることにしよう。

「あの、先輩。携帯電話の番号を教えてもらつてもいいですか？」

「携帯？いいよ」

俺は携帯電話を取り出して、赤外線で番号を交換し合ひ。

「先輩の番号……メールとかしても？」

「全然いいけど。そういうのって、何か恋人らしいな」

そう言つやり取り自体に憧れたりする。

琴乃ちゃんは玄関の前で俺に向き合つた。

「井上先輩。今田は本当にありがとうございました。先輩と恋人になれたこと、本当に夢みたいで……。私、変なところもあるかもしれませんけど、よろしくお願ひします。先輩のために頑張りますか」

「うう

女の子にそう言われて、断る奴、一回手をあげてみてくれ。
そいつは男じゃないね、俺は男だからもううん受け止める。

「俺の方こそ、琴乃ちゃんに会えて嬉しい。俺も恋愛経験ないんで不慣れだけどな。お互に、楽しくやつていけたらいいな」

「はいっ」

俺達は玄関先で別れて、再び俺は自転車に乗る。
しばらくしてから俺の携帯電話に一通のメールが届いた。
相手は琴乃ちゃんから、さっそく送つててくれたようだ。
中身を見て俺はふつと顔をにやけさせる。

『 先輩。大好きです。よろしくお願ひしますねっ』

その一言だけで十分だった。

俺の中にも彼女を想う気持ちが芽生え始める。

俺はきっと彼女を好きになる。

そう確信できるだけの気持ちが溢れて来る。
こういう恋の仕方もあるのだ、と俺は感じていた。

「人生、何が起こるか分からぬ。本当にそうだな」

数時間前の俺とは人生が変わったとはつきり実感できる。
初めて女の子に告白されて、恋人ができた。

その子は過去に一緒に遊んだことのある淡い初恋の相手。
また再び出会つただけでなく、恋人になれるなんて……。

「……恋愛か。俺も本気でやってみるか」

爽快な気分で、春の夜の道路を自転車で走る俺は期待に満ち溢れ
ていた。

第4章・恋人の温もり（前編）

【SIDE・井上翔太】

人生＝恋人いない歴の俺に初めて彼女ができました。
という事実は思っていた以上に、俺にとつて影響のある事だった。

「……恋人ねえ？」

朝、目が覚めた時にメールがさっそく来ていることに気がつく。
相手は俺の恋人になつたばかりの女の子、琴乃ちゃんだ。

『おはようございます、先輩。今日のお昼に会えませんか？』

さつそく昼食の誘いをされるとは……。

何ていうか、嬉しくなるじゃないか。

俺も男だから女の子と楽しく会話したりするつてのは憧れだった。
あいにくと相手には全く恵まれずにいたのだが。

「……夢じゃなかつたんだな」

俺は携帯メールを眺めながら独り言をつぶやく。
俺に恋人ができる経緯を思い出す。

あまりにも突然であつといつまの出来事だった。

「しかも、相手はあの子だった、と。偶然にしちゃ出来過ぎだな」

遠い昔の記憶、10年も前の想い出だ。

思い出の少女といえば、ロマンティック度もあがるだろ？。

実際は本当に近くに住んでいながらこれまでその存在を忘れていた。

「母さんも言つてくれればよかつたのに」

同じ市内に住んでいるのならばまた会つ事も容易にできた。
その事を尋ねなかつた俺も悪いが、母さんだつて教えてくれる事はできたはずだ。

「……なんて愚痴つても仕方ないね」

俺はさつさと制服に着替えながら、彼女の事を考える。
会えなかつた10年の間に彼女も俺も成長した。
琴乃ちゃんは美少女になつていだし、俺だつて少しほは男らしくなつた。

過ぎ去つてしまつた時間は取り戻せない。
どうしても、取り戻せないのなら今を大事にしていこう。

「やべえ、俺、マジで意識してるじゃんかよ」

思いのほか、俺は琴乃ちゃんに惹かれていたようだ。
好きとか言つてくれる相手、今までいなかつたからなあ……。
女の子に言つられて嬉しくない奴なんていないや。

俺は顔がにやけるのを止めながらさつさとリビングへ行くことにした。

リビングではのんびりとテレビを眺めている母さんがいる。
朝食は既に作ってくれているようだ。

「ん、おはよう。翔太」

「おはよう。今日は仕事じゃないのか？」

「夜勤よ。あんまり夜更かしせずに寝なさい。夕食はこいつものとおりね」

「分かつてゐるよ。看護師つてのも大変だな」

看護師として病院勤めをしている母さんが夜勤でいないのも珍しくない。

今までがそうちだつたように、これからも変わることがない生活のひとつだ。

「昨日、理沙と電話したんだけど、翔太に会いたいって言つてたわよ。琴乃ちゃんが翔太の事を好きだつたのもびっくりしてた。理沙も想像外だつたみたいよ。貴方達の組み合わせってのはね」

「……俺もびっくりしてる」

「ホントよね？10年よ、10年。片思いし続けてたなんて知らなかつたわ。琴乃ちゃんとは年に何回かあつてはいたけど、素振りすらみせてなかつたし……。こんなことなら機会を見つけて何度か会わせてあげればよかつたわ」

母さんは「だからと言つて、翔太に会いたいなんて言われても困るけどね」と失笑する。

我が家ながら息子の存在価値を過小評価していいだろ？

かなり失礼な人である、怒らせると怖いので反論はしないでおく。

俺は朝食のパンを食べ終えて、さつと学校へ行くことにした。

「それじゃ、行つてきます」

「いってらっしゃい。……翔太、女の子の扱いが下手のは仕方ないとしても、泣かせるようなことだけはしないでよ?」

「俺はそこまで粗暴でもない。ちょっとは息子を信用してくれ」

「一体、俺をどんな目で見てるのやう。

」
「こち
うちは泣かせるどころか、どう接しようか考
えてドキドキして
るつての。

学校に登校してクラスにつくと、友人の中山が何んなりとした様子で椅子に座っていた。

肩を落として机へ視線を落とす彼。

昨日の鬱陶しいくらいのご機嫌さは微塵もない。

「中山、どうした?」

声をかけるかどうか、俺は判断に迷ったが一応かけてみることにする。

彼は二つに頭を上げると今にも泣きそうな顔をする。

「よう、井上。人生ってのは何が起きるか分からぬから人生だよな」

「……そりゃ、昨日のお前のセリフだろう」

出会いから10秒で告白されたりするのも人生だつて。

ホントに人生って分からるものだと俺も思つたさ。

「何だ？ 昨日は彼女と初デートを楽しんできたんじゃないのか？」

「つまおおおおお、初デート…………」

いきなり声を荒げて彼はぐしゃっと髪をつかみながら頭を抱える。クラスメイトは何事かと彼に冷たい視線を向けた。

「ふつ、人生とは……悲しいものだ」

一瞬で場の空気を変えたお前の存在は確かに悲しい。

「で、何があつた？ 聞いてやるぞ？」

「さつそく、恋人にふられました。あつさりと」

「……ご愁傷様。何が原因だ？」

見事に敗れた中山、まさか交際2日で終わる恋とは驚きだ。

「交際自体が嘘だつたとかではない。騙しもなればどつきりでもなかつた」

「それじゃ、何でふられたんだ？ 元彼でも現れたか？ それとも……？」

「そういうんじゃない。昨日、繁華街と一緒に歩くと言つ『定番』デートをしてみた。腕組んだりしてそりゃあ、雰囲気も良かつたんだよ。だが、ある一軒の店が俺の人生を変えてしまつたんだ」

何か複雑な理由でもあったのか？

「お店?どこに行つてきたっていうんだ?怪しい店か?そりや機嫌を損ねるな」

「そんなところ行くか。……ペットショップだ」

「ペットショップ?動物の?何でそこで喧嘩するんだ」

なぜ事件が起きるのか俺には到底理解できないんだが?
中山は遠い昔を見つめる顔をしながら、

「人には譲れないものってのがあるだろ。俺もそうだった。彼女はペットショップに入るやいなや、犬コーナーに近づいて楽しそうに見ていた。だが、俺は猫派だ。犬なんて存在そのものを受け入れられない」

「…………はあ？」

「お前には分からぬのか?まあいい、お前に言う事ではないな。
ともかくだ、俺は猫派、彼女は犬派だったわけだ。俺達は恋人になつて初めて意見が対立した。言い争いに発展してしまつぐらいにな

……その結果は……うおおおお

うなだれて泣き崩れる中山、クラス中から哀れな視線を向けられる。

よくわからないがお互いに譲れない——(?) 犬派と猫派という言い争いが修復不可能な亀裂を生んだ。

それで中山は落ち込んでるわけか。

「しょーもないな」

喧嘩した理由はおことくとしても、付き合つて一日でそれとは嘆かわしい。

俺はつまらない」とで時間を割いた事を後悔しながら彼に向ひ。

「そんなお前に報告するのは酷かもしれないんだが……」

「しれないんだが?」

「実は昨日、俺に彼女ができたんだ。美少女の後輩に告白されてさあ

中山ことじめとばかり言つてやると「かくしょーっ！」と彼の叫び声がクラスに響いた。

昼休憩になつた、これほど時間が待ち遠しかつたのも久々だ。俺はせつせつと片付けて食堂へ行く準備をする。

「そういや、お前の恋人つてどんな子なんだ?」

何とか復活した中山は興味ありげに俺に向ひ。
自分の失恋のショックを俺をからかう事で憂を晴らしする事にしたらしい。

「どうせ、美少女って言つても冗談だろ? なあに、お前の事だ。そ

「何を勘違いしているか分からんが、めっちゃ失礼な奴だな」

「普通の子でも可愛いつて言ひたやうだからな」

俺はともかく、女の子相手に失礼極まりない発言だ。

「気になるなら見せてやるよ。彼女、この部屋に寄つていくから」

1年の教室は3階で、2階のこの教室へ降りて来る事になつて
いる。

しばらく待つていると教室に「ちりをつかがうひとつの少女がや
つてくる。

「……お待たせしました、井上先輩っ」

琴乃ちゃんは俺に氣づくと彼女は安心したような表情を見せる。
他クラスでしかも、学年が違えば緊張もするだろう。
とびっきりの美少女の登場にクラスはざわつとした雰囲気になる。

「琴乃ちゃん。それじゃ、行こうか」

「ちよ、ちよっと待て!？」い、井上、マジか。その子がお前の恋人
だとあつ!？」

「そりゃ……昨日から付き合つことになつた俺の恋人の琴乃ちゃん
だ。ホントに可愛い子だろ?」

俺がやつと琴乃ちゃんは頬を赤らめる。
あー、思わず抱きしめたくなる可愛さです

「先輩にやつて言つてもうられると嬉しいですね」

「……言つた俺も照れくさいけどな。混む前に食堂へ行こうか」

俺の後ろで啞然としている中山、面白げから放つておいつ。

「井上の恋人が……そんなバカな……本物の美少女だと……嘘だ、そんなはずがない！？」

彼の嘆きの叫びに耳を傾ける必要はない。

「何でアイツが、あんなに可愛い子と……な、なぜだあーつー！」

くくつ、勝つた。

俺は内心ほくそ笑みながら、ショックで落ち込んだ中山を放置して歩きだす。

「あの、いいんですか？ 先輩の知り合いでは？」

「いいんだよ。あんなのは放つておいていいんだ

他にもクラスメイト達の羨ましそうな視線を感じる。
美少女が恋人ってのはそれだけで価値があるな。
俺は優越感にひたりながら彼女に笑いかける。

「……そういう聞いてなかつたが、琴乃ちゃんは食堂派？ それとも弁当派？」

「気分で違いますよ。私、自分で弁当を作つてるので。今日は先輩と一緒に食堂で食事したいと思つてます。先輩と一緒に食事した

いんです。昨日から楽しみにしてたんですよ

もう言つてもいいと、いつまでもたのしくなつてくれるじゃないか。

俺たちが離れていた時間を埋め合わせるくらいに仲良くなればいい、それが今の俺の偽りのない気持ちだ。

琴乃ちゃんと恋人になつて2日目。

恋人がいるつて素晴らしいことだと俺は実感していた。

第5章・恋人の温もり（後編）

【SHIDE・井上翔太】

授業が終わってから俺は中庭で琴乃ちゃんを待っていた。
恋人として付き合い始めてから2日目。

今日は俺が理沙おばさんに挨拶に行く番である。

「理沙おばさんか」

お世話になつてた頃から悪い人ではないけれど、怖い人ではある。

「お待たせしました、先輩。掃除が長引いてしまって」

「いいよ。それじゃ、行こうつか」

琴乃ちゃんは今日も歩きりじいので、俺の自転車の後ろに乗せて
あげる。

「自転車はまだ直らないのか？」

「今日ぐらには直つてると思います。お母さんが勝手に乗つて壊
したんですよ」

「……そりや、大変だな。今はバスで通学しているんだ？」

「そうですね。さすがに家から歩くのは遠いですから

バス通学の方が楽だけどな。

俺も雨の日はバスで通つ」ともある。

「先輩、少しだけ寄り道してもいいですか？」

「寄り道……？」

「向かってもらえれば分かります」

彼女の案内するままに俺は自転車を走らせる。
自転車の一人乗りをしてくると背中の方に意識が集中する。
俺の制服を掴む彼女の手。
もうちょっと、ぎゅっとした感じで掴まつてしまふると俺としては嬉しいのだが。

男の野望など彼女は気にするはずもなく、話を続けて来る。

「昨日、夢を見たんです。先輩の夢でした」

「……どんな夢だったんだ?」

「先輩との思い出のことです。私も昔のこと、それほど覚えているわけじゃないんです。さすがに時間が経つてますから……」

俺が小学2年生の時は、1歳年下の琴乃ちゃんは小学一年生。
覚えていろいろと語つ方が無理なような気もする。

でも、昔の記憶つて成長した時の記憶より印象的に覚えているものが多い。

なんとなく、ではあるけれど、イベントとして脳が記憶している。
俺の住むマンションの前を過ぎ去り、しばらく進むとあまり馴染みのない住宅地に入る。

ここから先はあまり俺も来たことがない。

それゆえに、自転車で数十分という距離ながら琴乃ちゃんに会つ
機会もなかつた。

「夢で見た光景。久しづびりに私も行つてみたい場所があるんです。
いいですか？」

「もちろん。俺もどんな場所か気になる」

彼女が案内したのは彼女の家付近にある高台の公園だつた。
整備された森林公园で、俺達は自転車から降りて歩く。

「昔、よくふたりでここ遊んだよな？」

「ふたりで……。あ、はい。家から近いのでよく遊びに来てました。
お母さんが子供は家より外で遊んできなさいって言つたんですよ。
夏休みでしたから暑くて大変でした」

「そういや、そうだつたか」

小さな頃の俺はあまり外で遊ぶタイプではなかつた。
住んでるマンションにも歳の近い子はいなかつたので、遊び相手
がいなかつたんだよな。

だから、琴乃ちゃんと遊んだ時間は特別だつたので記憶に残つて
いる。

しばらく進むと高台から街全体が見下ろせるようになつていた。

「展望台公園か。いい景色じゃないか

「先輩が預けられてた時にはよくここに来ていたんですね」

琴乃ちゃんと遊んだ思い出の場所のひとつ。

かくれんぼしたり、はしゃいで遊んだのはこの公園だった。

見渡す限り、それほど記憶と変わらない。

遊具があつて、展望台がある普通の公園だ。

「懐かしいな。どことなく覚えているよ。昔はもっと大きなイメージがあつたが」

「先輩も私も成長しますからね」

大人になつて視点が変わると見える世界が変わつてくる。
都市化した駅前周辺と比べて比較的に緑の残る森林公园。
俺が適当に歩いていると目の前に大木が見えた。

「あの木……そうだ、あれだ」

俺は近づくといの公園で一番大きな木の前に立つた。
そつとその木に触れて過去を懐かしむ。

「懐かしい木だ。よくこの木に上つたっけ」

「先輩。無茶して落ちて泣きそうでしたよね？」

「……実際、一回落ちて泣きそうになつたけどな」

女の子の前で泣くのは恥ずかしかつたので必死にこらえた記憶がある。

今となつてはそれほど高い木ではないのだが、あの頃は上るものも大変だった。

……。

『待つてよ、琴乃ちゃんっ！危ないって』

彼女と公園で遊んでいた時、俺達はこの木を見つけた。巨木で子供がのった程度ではびくともしない。最初に上りうとしたのは、琴乃ちゃんの方だった。

『これくらい簡単に上れるでしょう。ほらっー』

彼女は木に手をかけて上り始める。

器用に木のぼりした彼女は大きな枝の上に座った。

『翔ちゃんも早くきてよ。ここからすいっく眺めがいいよ』

『……無理だつてば』

『男の子なら大丈夫。早く上つておいで』

俺は仕方なく彼女を追つよつに木に登り始める。

それまで木のぼりなど一度も経験がないので難しかつた。何とか苦労してのぼつた枝の上で俺は彼女の横に座る。

『少し高い木にのぼつただけなのに景色が違うね』

『ホントだ……すごいなあ』

そう彼女は楽しそうに笑つて言つた。

巨木から見た光景は、ちょうど今の俺からの視界くらいだろうか。

……そう言えば、あの時は降りるのも苦労したつけ。

「あの頃の琴乃ちゃんってホントにすげかったよな。こんな木でも軽く上りちゃうし。ついていくのが大変だったよ」

「……」

彼女は黙つてその木を見つめる。

俺は「琴乃ちゃん？」と呼びかけるとハッとしたようじ、

「え？ 何ですか？ すみません、ボーッとしてしまって」

「いや、この木を琴乃ちゃんは軽くのぼっていたなあって」

「……そうですね。私、木をのぼるのは得意でしたから」

なぜか俺から視線をそらすと彼女は思案顔をする。
どうかしたのだろうか？

「あっ、誰かいりますよ」

だが、彼女は何事もなかつたように話題を変えるように子供たちを指差す。

小学生の兄妹どうつか、男の子と女の子が一緒に公園で遊んでいる。

「俺達もあれくらいの年だったんだろうな

小さな子供たちは備え付けられている遊具にのつて遊んでいる。
兄の方は滑り台に簡単にのぼれるが、妹の方は中々上れない。
そりや、あの年頃の体格差なら仕方ないさ。

子供の頃の1年つて結構、体格に差がひらいでいるからな。妹の女の子が上り終えるまで待つて、彼らは再び遊び始める。俺達も昔はあんな感じだつたんだろうか？

「何かほのぼのしてゐなあ

「……先輩。そろそろ時間ですから行きましょうか？」

彼女が俺の手を自然にひいて公園から出ようとすると、その小さな手の温もりに俺は心地よさを抱いていた。女の子と手を握った記憶もあんまりないので緊張する。積極的な性格で、俺の方が翻弄されることが多いのは今も昔も変わらない。

……だけど、何か気にかかることがあるんだ。

過去の話をする時に彼女は時折寂しそうな顔をする。

俺はまだ何か忘れてしまつていいことでもあるのだろうか……？

第6章・焦がれる想い

【SIDE・井上翔太】

琴乃ちゃんの母親である理沙おばさんは美人である。我が母いわく、学生時代はものすごくモテていたらしい。今でも十分美人だから、真実なのだろうが。

俺が琴乃ちゃんの家に上がらせてもらつて数分。

俺は警察の取り調べとばかりに理沙さんに詰め寄られていた。ちなみに琴乃ちゃんは制服から着替えるためにリビングにはない。

「久しぶりに会つたと思つたら琴乃の恋人つてびっくりしたわ。翔ちゃんがねえ？」

「その、翔ちゃんつてのは……さすがに恥ずかしいですが」

「あら、娘だつて昔はそう呼んでいたじゃない」

そりや、琴乃ちゃんが呼んでも悪くないが、おばさんと言われると嫌なのだ。

ほら、よく親戚に小さな頃の失敗話を笑つてられてムツとするのと同じだよ。

……そう言えば、昔、琴乃ちゃんには“翔ちゃん”って呼ばれていたつけ。

今では先輩扱いだ、しかも名前じゃなくて名字だし。

今度、名前で呼んでもうつよつこしよ。

それはさておき、理沙おばさんは俺と琴乃ちゃんの関係にひどく

興味津々。

琴乃ちゃんがあまり話してくれないから俺から聞き出せりとしているようだ。

「昨日、琴乃が翔ちゃんを恋人に射止めたって聞いて本当に驚いたのよ？あの子、恋愛には疎い方だつて思つてたのに。親に隠れて想いを抱き続けていたのねえ」

「……普通は想いつてのは親に隠すものでは？」

「そう？私に話してくれれば葉月に言つて無理矢理でも翔ちゃんを連れてきてもらえばよかつたじゃない。葉月つてば、私が連れてきてつて言つても面倒だつてあれ以来、翔ちゃんを連れてきてくれなかつたし」

葉月（はづき）つていうのは俺の母さんの名前だ。

母さんと理沙おばさんはいわゆる幼馴染つて奴で幼稚園から仲が良かつたらしい。

「でもね、翔ちゃんが琴乃の恋人つていつのは安心できる

「……信頼されます？」

「何かあつたら葉月が動くもの。葉月の子供つてだけでまず遊び半分にポイ捨てされる心配はゼロよ。もちろん、翔ちゃんがそんな真似をするわけないつて信じてるけど」

「あつ、そういう意味ですか。

むしろ、今のは警告だらうか？」

うちの娘につまらんことをしたらどうなるか分かつてゐんだろう

な、的な？

迂闊なことはできそりにもない、する気もないけど。

「でも、あの内気な琴乃が変わろうとしたのはいいことよ。最近、オシャレに気を使つたりしたから何があるなって思つていた。高校に入つて何か影響されてるのかも、そう思つていたけど違つたのね。好きな人がいたから変わつただけ」

俺の顔を見つめながら理沙おばさんはこじやかな笑みを見せる。

「琴乃ちゃんつてそんなに大人しい子でしたっけ？」

母さんもそうだったが、どうにも周囲のイメージと俺の小さな頃のイメージが合わない。

琴乃ちゃんに振りまわされた過去を持つ俺は、元気で明るい子といつ感じなのだが。

「……琴乃は前から大人しいわよ。私の子ながら全然性格も似てないし？」

「それは当然では……いえ、何でもないです」

おばさん、怖いから睨むのは勘弁してください。

「俺はそう思えないんですよ。俺の前では昔も今も、琴乃ちゃんつて大人しいタイプには全然見えないです。今回の告白も結構強引でしたから。実際と違うのかなって少し気になつて……」

「強引なのは恋をしているからでしょ？ そんなものよ。親が知る子供の姿と本当の子供の姿が違うのは普通じゃない？ 子供つてバカじ

やないもの。親には隠したい一面くらいあるもの。でも、翔ちゃんの前で本当の自分を見せるってのはあの子も女の子なのね。可愛い所、あるじゃない」

やはり、考え過ぎなのだろう。

俺もそこまで言えるほど、琴乃ひやんを深く知らない。この関係を続けるためにも早く仲を深めあいたい。

「……何の話をしているんですか、先輩？」

着替え終わつた彼女がリビングに出てきたので俺とおばさんは話をやめる。

変なことではないけど、本人に聞かせる話でもない。

「翔ちゃんと会つる久しぶりだなつて。琴乃は翔ちゃんのことを覚えていた？」

「私にとつては大切な思い出だつたもの。先輩、夕食ができるまで私の部屋にきてもらつていいでですか？」

「……娘が自室に男を招くシーンを見る事になるなんて。心の準備はOK、琴乃？」

「変なことを言わないで。先輩に見せたいものがあるだけ」

「めんなさい、俺も変な期待をしておりました。

だって、女の子からいつも言われたら嫌でも期待するじゃん。

「……お母さんに任せた、行きましょう、先輩」

「ええーっ。私も翔ちゃんにお話したいの！」

「また今度にして。今日は私、優先だから」

理沙おばさんは「ホントに何かいつもの琴乃じゃないわ」と微笑する。

俺は食事ができるまでの間、琴乃ちゃんの部屋に行く」とにする。

彼女の部屋はリビングからすぐ近い部屋だった。

室内は女の子らしさ抜群の何だかいい香りのする部屋だ。内装も女の子っぽくて何かいい、すこくいい……。

ひつして女の子の部屋に入るのって初めてだから緊張する。

「……俺に見せたいものって？」

「先輩は覚えていないでしょうけど、小さな頃の写真です」

「へえ、昔の写真か……。見せてもらつてもいい？」

琴乃ちゃんが俺に差し出した写真に写るのは幼い頃の俺だ。その隣にいる可愛い女の子は琴乃ちゃんだろう。

仲良く一人で写っている写真を眺めていると昔を思い出す。

「……あれ？」

俺が気になつたのは1枚の写真だった。

俺と琴乃ちゃんの後ろに隠れるよつてして小さな女の子が写つている。

記憶にはないけど、俺達と遊んだことのある女の子だつつか？

「ねえ、琴乃ちゃん……」の子は?」

「それは……」

俺が彼女に尋ねようとした時に、理沙おばさんから声がかかる。

「『』飯できたわよ?……もしかして、お邪魔?」

「別に変な事はしていないから。夕食できたの?」

「残念、何かいい雰囲気だつたら邪魔しようと思つたの。翔ちゃん、琴乃が可愛いからって襲わないでよ?」

「……襲こません」

俺の発言になぜか琴乃ちゃんが拗ねる。

「まつり断言されると悲しいです」

「わつよ、翔ちゃん。まだ、とか、いつかはつて言つてあげないと」

あれ?何で俺が責められているんだろう?

ここで襲つたりしたら間違いなく、出でていけって展開になるはずなの!。

どうひこしても反応しづらいつ!
女心とこつものにもなれていかないとな。

「ほり、『』飯が冷めちゃつから早く来てね。今日は頑張ったのよ

俺は「うわあ」と引かずりれるよつて理沙おばさんに連れて行か

れるのだった。

……。

部屋に一人残った琴乃是翔太の見ていた写真を手にする。写真に写るのは幼い頃の琴乃ともう一人の少女。

「先輩は“この子”を覚えていないの？」

それは10年前の思い出の光景、忘れられない恋の始まり。

「……思い出して欲しい気持ち、思い出して欲しくない気持ち。どちらが私の本音かな」

琴乃是寂しそうにつぶやくと元のアルバムに写真を仕舞いこんだ。

第7章・キミを知りたい

【SIDE・井上翔太】

琴乃ちゃんと恋人関係になつてから1週間ほどが過ぎていた。初めての恋人、お互いに関係に慣れ始めた。

女の子と付き合い始めたことで俺の日常は劇的に変化した。

恋愛なんて漫画やドラマだけの話だと思つほどに縁がなかつた。人間、恋をすれば変わるものだ。

「……翔太、琴乃ちゃんとデートはしたの？」

それは土曜日の朝、何気ない母さんの一言から始ました。夜勤明けで帰つて来たばかりの彼女は眠そうな顔をして言つ。

「な、何だよ、いきなり……」

「理沙がその辺、気にしているのよ。2人の進展具合、琴乃ちゃんがはつきり言つてくれないみたいだから、翔太に聞こつと思つて。実際、どうなの？おふたりはどこまで行つたわけ？」

「そういうのは仲が良くなつてからと『うか、タイミングつてものが……』

簡単に言つてくれるが『テートひとつ誘つのも緊張するつての。琴乃ちゃんは別に何も言つていないので、今は仲を深めるのを優先している。

相手の事を知り、恋を深めていきたいのだ。

「『デートのひとつもできなごの?』」

「「ひめこなあ……だから、タイミングってのがあるだらう。」

「へタレ? 我が息子ながら情けないわねえ」

へタレ囁ひな、地味に傷つぐ。

母さんは「『デートぐらこ年上の翔太が誘えばいいじゃな』」といひ。

「『デート代のお金へらいバイトでもして稼げ。仕方ないから今回は援助してあげるわ。琴乃ちゃんをけやんと楽しませなさい』」

幽やんから『デート代をもらつた俺は『デート』といふ事を考ふる。

「……『デート』か」

考えたことがないわけではない。

恋人としてどこかに一緒に出かけたりするのは普通の事だと想つし、俺だって琴乃ちゃんと出かけてみたい気持ちはある。
しかしながら、まだその段階に進めないのは緊張や勇気ががないのだ。

「ふわあ……私はもう寝るわ。明日、『デートの約束しなきやお金を返しなわ』。それじゃ、休み」

そう囁つて母さんは自室へ戻る。

明日ついで、いきなりすきて無理つ!?

慌てる俺の反論は当然、母さんには通用しないだろう。

まあ、いつもある種のきっかけを『えてもらつたのには感

謝しよう。

俺はとりあえず、今日の予定でもあったリビングの搜索を開始する。

「この間、琴乃ちゃんと写った昔の写真を見せてもらつたが、我が家にも一枚くらいあるのではないかと探して見ることにした。

基本的に写真なんてあまり撮らないのでアルバムはそう多くない。

「いつこののは母さんが寝てこる時しかできないからな」

前に別件で写真探しをしたことがあるのだが、母さんに怒られた。父親関係の事を探していると勘違いされたらしい。

今となつては顔も覚えていない存在の事は正直、どうでもいい。それでも、変に誤解させないようにタイミングを見計らっていたのだ。

リビングにある押し入れの中を探して数十分、ようやく奥にしまいこまれたアルバムを発見。

そこまで奥の方に封印しなくてもいいだらう。

「俺の小学生時代の写真はどれだ？」

適当にページをめくつていいくと、所々に空白がある。

その空白こそ、父親という存在の跡なのだろうか。

確定情報ではないが、俺の父親は医者だったといつ話を聞いた事がある。

看護婦だった母さんと病院で知り合つたらしく……ホントかどつか知らないけどな？

いつもして改めてアルバムなど見る機会はなかつたので懐かしさもある。

そして、俺はようやく琴乃ちゃんと写っている写真を何枚か発見する。

「これだ、俺の家にもあったか」

何枚か、一緒に写っている写真の中にそれはあった。琴乃ちゃんの部屋で見せてもらった時、気になっていたもう一人の女の子。

「この子は……？」

俺とツーショットで写っている写真もあり、俺は素直に驚いていた。

この子に関しては記憶がまったくない。

一緒に遊んだとか、思い出なども思い出せない。

「……まあ、いいや。これだけ抜き取つておこう」

俺はその数枚の写真を手元に残してアルバムを片づける。そして、自室に戻り、懐かしい写真を眺めていた。主に写真の背景は展望台の公園の写真が多い。琴乃ちゃんと遊んでる俺という構図の写真。

それと、謎の女の子と写る写真も数枚ある。

年齢は俺や琴乃ちゃんよりも幼く感じる、2、3歳は下ではないだろうか。

「……こんな子、いたかな？」

記憶を思い出すのに苦労しながら俺は考える。

その子は黒い長髪の女の子だった。

俺の隣で微笑む琴乃ちゃんは茶髪っぽく見える髪質なのだろう。笑い合う俺達を見つめるようなもう一人の少女。

それは、樂しいとかではなく寂しそうにも見える。

「IJの写真だけ、笑顔っぽいな？」

俺とのツーショット写真。

少女は微笑を浮かべているように見える。

可愛らしげ子なので今となつたらすこい美少女になつていてに違いない。

「琴乃ちゃんはこの子を知つていた、となると……誰だ？」

直接、本人に尋ねるのが一番だらうが、どうやらそんな雰囲気ではなかつた。

あの時はおばさんに邪魔されたが、俺がそれ以上追及できなかつたのはその時の彼女の表情が暗く思えたからだ。

「……聞かれたくない素振りだつたよな？」

となると、思いつくのは幾つかの仮定。

亡くなつたとか、引っ越ししてしまつたとか……？

「ホント、誰なんだらうね？」

思い出せないことに歯がゆさを覚えながら、俺はその写真を見つめる。

母さんにでも聞けば……いや、あの当時の事を母さんがどれだけ知つているか。

IJの当時、10年前は母さんが看護師に復帰した頃だ。

俺が預けられていた時に母さんは忙しくて、ほとんど顔を見せなかつた。

それを思えば、一緒に遊んでいた子など覚えていないだろ？。

「理沙おばさんに聞くか？」

本当にこの子の正体を知りたいのならそれが一番確実な方法だ。この写真を撮ったのは彼女だろうし、内緒話にしてもらえれば話してくれるそうだ。

それも選択の一つだと考え、俺は写真を机の中に仕舞いこむ。今すぐ思い出せなくても、いずれ思い出すことがあるかもしれない。

焦つて思い出すことでもないのだから、ゆっくりと思い出すとしよう。

「 キーリーは一体、誰なんだろう？」

俺の記憶の中には、少女の存在が気になっていた。
どうして、俺は覚えていないのか。

それにも意味があるんじゃないのか、そんな」とさえ思つ。

「 ……なんてな、ドラマじゃないんだから考え過ぎだら

大抵、小学生の記憶ですら曖昧なのだから、覚えてないのは仕方ない。

下手に考え込むと混乱するだけだ。
気にはなるが、気にし過ぎはやめておく。
それよりも、俺には問題があるのだ。

「琴乃ちゃんをどうやってデートに誘つか。それが問題だ」

俺は携帯電話を片手に約1時間ほど脳内ショミューションをしな

がら、ようやく琴乃ちゃんに連絡をして「明日、デートしない?」と誘う事にした。

ホント、デートの約束するのって大変なことなんだなあ……。結果、明日のデートを何とかこぎつけ、次はデート場所で悩むのだった。

悩んでばかりの初体験に苦労するが、悪くはない。

いつもも楽しみのひとつだ。

恋愛つて思っていた以上に面白いな。

第8章・ファーストキス、じゃない？

【SIDE・井上翔太】

琴乃ちゃんとのデート当日、俺は昨日から眠れずにいた。初めて女の子と出かけると考えただけで……うまくいけばキスクらいはできるかもしない、その後は……むふふつ。いかん、変な方向に妄想してしまっては男の性さがつて奴だろうか。そりや、お年頃の男が考えるとこうとアレがアレして、こうしてしまうものだ。

「……琴乃ちゃんと普通に遊ぼう」

俺は軽く自己嫌悪しながら冷静さを取り戻す。
今日のデートは街中でショッピングという普通のデートなのだ。俺にとっては人生初デートなので浮かれる気分は仕方がない。朝飯を食つてから俺は待ち合わせ場所へと向かう。待ち合っていたのは俺の住むマンションの前だ。

「……ホントは駅前とか、そういう所で待ち合わせるものでは？」

いかにも、デートというのなら、そうなのだろうが、今日行く予定の繁華街は駅側ではないので、俺の家からの方が近い。
まあ、下手に琴乃ちゃんがナンパなどされて嫌な思いをするよりはマシだろう。

「琴乃ちゃん、可愛いからなあ」

本当に俺の恋人になってくれたのが奇跡だろう。

普通なら縁もない、そういうレベルの相手なのだ。

「……今日のデートが終わったら告白しよう」

そして、俺の気持ちもひとつにかたまつていた。
最初は彼女の勢いに負けて付き合い始めた関係だ。
だが、昔の事や琴乃ちゃんを見ていて俺は自分が彼女が好きだと
思うようになっていた。

恋している自分に気づけた時、俺は本当の意味で告白しようと決
めたのだ。

「これで正真正銘の恋人同士か」

嘘も偽りもない、恋人になれると言う事は嬉しい。
これからもずっと関係を続けていきたい相手だ。

「さて、そろそろ来るはずだが……？」

腕時計を見ると約束の時間になり始めていた。

「先輩、お待たせしました」

彼女が到着したのは約束の時間、ちょうど。

「おはよっ、琴乃ちゃん。いきなりデートに誘つて大丈夫だった？」

昨日の今日だ、驚くのも無理はない。

「いえ、全然問題ないです。先輩から誘つてもうえて嬉しかった
んですよ」

「そつか。それはよかつた」

母ちゃん、グッジョブ。

俺は内心、母に感謝しつつ琴乃ちゃんに微笑みかけた。
自転車に乗つてきていたので、俺のマンションにおいて歩いて繁華街へ向かう。

「……え？ 映画が見たい？」

琴乃ちゃんにどこか行きたい所があると尋ねたら、彼女はそう言った。

「はい。先輩と一緒に見たい映画があるんです。ダメですか？」

「オッケーだけど、何系の映画？」

俺が好きなのは派手なアクション満載のハリウッド映画だ。
琴乃ちゃんのイメージからすると、やはり恋愛モノかな？

「……ホラー映画です」

彼女は頬を赤らめて、小さな消え入るような声で呟いた。

「ホラー？ 怖い系の？」

「はい、そうです。先輩は苦手ですか？」

「いや、苦手といつか……琴乃ちゃんは大丈夫なんだ？」

意外な趣味だ、としか言えない。

琴乃ちゃんの見た目的にホラーだと「怖い～」て感じがするのだが？

「平気ではないんですけど。何で言つんですか。怖いもの見たさつていつか」

「何となく分かる気がする」

怖いものが苦手な人ほど、怖いものが好き、みたいな？
そういうや、CMでホラー映画の新作をすると見た気がする。
話題になつているホラー映画か……。

「先輩が苦手ならやめておきますね」

「いや、いいですよ。全然、大丈夫です。任せください」

「……震えますけど？」

怖いものは苦手なんだーっ！――

と、大声で叫びたい気持ちを我慢しながら俺は精一杯の作り笑顔
で、

「問題ないから行こいつよ。琴乃ちゃん」

「はいっ。楽しみですね」

俺は全く楽しめそうにないのだが……。
俺に与えられた試練だと思って耐えるしかないのか。

男には好きな女の子の前で意地を張るのも大事なのだ。

映画の上映は昼からだったので、昼食を先に済ませてから映画館に入る。

話題の映画とあってか、ホラー映画というジャンルながらカップル連れも多い。

トイレも先に行ってきたので少しばし耐えられるはず。

「井上先輩……顔色悪いですよ？」

俺の方を笑いを抑えながら琴乃ちゃんが尋ねて来る。分かつて言つてるのなら、彼女は意地悪さんだろう。

「べ、別に何でもないさ」

「そうですか。本格的なホラーらしいので、心臓が弱い方はやめた方がいいらしいです」

「ははっ。だから、変な心配しなくてもいいから。楽しもうじゃないか」

ホラー系の映画くらい見れるっての……ちゃんと見たことがないけどな。

自分から好んで見ないだけで、怖くなんてないんだぞ。

「先輩。怖くなったら私の手を握つてもいいですから」

そつと俺に耳打ちした琴乃ちゃんは何か楽しそうな顔をしている。

ぐつ、年上の男としてのプライドがそんな真似をするはずがない。上映開始から20分後、俺はさつそく琴乃ちゃんの手を握つていた。

「……あうあう」

薄暗い映画館、スクリーンに広がる光景と抜群の効果音と音声に俺は驚かされていた。

映画の内容は洋館に閉じ込められた主人公たちが未曾有の恐怖に襲われると言うタイプのホラー映画だった、現在の画面は殺人シーンで床を覆いたくなる。

「ぎゃーっ、超怖いっす、リアルに怖くて仕方がない。

これは夜中に見たらひとりでトイレに行けないレベルだ。

「ふふっ」

映画ではなく、震えながら琴乃ちゃんにすがる俺の姿を彼女は微笑していた。

男のプライド完全崩壊、でも、琴乃ちゃんが楽しんでいるのならそれでもいい。

「……先輩。ここからが本番なので頑張ってくださいね」

小声で俺に言つ彼女、俺はその手を強く握り締めながら恐怖と闘う。

……それから先の事はあんまり思い出したくない。

映画館から出た後の琴乃ちゃんは大笑いをしていた。

「……先輩、ものすつじく可愛かったです」

終始、彼女にすがる情けない男を演じていた俺。

普通は立場逆じやないか、ちくしょーつ！？

怖がる彼女を優しく落ち着かせる理想の男像からかけ離れていた。

「そ、それより、琴乃ちゃんは平氣そつだつたな？怖くなかったのか？」

映画は大迫力で恐怖倍増、俺としては今日は悪夢に悩まされそつな気配だ。

「怖かつたですよ。でも、楽しかつたです」

ホラー映画が好きつていうだけあって、恐怖を楽しめるとは……本当に意外な趣味だと黙つておこう。

「それに怖がる先輩も、普段は見れませんからね」

「今度はちやんとした恋愛映画でも見よひじゃないか

「そうですね。次はぜひ、先輩と楽しめるものを見ましょう

俺はずつと繋がつぱなしだつた手に視線を向ける。

「……先輩が痛いくらいに繋いでくるので安心できましたよ

「！」めん。痛かったか？

俺が離さつとすると彼女は別の手を添えてやんわりと断る。

「いいえ。せつかくですから家まで繋いでいいですか？」

「ああ……」

めっしゃ 可愛いじやんかよーつ。

俺の事まで気にしてくれるいい子だ、お兄さん、感動中……。

恋人つてこんなに楽しくていいものだったのか。

俺は恋人関係に充実感を抱き、感動していた。

俺のマンションに向かう途から家まで彼女を自転車に乗つておくれ。

その途中で俺は彼女を展望台公園に誘つた。

「今回のデート。とても楽しかったですよ」

俺はビデオばかりだったけどな、と自嘲したくなるが。

「俺も楽しかったよ。琴乃ちゃんの意外な一面も見れたし」

「……またデートに誘つてくださいね」

「 もううん。だって、俺達は……」

そこまで言つて両葉を止めると、俺は自分の想いを口にする。「…にした。

「あれ、琴乃ちゃん。俺、ちゃんと言つてこなかつたから言わせ

て欲しい

「何ですか？」

「俺は琴乃ちゃんが好きだ。だから、ホントの意味で恋人になりたいんだ」

片思いではなく両想い、恋人としての始まりの瞬間。
俺の言葉に彼女はきょとんとしていたけど、やがて涙を浮かべて
いた。

「嬉しいです。先輩がそう言つてくれるなんて……。不安だつたん
ですよ、私が勝手に付き合つてるだけで、先輩はそんな気もないん
じやないかつて。好きと言つてもうらえるの、夢じゃないんですよね
？」

「さつかけはぢりにしろ、今の俺の気持ちは本物だよ

俺はゆつくりと彼女を抱きしめて、深呼吸しながらその瞳を見つ
める。

この瞬間を待っていた、夢にまで見たファーストキス。
彼女は瞳を閉じて俺に唇を突き上げてきた。

キス、してもいいんだよな？

俺は焦らないようにその唇に自分の唇を重ね合わせる。
小さく水音をたて、重なり合つ唇同士、やがて唇を離した俺は感
動の嵐が駆け抜けていた。

「……ファーストキス、だな」

俺が彼女に微笑むと意外な一言を切り出される。

「…………え？ 私は…………ファーストキスじゃありませんけど」

真っ赤な夕焼け空の下、俺は氷のように硬直してしまう。
キスが初めてではない……そ、それは、つまり、その？

「ファーストキスじゃありませんよ？」

彼女の素直な言葉にショックを受ける俺がいた。
いまどきの若い子つてそんなに進んでいたのか、というか、琴乃

ちゃんつて……俺以外に前に彼氏がいたとか？

キスが初めてなのは俺だけだったのか？！？

第9章・ゼロかイチか

【SIDE・井上翔太】

琴乃ちゃんに告白してスタートし始めたかに思えた俺達の関係。だが、思わずことに彼女にはキスの経験があつたという事実。別に相手が自分よりも経験があつても悪いわけじゃない。ただ、俺自身……彼女の印象的に意外だつたと思つただけだ。

「ファーストキスじゃありません」

彼女の言葉にある程度の動搖をする。
だけど、やっぱリショックなのはショックなのだ。
経験の有無は大きい、0と1とでは大きく違うものだ。

「へえ、そうなんだ。琴乃ちゃんつて前に彼氏がいたりした?」

「……はい?え?あ、あの、何か勘違いしてません?」

「勘違い?」

きょとんとする俺に彼女は慌てた様子で言つ。

「ち、違いますよ?恋人は先輩が初めてで、キスだつて……先輩が初めてなんです」

赤らむ頬から察するに、嘘はついていないようだが。夕焼けがやけに眩しくて俺は目を細めながら、

「……どういふこと?」

「昔、先輩としたことがあります。だから、セカンドキスですね」

「なるほど、そういうことが……って、ええー?」

俺のファーストキスが10年前だって?

全然、記憶にないんですけど、マジでそんなことがあつたつけ?
俺は琴乃ちゃんとの過去を思い出すがそのような事があつた記憶
がない。

「そんなこと、あつた?」

「ありましたよ。先輩は覚えていないでしょ?」

グサッと突き刺さる一言。

彼女は少し膨れながら拗ねている。

マズイ、思い出せよ、俺。

琴乃ちゃんを傷つけるわけにはいかんのだ。

展開的にあっても不思議ではないが、小学1年の時にキスの意味
をどれだけ知っていたかと問われると微妙だ。

「キス、ねえ……?」

どう頑張つても思い出せない事に俺は焦りを感じていた。
このままではいけない。

「思い出せないならそれでもいいです。先輩は私の事、あんまり覚えてくれていないみたいですから気にしません」

ガーンツ、彼女から見放されかけている！？

これ以上、信頼を落とすわけにはいかない。

俺は必死に記憶をさかのぼると、それっぽい事をした記憶が……。

「ほら、先輩。もういいです。そろそろ、帰りましょっ

「ま、待ってくれ。琴乃ちゃん、ここは思い出がないと

「別にいいですよ？前にも言いましたけど、ホントに小さな頃の記憶ですから思い出せなくとも普通です。私は責めたりしません。ただ、寂しいだけですから」

寂しげな表情を見せられて、「じゃ、帰らうか」なんて言えるはずもなく。

「……あつ」

しばらく考えていて、俺はようやく記憶の断片にたどり着く。
それは10年前、琴乃ちゃんとキスをした。
きっかけはありきたりなものだつたと思つ。
テレビの影響か、そんなものだつたような。

「キス、したことがある。そうだ、この場所で俺は……」

確かにキスのような真似^{マジ}ことをした、かもしれない。

『……これがキスなの？私の初めてのキス』

恥じらうつ女の子とキス、人生初めてのキスながら記憶に埋もれていた。

だが、思い出せないのはその光景だ。

本当にあれは琴乃ちゃんだったんだろうか？

なぜだか、俺は違和感のようなものを抱いていた。

記憶の中で俺は大事な何かを忘れていくような気がするのだ。

「…………琴乃ちゃん」

「もういいです。思い出は思い出です。先輩、そんなに昔の事を思い出さないでください。私も、意地悪しませんから」

「意地悪？ビデオの意味だ？」

俺が尋ねると彼女はそっと俺の身体に身をゆだねて来る。

「……最初からそうでした。私は先輩を試していました」

「試す？俺を試していた？」

潤んだ瞳で上田、づかいをする彼女。

「確かめておきたかった、ということです。10年前、私は先輩を好きになりました。その相手が私を覚えていくれているかどうか。それが知りたかった。普通なら思い出せなくて当然なんです。だから……」

「ごめんな。俺って記憶力悪くてさ。その、琴乃ちゃんを傷つけた

「いいえ。私もごだわりすぎていました。過去は過去です。今、先輩が私を好きだって言ってくれたのは過去の私じゃない、今の私を見て言ってくれたんですよね？」

「あ、せうだ。そ、うだよ、琴乃ちやん

それだけははつきりと言える。

昔も初恋めいたものがあつたかもしれない。

だけど、今はそれ以上に琴乃ちやんが好きだと言ひ気持ちがある。

「もう昔の話はあまりしなじようじまじょう。先輩に“色々”とされた記憶はありますけど、過去の事ですか

「……うひうひ、うひうひですよ。昔の事です。気にないでく

「うひうひ待つて。うひうひ何?俺、何かした?」「うひうひ

過去の俺よ、琴乃ちやんに何をした!?

82

「そんなに慌てなくても変なことじゅありません。何だかホッとしたら、喉が渴きました。先輩、ジュークでも飲みませんか?」

「ううだな。あ、俺が買つてくれるよ。うひうひ待つていて

俺は恥ずかしさもあって、それをと皿販機の方へと歩みだす。

過去は過去、か……。

そうだよな、俺が好きになつたのは昔の琴乃ちやんの記憶だけじゃない。

大事なのは今なんだ、過去の思い出よりもたくさんの思い出を作らひ……そう決めていたじゃないか。

これから幸せな日常の始まり、俺はそれを感じていた。

俺達の過去が、俺と琴乃ちやんの関係にどれほど重要な意味を持

つていたかを知るのは、まだまだ先の話だった。

……。

翔太の後姿を見つめながら、琴乃は小声で想いを呟いていた。

「先輩、思い出せなくて当然ですよ。だって、私は……」

彼女は朱色の夕焼けを眺めていた。

それは10年前のそれと変わらない光景、10年という時間だけが過ぎていた。

「キスしたんだ、私。嬉しいけど……何でこんなに寂しいんだろう」

先ほど、互いに触れ合させた唇を指先で撫でる琴乃。

「ずるい、よね。怒るかな?私は、本当にずるいな……。いつまで先輩をだまし続ければいいの」

琴乃は静かに瞳をつむり、誰もいないその場所で言葉を口にした。

「『ごめんね。私、それでも先輩が好きだから、この“嘘”をつき続けるよ』

第10章・記憶の彼方（前編）

【SIDE・井上翔太】

キスの一件から俺と琴乃ちゃんの関係はかなり深まった。キスという行為は心を許すものなのか。

きっかけひとつで俺は彼女を本気で好きになつていた。俺の可愛い恋人、琴乃ちゃん。

今ではすっかりと自分の心の中に彼女が大切な存在としている。交際開始から2週間が経過してまもなくGWも近づく、4月下旬。

「井上先輩。お昼一緒にいいですか？」

「いいよ。今日も食堂にする？」

「購買でパンでも買って外で食べませんか？今日はいいお天氣ですから」

琴乃ちゃんの提案で俺達は適当にパンを買って外で食べる事にした。

向かつた先は屋上、俺達以外にも食事をする人間はいるが、数は多くない。

空いているベンチに座り、食事にすることにした。

「良い風だな。この学園の屋上って風が涼しいから好きだな

思い返せば、琴乃ちゃんと出合ったのもこいつして涼みに来たのがきっかけだ。

「風の通り道なんでしょう。私も好きな場所です」

俺は総菜パンを食べながら青空を見上げる。

本格的に春になり、温かい日々が続いている。

寒がりな俺としては心地よい春の季節だ。

「先輩。 そう言えば、昨日の夜にお母さんから聞いたんですけど、
3日ほど、おばさんが不在になるって本当ですか？」

「ん？ ああ、本當だよ。俺もその話を今日の朝、聞かされた。何で、
理沙おばさんの方が先に知つてるのは微妙だが」

話は今日の朝まで遡る。

俺は今朝の事を思い出していた。

……。

今朝、登校の準備をしていたら、母さんが言つたのだ。

「あ、言つのを忘れていたわ。翔太。私、今日から3日ほど、この
家に帰らないから。いつものように自分でしておいて」

「……別にいいけど？ 夜勤が続くのか？」

看護師なんていう仕事をしていると、夜勤が連続つてのも珍しく
はない。

地味に大変な仕事だというのは分かつてゐるつもりだ。

大抵、夜勤のときは俺が食事をしたり、最低限の家事をこなす。

料理は苦手なので自炊はしないが、掃除洗濯は人並みにできるようになっていた。

「夜勤とこうより、私、仕事場が変わるのよ。ほら、隣街に私立病院があるの知ってる？ あそこで勤務することになった」

「え？ そりなのかな？」

隣街と言つてもうちからだとそんなに遠い場所ではない。評判も高いし、有名な先生も多い私立病院だ。もちろん、私立なので金は高いが設備は充実していると聞いている。

そこで働くと言つた事は、悪い話ではない。

「そう。私は忙しいから翔太は適当にしておこう」

「もっと前から言つてくれればいいのに」

「別にいいでしょ」

あつさつと言われてしまつて口論できなー。どうせこつもと変わらないので、無駄に慌てる必要もないのは事実だ。

「……それと、これは……いえ、何でもないわ」

幽さんはため息をつきながら何かを言い淀む。

「言つかけて止められたとすくへ気になるのだが？」

「翔太は知らないてもいい」とよ。何で今頃になつて……はあ

彼女はもう一度嘆息すると、「せつせと学校に行きなさい」と促す。

「へいへい。俺は俺で適当にするわ」

鞄を持って俺は出かけようとする。

横目で母の顔色をうかがうが、やはり複雑そうな顔をしていた。

母さんが小声で囁いて俺の耳に届いたその言葉。

「何で今頃になつてあの人は……」

……あの人って誰だ？

母さんが嫌がる（？）相手って想像つきにくい。

「誰かと再会したってことか？ 誰なんだりつね。どひせ、俺には関係ないだろうけど」

母さんのプライベートまで気にする俺ではない。

それよりも俺は遅刻しそうな時間だと気づいて慌てて学校に登校したのだった。

……回想終了。

というわけで、しばらくは自由の身だ。

2、3日の事だからこつもとそんなに違ひはないけどね。

琴乃ちゃんはカスタードがたっぷり入ったクリーミパンを美味しいに食べる。

俺も焼きそばロールを食べ終わり、カフェオレに手を伸ばす。いつもして屋上で食事するのもたまにはいいな。

「おばさんって看護師さんでしたよね。夜勤も多そうですが、先輩つていつもはどうしているんですか?自炊とか?」

「してない、するはずないって。俺、包丁で野菜とか切る事できても炒め物とか、鍋とか使うのが超苦手でさ。味付けとかワケ分かんなすぎる。大さじ1杯半つてどんだけだ、とか悩んだ時点で負けた。細かいことつて苦手なんだよな」

料理ぐらいできれば、と挑戦した時代もあったが、結果、俺に向いてないと諦めた。

もとい、「キッチン汚すならキッチンに入るな」と母さんから禁止された。

今では大抵、夕食はファミレスかコンビニ弁当のお世話になっている。

「ふう、ひたすら今までした」

ふたりとも食事を終えてからのんびりとした時間を過ごす。思い出したように、琴乃ちゃんは話題を先ほどの話に戻した。

「やつだ。あの、先輩。今日の夕食は私が作りましょうか?」

「夕食を作る?」

「はい。先輩さえよければ、私が作ってもいいですよ。お母さんか

らその話を聞いた時におばさんからも先輩の面倒を見るように頼まれていたんです。井上先輩は放つておいたらどうせ不規則な生活をするだろ?って

「……俺は子供か。やれやれ。琴乃ちゃんにも変な迷惑かけてるな

昔と違うのだから、ひとりで適当に生きていける。

……そりゃ健全な生活ができる確証はないけどな。

「迷惑じゃないですよ。私も先輩のお世話をしたいですし」

「おっ、今の言い方。ちょっとグッと来たかも。ホントに琴乃ちゃんはいい恋人だな」

「ふふつ。褒めてもうれると嬉しいです。それで、どうしますか?」

別にいつも通りに外食でもかまわないが、まだ食べた事のない人の手料理が食べてみたいという期待もある。

琴乃ちゃんって料理がうまいと聞いているので、何気に期待していたのだ。

「それじゃ、琴乃ちゃんに頼んでもいいかな?」

「はい。任せてくれ。それじゃ、放課後は買い出しちゃうね」

「やうだな。琴乃ちゃんの料理は楽しみだ」

俺がやうと彼女は照れくそって笑う。

「私の得意なのは和食ですけど、先輩の好みは?一応、一通りは作

れますから

「琴乃ちゃんの得意なのでいいよ。俺って別に好き嫌いとかないからさ」

「……それじゃ、私が考えておきますね」

「いいつ、すぐくいいつ。

恋人が手料理作ってくれるシチュエーションとか想像したこともないかった。

それが今、現実になろうとしている。

恋人って実に素晴らしい。

「楽しみにしてるよ。琴乃ちゃんがどうこう料理を作ってくれるのか」

「期待に応えられるように頑張りますね」

俺は期待に胸を膨らませながら放課後が来るのを待ちわびていた。

第1-1章・記憶の彼方（後編）

【SIDE・井上翔太】

琴乃ちゃんが俺のために手料理をふるまつてくれると言つ。

恋人がいて本当に良かつた。

家に帰る途中、俺達はスーパーによつながら材料を買いつらえていた。

「お魚メインがいいですか？それともお肉メインの方が好きですか？」

「出来れば肉がいいなあ。あんまり魚は好まない」

「分かりました。だとしたら、ここの辺の材料で考えます」

彼女はメニューを決めたようで次々と材料をカゴに入れしていく。カゴ持ちの俺は彼女の行動を見ているだけだ。

普段から料理しているようで、買い物もすごく慣れている。

俺なんて同じ野菜でもどれがいいとかさつぱり分らん。

彼女はジャガイモをカゴに入れると思いだしたようにポツリとつぶやく。

「先輩といつしてお買い物をしていると……」

「してると？」

「何だか新婚さんみたいな気分になりませんか？」

純粋な女の子って素晴らしいです。

照れくさそうに微笑する琴乃ちゃんが可愛過ぎる。

……めっちゃいいす、最高ッ。

男としてこれだけ女の子に好かれて嬉しくないわけがない。

「何ていうか、ずっと恋人に憧れていたんですよ。先輩の事が好きって気持ちもそうですけど、昔からの夢だつたんです」

「……恋人と買い物をすることだが?」

「それを含めて、一緒に何かを楽しむことがあります。街中で見かけるカップルとか、楽しそうだなって思つたことありません?自分もしてみたいなってずつと思つていて。実現できるなんて思つてませんでした」

それはある、俺だつてそうだ。

恋人に憧れないと言つ男はいないだろ?。

「先輩のおかげでまたひとつ私の夢が叶いました」

「あははっ、そいつでもうえると嬉しいな」

「もうしばらく買い物に付き合つてくださいね」

傍にいるだけでいい。

よく漫画とかで聞くセリフだが、実際に体験して初めて知つた。好きな女の子が傍にいるだけで心が満たされる。

恋愛つて今まで自分に関係なかつたから興味なかつたけど、いいものだな。

「……先輩。別に待つてくれていてもいいんですよ?」

買い物を終え、家に帰った俺達はキッチンで夕食作りの最中だ。狭いキッチンなので、ふたりが並ぶのも結構キツイ。だが、せめて少しくらいには手伝うべきだろう。

「野菜とか肉とか包丁で切るくらいはできるわ」

「……ホントですか?」

「琴乃ちゃんの邪魔はしないってば」

「いえ、先輩がお手伝いしてくれるならそれでいいんです」

俺は包丁で野菜を切り刻んでいく。

今日のメニューは肉じゃが、サラダ、お味噌汁……極めて基本的な和食メニューである。

和食って言えば煮物系だよなあ。

俺は地味に慣れた手つきで包丁を動かして野菜を切る。

「うわっ、先輩、すっごく上手に切れているじゃないですか!?!?」

「……まあ、これくらいはできるわ」

料理は出来ないが雑用だけは子供の頃から母さんに強制せられていた。

真面目にやらなきゃ母さんに怒られてきたからなあ。

母子家庭も大変です、いろいろと母さんの指導が怖かった……。

「先輩のおかげで早くできそうですね。ここからは任せてください。先輩の好みの味付けて濃いめですか、薄めですか?」

「うーん。俺は濃いめが好きかな」

「分かりました。そうします」

俺は自分のやれる範囲の事を終えたので、ここから先は琴乃ちゃん任せだ。

食器や箸の準備をして大人しく待つことにする。

「……琴乃ちゃん、か」

俺はエプロン姿で調理する彼女の後姿を眺める。
いつもと違う光景、そこに立つ人間が変わるだけで雰囲気が大きく変わる。

料理中の彼女に俺は満足しながら出来上がるのを待つ。
自分のために料理を作つてもらう事つて、意識した事がなかつたけれど幸せな事だ。

「琴乃ちゃん。エプロン姿、可愛いね」

「え?せ、先輩、変な事を言わないでください」

「変な」とじゃないよ」

「もうつ、調子いい」と言つて……。あんまり私を喜ばせすぎないでください」

本当に可愛いから言つただけなんだが。

今までこんな風に女の子と会話した事がなかつたから、どうにも恥ずかしい。

「……俺も恋人ができて変わつたかもな

自分の変化、それもまた恋愛の影響を受けているよつだ。

琴乃ちゃんの手料理は予想していたよりもずっと美味しかつた。味付けも俺好みに仕上げてくれた。

これがあと数日続くつのはマジで嬉しい事です。

「今日はありがと、琴乃ちゃん

いつものように彼女を家まで送る。すっかり辺りは暗くなり始めていた。

時刻は7時過ぎ、田も暮れてきている。

「先輩の役に立てるのなら嬉しいですよ」

「……十分だよ。その、明日も頼んでいいかな?」

「はいっ。任せてくれさーいね」

琴乃ちゃんは仄くしてくれるタイプだからす、
まじめにじつひつとしている

有難い。

「あれ、じつちの道は今日は使えないのか？」

琴乃ちゃんの家の近所まで来て、住宅街へ入る道が「工事中」と看板が立っていた。

「朝までは使えたはずですけど……道路工事中みたいですね？」

「じつからだとどうするんだ？」

「じつちの別の道から行けばいけますよ。家に帰る時は、普段はあまり使いませんけど、こちらの方が近いんです。実際、私は登校する時はこちらを使っていますから」

ただし、急な坂になつてるので、帰る時はあまり使いたくはないらしい。

なるほど、この坂を毎日のぼって帰るのは大変そうだ。

行きはよくても帰りは地獄つて奴だな。

ふたりで自転車をつきながら坂道を登つていぐ。

「この道つてあの展望台公園の反対側になるんだつけ？」

「そうですね。あちら側の道は住宅街を回つこむようにして上りますけど、じつらは直接住宅街の中を通つてるんですね」

高台の上付近にある彼女の家はまだ先だ。

「あつ……」

ふと、琴乃ちゃんが声をあげて立ち止まる。

その視線の先には古びた教会があつた。

錆ついた鉄扉、草木は生い茂り、つたが壁をはつてゐる雰囲氣のある教会だ。

「ボロ教会？」

「ダメですよ、先輩。そつとつ事を言つちゃダメなんです」

「じめん。じじひで、琴乃ちやんの知つてる所？」

「うちは近所ですから。小さい頃はよく集会みたいなものがあつて、皆でいろいろとしましたよ。神父さんも優しい方で……」

俺達が話してると、庭の方から誰かがこちらに歩いてくる。好々爺という言葉がよく似合いそうな人の良さそうなお爺さんだ。

「おや、琴乃さんかい？久しづりだねえ」

「神父様、お久しぶりです」

神父様か……いかにもそれっぽい服装をしてる。彼は琴乃ちゃんと俺を見比べるようにして言つて。

「この男の子は琴乃さんの恋人かな。キミも恋人のできる年頃になつたのかい」

「はい。お付き合いさせてもらつていますよ。私の大切な人なんです」

そんな風に言わると照れないはずがない。

「せうか。私は川島かわしまといひ。」の教会で長年、神父をしているものだ。琴乃さんは子供の頃によくこの教会に遊びに来ていたんだよ。キリの名前を教えてもらつてもこいかい？」

「あつ、はい。俺は井上翔太です。琴乃けやんの学校の先輩でもあります……」

俺が名乗ると彼は「井上……？」と何か思い出すような仕草を見せる。

やがて、川島さんは俺に向ついた。

「井上君か。キリ、貴、」の教会に来たことがあつただつ? 覚えていないかい?」

「……え?」

「あれは何年前だつたかな。琴乃けやんが連れて來たんだ、そつたよね」

俺がここに來たことがある?

隣にいる琴乃ちゃんに視線を向けると彼女はゆきくつと頷いて、

「ええ。昔に何度か先輩もこの場所に来てます」

「やつぱり、そつだつたかい。明るい男の子が琴乃ちゃんの傍にいたのを覚えているよ」

古びた教会などつにとも俺の記憶にない。

「……」に来たことがある……？

俺はもう一度、教会を眺めながら自分の過去を振り返りつつする。記憶の彼方に俺はまだ忘れていることがたくさんあるようだ。

第1-2章・お兄ちゃん

【SIDE・井上翔太】

古びた教会、俺はそこに10年前に来たことがあると言ひ。神父様の案内で俺達は中へと入ることにする。

「へえ、中は綺麗なものだ」

外は手入れがされていなかつたので心配したが内装は綺麗だ。ステンドグラスに礼拝堂、教会ってこんな風になつてゐるのか。

「今でも月に何度かミサをしたり、人が集まるからね

なるほど、そりやそうか。

教会内部を歩いていると、俺はどこなく懐かしい気持ちになる。

「……覚えていないけど、ここに来た気がする」

「先輩は礼拝堂に来たら前の席に座つていたんですねよ

「何のために?」

琴乃ちゃんの話によると俺がここに来たのは子供たちが集まつた時だそうだ。

今でも近所の子供たちを集めて遊んだりするらしい。

「そう言えば、琴乃ちゃん以外にも俺は何人かの子に会つたような……」

う一む、ホントに昔の記憶って覚えていないものだな。
何か自分の記憶力に普通にショックを受けるのだ。

「ここに座っていたのか」

俺は昔よく座っていたと言つ椅子に座つてみる。
礼拝堂の真正面のステンドグラスがよく見える位置だ。
正面には祭壇っぽいもの、右側にはオルガンがある。
琴乃ちゃんと神父様が雑談をしているので、俺はそれを横目に昔
を思い出すとする。

『お兄ちゃん』

俺は誰かに呼ばれた気がして振り返る。
今の幼い女の子の声は何だらうか？
辺りを見渡すも、琴乃ちゃんと神父様以外はいない。

「気のせいか？」

変に疲れているのだろう。

気のせいだと思い込み、俺が祭壇に触れた時、

『翔お兄ちゃん』

聞こえた、今度は俺の耳に直接響いてきた。

「……なつー？」

俺はびっくりして祭壇から手を離す。

「何だ、今は……？」

幽霊か、変な怪奇現象なのか？
そんなことはない。

それは昔の記憶、俺の脳裏に蘇つた記憶のひとつだった。

「お兄ちゃん、か」

間違いない、俺は「こ」で誰かにそう呼ばれていた。
琴乃ちゃんは『翔ちゃん』と呼んでいたはずだから、多分違う子
だ。

俺には心あたりがひとつだけある。

「あの写真の女の子……？」

俺を「お兄ちゃん」と呼んでいたなら年下だ。ひい。
俺と彼女は「こ」で会ったことがある。

「……違つ、それだけじゃない」

俺は何かもつと大事なことを忘れている気がする。

「この場所で俺とその子は何かをしたのか」

記憶にないが「こ」は俺にとって何か大事な思い出のある場所のよ
うだ。

じつして、思い出せないんだろうなー

「誰なんだろ？」「…」

琴乃ちゃんに出会ってからどうにも俺には違和感みたいなものがある。

思い出せないで想い出せない。

いくら10年前とはいって、あの夏休みは特別なものだつたはずだ。ひと夏の記憶を覚えていない事はないはずなのに。

「……どうかしたのかな?」

「いえ、どこか懐かしさを感じたので」

「そうか。いずれ思い出す時が来るかもしれない。井上君、また来なさい」

「ええ、もう来ていますよ」

お兄ちゃん、俺をそう呼んでいた相手が誰なのか。神父様が俺の事を知っているのなら過去の事も知っているかもしれない。

琴乃ちゃんがいない時にでも聞いてみるとしよう。

「先輩、そろそろ行きますよ。それじゃ神父様。また来ますね」

俺達が外を出ると周囲は完全に夜になっていた。

綺麗な月明かりに照らされて俺達は再び自転車に乗る。すると

「あ、あのや、琴乃ちゃん」

「はい？」

俺は直接本人から聞くのはやぶさかではないと思つたのだが、気になつて尋ねていた。

「昔、俺を『お兄ちゃん』って呼んでいた子ついていた？」

核心を突く質問に俺なりに緊張する。

琴乃ちゃんは軽く視線を俯かせて言う。

「……何で、そんなことを？」

「あの教会でそんな記憶を思い出したんだ。その、どうじても気になつてぞ」

「どんな事を思い出したんですか……？」

「これまでと違い、悲痛な面持ちで俺を見つめる彼女。

俺は何か聞いてはいけない事を聞いているのか？

「具体的には全然、思い出せないんだけど……俺をお兄ちゃんって呼ぶ子がいた気がしたんだよ。『氣のせいかな？』

「…………」

彼女は沈黙して何か思案してから言った。

「こましたよ」

「え？ 本当に……？」

「ただ、先輩の記憶に誰がいるのか、は分かりませんけどね」

「それはどういふ意味だ？」

俺の記憶に誰がいる?
その答えは簡単だつた。

「だつて、あの時は私の友達も何人か先輩と接していましたから。
その中には何人か先輩の事を『お兄ちゃん』って呼んでいた子もいました。多分、ですけど先輩の記憶になるのはその子達じゃないでしょうか？」

「なるほど……特別な意味はないってことか」

言われてみればそうかもしない。
俺が勝手に特別に思つていただけで、現実はそう特別な事などないのだ。

年下の子と遊んでいれば、そう呼ばれる事もあるだらう。

「琴乃ちゃんは昔、俺の事を『翔ちゃん』って呼んでいただらうへ」

「……え、ええ。そうでしたね。変な呼び方ですみません」

今になつて「ちゃん」付けかれているわけじゃないので構わない。
俺が気になるのは今の呼び名の方だった。

「昔は名前だったのに、今は井上って呼ぶじゃないか。最初に俺に会つた時に言ったよね。名前で呼んでほしつて」

今は井上先輩って呼ばれるから、何か気になっていたんだよな。

「……そ、それは、だつて……恥ずかしいですし」

「琴乃ちゃん。俺も恋人には名前で呼ばれたい」

俺の申し出に彼女は「……翔太先輩」と小さな声で名前を呼ぶ。

「あつ、今、琴乃ちゃんの気持ちが分かつた気がする。やっぱり、名前で呼ばれると嬉しいな。親しい感じがするし。これからもそう呼んでもくれたら俺も嬉しい。どうかな？」

俺の言葉に頷くゆづくり琴乃ちゃん。

彼女を家に送り届けるまでに何度も練習したりして、よづやく琴乃ちゃんから呼び名を変えてもうひとつができる。

それよりも、俺を「お兄ちゃん」と呼んでいた子は誰なんだろう。俺は新たな疑問を抱きつつ、自宅に帰るまで昔の事を思い出そうと悩んでいた。

……何一つ、思ひだせなかつたけどな。

【SIDE・井上翔太】

……。

「……あ、あの、翔お兄ちゃん」

控えめな少女が俺の服の袖を掴んでいた。
俺は「どうしたの?」と彼女に声をかける。
普段から大人しい彼女、俺に話しかけて来るのは珍しい。

「翔お兄ちゃん、一緒に来て欲しいの」

「俺と一緒に?どこにいけばいいんだ?」

俺よりも年下の彼女は俺の手を引いていく。

「来てくれたら、分かるから……」

しばらく歩いていくと見えたのは教会だった。
何度か来たことのある教会、いつもほとんどいないのに今日はたくさん人がいた。

「人がいっぱいいるけど、何かあるの?」

「あのね。結婚式があるんだって」

「結婚式?へえ、そ、うなんだ」

よく見れば中には花嫁姿の女人がいて、彼女の周囲に皆が集まつてゐるようだつた。

ふたりで綺麗だね、つて話会つていた時だつた。
そつと花嫁と新郎が互いに見合つてキスを交わす。

「キスつてあんなのなんだ？はじめて見た」

話では聞いたことがある。

キスつていうのは好きな人同士が唇を触れ合わせる行為だ、と。

「私も……見たのは初めて」

ほんのりと顔を赤める少女。

「ああいつのつて楽しそうだね」

「楽しい……？」

彼女は何か考えるような顔をしている。

そして、普段の彼女からは想像もできな一言を告げる。

「 翔お兄ちゃん。あのね……私とキスしてみない？」

教会の鳴り響く鐘に消されそうな小声で彼女は言った。

……。

「うべつ、痛い」

俺はベッドから落ちて、目が覚めた。

いつも同じ形での目覚めほど目覚めが悪い時はない。
変に寝がえりでもうつたのだろう。

時計を見るとまだ朝の6時半過ぎ、こつまでも寝てこる時間だ。

「……何か夢を見た気がする」

いつものじょうもなに夢じゃなくて、何か意味のあるような……。

「何だっけなあ？」

俺は起き上がりながら考えて見るが、夢なんて思いだせないのが普通なのだ。

分からぬいものは仕方ない、と俺は諦めて私服に着替える。
今日は休日、午前中だけ琴乃ちゃんに会うことにしている。
午後からは彼女が都合が悪いので朝だけでも会う予定になっていた。

る。

「さあて、少し早いが出かける準備だけでもするか」

母さんが家を留守にして今日で3日目。

今日の夜にはじめから帰ってくるらしい。

俺は食パンをトースターで焼いていた間に身支度を整えておく。

「……むう、少し焦げすぎたか？」

顔を洗つてから取り出した食パンは焦げ目がついている。

まあいい、真っ黒じゃない限りは食べられるだろ。

俺は適当にジャムを塗つて食べながら、アルバムを眺める。

「このアルバムは前回の搜索で見つかったのとは違つ、小さな物のだ。

母さんがいないのでもう一度探して見たら見つかったものだ。主に俺の子供時代（推定7歳程度）の写真が飾られていた。

琴乃ちゃんや謎の女の子の写真もある。

それ以外にも数人の見知らぬ子がそこには写っていた。

「琴乃ちゃんの言つてた通りだな。確かに俺はあの教会に行つたことがあるらしい」

その教会前での写真は琴乃ちゃんではなく、謎の女の子との写真が多い事に気づく。

「教会絡みなのか、この子は……？」

だとしたら、あの神父様に聞いてみるのが一番だろ。琴乃ちゃんにはあんまりこの話はしてはいけない。

それはこれまでに何度も話して思つたことのひとつだ。

過去の事を気にしてはいけない、彼女は俺にそう言つた。けれど、俺にはどうしても思い出せない過去がある。

この少女が誰なのか、それが知りたいだけなんだ。

「琴乃ちゃんが嫌がる相手……誰なんだ？」

きっと彼女は俺がこの少女の正体を知るのを望んでいない気がする。

隠された意味が必ずあるはずだ。

……どんな意味があるのか、確かめたいだけなんだよ。

琴乃ちゃんの家で、理沙おばさんと琴乃ちゃんのふたりと雑談をしていたら、あつという間に時間がきた。

昼食を一緒に取つてから俺は帰ることにした。

「すみません、先輩。今日は時間がなくて」

「仕方がないよ。これから、家族で用事があるんだろう?」

「今の私は先輩と一緒にいる方が大事なんですけどね」

彼女は苦笑しながら、「また明日、会いましょう」と俺を見送る。
俺は彼女の家から出てのんびりと自転車を走らせる。

実は俺にはもうひとつ、今日は自分なりに予定を立てているのだ。
それは、教会の神父様に会うことだった。

もう一度、ちゃんとあつて話をしてみたい。

俺の忘れてしまった記憶を少しでも思いだせるように。

「……あれ、神父様?」

教会前についたが、神父様は何やら作業中だった。
老人が持つには重い箱を持ちながら何かをしている。

「おや、井上君かい。今日は琴乃さんに会いにきたのかな?」

「ええ、会つてきた所です。その帰りなんんですけど……何をしてい
るんですか?」

「教会の修理やら、草むしりなどだよ。ここは所しておらんかつたからなあ。おかげで教会もすっかり古びてしまつて……。あと1ヶ月ほど先のことだが、この教会で結婚式を挙げる予定が入つてねえ。久々に手入れをしようとしているんだ」

なるほど、結婚式をするのにこの外面では都合が悪いわけだ。塗装がはずた門、古びた外観の建物にはツタが生い茂り、草は生え放題だ。

せつかくの式を前に見栄えを良くしようとするのは当然だらう。いわゆる6月の花嫁つて言つのでこの時期は結婚式が多いらしい。「毎年、この時期だけ、こんな教会でも結婚式をあげたいと言つてくれる人がいる。10年前までは普通の時でも受けっていたのだが、なにせ私も歳をとつてね。今では6月くらいしか受け付けてはおらんのだ」

「そりなんですか。あつ、その、俺も手伝いましょうか?どうせ、今日は暇ですから」

「いいのかい?」

「ええ、力仕事なら俺がしますよ。任せください」

「俺がやつと、『キミは優しい子だな』と神父様は嬉しそうに笑う。

俺にとつても彼から話を聞きたいと思っていたので好都合だ。さつそく作業開始、まずは古びた門のサビを落として再塗装しなおす作業からだ。

神父様と協力しながら門をしあげていく。

「……昔の話なんですが、俺の事つて覚えてますか？」

「ああ。覚えているよ。琴乃さんの家にひと日ほどだけ預けられていたんだろう？」

「ええ、そういうことです」

「Jの教会には当時、近所の子供たちがよく集まつておつてね。ひとりだけ、見慣れぬ子が琴乃さんに連れられてきたのだ。すぐに子供たちと親しくなり、ここへ訪れるようになつた。私が覚えているのは琴乃さんが、初めて“男の子”と遊んでいる姿を見たからだよ。だからよく覚えている」

俺は「初めて？」と聞き返してしまつ。

昔の琴乃ちゃんの性格なら男女問わず、仲のいい子はいそうだったが。

「あの子は昔から男の子が苦手だったんだ。それが、キミだけは違つた。優しさを感じ取つたのだろう。自分から手を取り、この教会に連れてきた。あの頃からきっと、彼女はキミに好意を抱いておつたのかもしれないな」

俺が初めて、Jの教会に来たのは10年も前のこと。

薄つすらと記憶を思い出しかけてきた気がする。

俺は門に白いペンキを塗りながら語る。

「……琴乃ちゃん以外に、俺が親しくしていた子はいましたか？」

「琴乃さん以外に？変なことをきく……ん？」

すると神父様はなぜか黙り込んでしまう。
もう一人の少女の事を聞こうとしていたのだが、彼でもダメなの
だろうか？

「前にも言っていたがキミは、過去の事をまったく覚えていないの
かい？」

「残念ながら。どうしても思い出せていなくて。琴乃ちゃんと遊ん
だ記憶はあるんですが……他に誰かと遊んだと言ひ記憶がほとんど
思いだせないんですよ」

「……なるほど、キミはなまづ思ひ込んでいるのか。ならば、私がと
やかく言ひ事ではないだろう。井上君、琴乃さんの事が好きかい？」

「え？ あ、はい。好きです」

「きなり言われたので俺は軽く照れながら言ひ。

「その気持ちを大事にしなさい。今のキミに必要なのは過去ではな
い。今の心だけだよ」

彼は落ち着いた口調でなまづと、「なまづの休憩にしようか？」
と話題を変える。

「どうやら、はまづがされてしまったようだ。

「もつこじんな時間だつたんですね」

「疲れだろう？ おかげでまづいぶんと作業がはかどった

既に作業開始から1時間半が経過していた。

ペンキを塗り終えた門は先ほどよりもずっと綺麗に見える。

残りはこのツタと草むしりをすれば見た目的には綺麗になるだろう。

う。

「少し、待つていなさい。冷たい物でも入れてこよう」

神父様が中に入ってしまったので俺はしばらく外で待つ。

「……神父様にもはぐらかされた、か。こりゃ、ホントに向かあつたのか？」

神父さまは「そう思いこんでいるのかい？」と俺に言った。

俺の過去、10年前に何があったんだ？

俺はただ過去を知りたい、それだけなのに。

そんな時だった、俺の視界がいきなり真っ暗になる。

「え？」

慌てる俺の顔に触れるのは手の感触にドキッとする。

そして、“その子”は明るい声で俺に言った。

「ふふつ。だあれ、だ？」

……いや、全然分からぬけど。
キミは一体、誰なんですか？

第14章・Forget me not へ後編

【SIDE・井上翔太】

『Forget me not。』

忘れな草、と言つ花の名前だ。

花言葉は『私を忘れないでください』。

同じ言葉を俺は過去に誰かに言われた気がする。

『私の事、忘れないでね』

琴乃ちゃんと再会するまで、俺は彼女の事を忘れていた。
残念ながら彼女との約束を破つてしまつたのだ。
今では少しずつ思いだしてきてはいる。

だが、俺にはまだ違和感のようなものがあった。
どうしてそう感じるのかは分からぬけどさ。
写真に写る大人しそうな美少女が誰なのか?
琴乃ちゃんはなぜ特定の過去に触ると嫌がるのか?
分からぬことが多い中で、覚えていることはある。
俺は“もう一人”的の女の子と再会を果たす。

教会で休憩中の俺にある再会が待っていた。

「ふふつ。だあれ、だ?」

笑い声と共に俺の瞳を手で覆い隠される。

真っ暗になる視界にびっくりするが、すぐに誰かが悪戯してきたのだと気づく。

「……誰だ？ んー……って、分かるわけないじゃないか」

「わうかな？ 当ててくれたからね！」になつて思つよ

「……ヒントをくださー」

「ヒント・ヒントはね……久しぶりだね、『翔お兄ちゃん』」

俺の再会を祝う女の子の声。

「 翔お兄ちゃんつ」

俺が知りたかった「翔お兄ちゃん」って言つ呼び方をする相手。まさか彼女があの写真の女の子だつていうのか？

早く顔を見たいと言つ期待と裏腹に俺には相手が誰か想像もできない。

「……うう、分かりません」

だが、どう考へても記憶にはなかつた。

「おっ、引っからなかつたね。ふふつ、だつて、私はそう呼んでなかつたし

「ガクッ。な、何だよ？ 紛らわしい……何で呼んでいたんだ？」

田隠しされながら俺は相手を思い出そうとする。こんなことをするような子はいたつけ?

「それじゃ、改めて。久しぶりだね、翔太クン」

だけど、その呼び方には覚えがあった。

「……もしかして、麻由美なのか?」

「正解つ。よくできました」

彼女は俺から手を離す、俺は明るくなつた視界をすぐに後ろの彼女へ向ける。

そこに立っていたのはいかにも活発そうなスポーツ系の美少女。雑賀麻由美(さいかまゆみ)、俺がかつてよく遊んでいた相手だ。

「この子の事はすぐに想い出せた。

「本当に久しぶりだな、麻由美?」

「うん。おじいちゃんが翔太クンが来てるって言つてたから。はい、まずはジースのプレゼント。教会の修復を手伝ってくれたんだつて? いことこころあるんじゃない」

「暇だったからな。ていうか、おじいちゃんって神父様か?」

「そうだよ、知らなかつた? こここの裏に私の家があるの」

麻由美とはよく公園の方で遊んでいた子だったので初耳だ。この教会の繫がりはちゃんとあつたんだな。

「あのひ、琴乃ちゃんとは知り合って？」

「知り合にも何も、幼馴染だし。私も翔太くんと高校も同じだよ。こつちゃんが翔太くんと恋人になつた事も知つてる。普通に相談受けたもん。断れられるかもつて不安だつたからよかつたよ。でも、私もそろそろ会おつかなつて思つたの」

「やうだつたのか。……こつちゃんつて？」

「琴乃のこと。昔からこつ呼んでいたの、覚えてない？」

「うーん、覚えてません。

何て言つと、琴乃ちゃんにものすげ失礼だらうか。

「俺、琴乃ちゃんの事つてあんまり覚えてないんだ」

「ひどい！？あんなに小さい頃から慕つていたのに。昔は“3人”でいた事が多かつたからかな……それでも覚えていないってひどすぎ。まさか、こつちゃんにその事を言つたりしてないよね？」

「…………めんなさ」

俺がこつと麻由美は呆れた顔をして俺を責める。

「そりゃ、こつちゃんも傷付くわ。そーいう所、変わつてないね。翔太くんらしげや」

「おじおじ、俺だつて少しさ成長してゐつての」

「あははっ。だって、昔もよく「ひかりんを困らせてたじやない」

くすっと笑う彼女に俺は鼻先をかく。

麻由美とは10年ぶりの再会だというのに、全然そんな気がしない。

彼女の気さくな性格がそなえているのだろう。

「これで鈴音がいれば……監掲つのにね」

「鈴音？ 鈴音って誰なんだ？」

俺は彼女に迫ると、「な、何？」と困った様子を見せる。失礼、つい勢いで迫ってしまった。

だけど、俺には大事な名前な気がする。

「鈴音は鈴音だよ？今は高校違つし、全寮制の高校だから、こっちにいなきけど。私達、4人でよく遊んだの覚えていないの？覚えていないの？覚えていないの？」

「同じ事を3回言わなくても覚えてないものは覚えてない」

「……若年性健忘症？」

真顔で頭の心配されるところのすぐ悲しい。

「違うつてー？俺はただ、思いだせないだけで」

「それじゃ、ただの薄情者」

「……何だか扱い的にそつちの方がひどい気がする」

薄情者つて女子に言わると何もしてなくとも罪悪感を抱くではないか。

「だつて、ひどいじゃない。いつちゃんの事も何となくしか覚えてなくて、鈴音に限っては記憶にもない？そんな薄情者に育つちやつたんだね。ひどいよ、翔太クン」

ひどい言われようだがまつたくもつて否定も言葉を返すことでもきない。

幼馴染達を忘れると言つのは確かにひどい男である。

昔にこれだけ可愛い子たちに囮まれておきながら、さっぱりと記憶から抜け落ちていてる時点で俺にこれまで彼女ができなかつた原因があるような気がするんだ。

俺はもうつたジースを飲みながら椅子に座り、その子の事を麻由美に尋ねる。

「……いや、琴乃ちゃんの事はそれなりに思ひだしてきてるんだけど。鈴音つて子は本当に思いだせなくて。その、一応聞くけどこの子だよな？ほら、この写真なんだが」

本当は神父様に尋ねようと思つて写真を持つてきていた。何人かの集合写真、その中にかつての麻由美も今見ればいた（思い出しました）。

麻由美がすんなりと思いだせたのは俺によく絡んできた子だからだ。

「うわあ、懐かしいなあ。そつだよ、これがいつちゃんで、鈴音もいじちゃん」

「やつぱつ、その子が鈴音つて子なのか

彼女が指差したのは琴乃ちゃんが嫌な顔をした例の写真だ。

笑顔の琴乃ちゃんの後ろに隠れるようにしている控えめな少女が

……鈴音か？

俺のもう一人の幼馴染、それが鈴音と言つ名前だと分かった。

「俺と鈴音つて仲がよかつた？」

「当然じゃない。むしろ、私達の間では一番よかつたと思うよ？そんなことを言つて琴乃ちゃんに怒られるかもしれないけどさ」

「やつなんだ。へえ、鈴音つて名前の中なんだ」

一番仲がよかつたのは琴乃ちゃんだと思つていた。
いつも傍について遊んでいたような印象があつたからだ。

「……むしろ、いつちゃんの事を覚えている方が私としてはびっくりかも」

「そりゃ、まだどうこう意味で？」

「ううん。何でもない。変な事を言つたらこつちやんに怒られるから。ほら、そつそとビジュースを飲んで。それが終わったら外の草むしりを手伝つてね？おじいちゃんギブアップでお休みしちゃつたから」

「の炎天下に老人を外にいさせるのは危険だわ。」

麻由美が変わりに手伝うことになつたようだ。

俺はグイッとジュークを飲みほして、再び外へと出る。

「暑いなあ。まだ夏じゃないとはいえ、この陽気は結構来るものが
ある」

「私は部活で慣れているけどね」

「高校では何か部活でもやつてるのか?」

「私は陸上部なんだ。まだ入部したばかりだけど楽しいよ」

見た目通り、スポーツが得意らしい。

昔から走るのは彼女の方が早かつた気がする。

「麻由美は変わらないようだな……？」

「人間、成長してもそんなに根本的な所は変わらないよ。翔太くん
が優しかったりするのもね?そりゃ、こいつちゃんがずっとと思い慕う
はずだよ」

「……そんなに前から俺のことを?」

出合つて10秒での告白を思い出す。

あの積極的な告白から俺達は再び始まったのだから。

「初恋っていうのじゃないの?そういうのって覚えているものでし
ょ、大抵は……。あつ、私はダメだからね?私には心に決めた人が
いるの。いくら翔太くんの告白でも私の心は揺らがないから」

「……別に麻由美はいいや」

「んう？ それはどういう意味かな？ あること、ないこと、じつはちゃんと吹き込んであげてもいいんだよ、翔太クン？」

琴乃ちやんを使うのはやめて欲しい。

ただでさえ、今の俺は彼女に對して覚えていなかつたという負い目がある。

今はそれなりに思い出せていろとはいえ、それで傷つけていたのは事実だ。

「これ以上、変な心配させなくていい。ていうか、確か琴乃ちゃんと同じ年だよな？ ちょっとは琴乃ちやんを見習つて俺の事を先輩扱いしない。まずは、俺の事を先輩と呼びなさい」

別にタメ口でもがまわないが、ここは年上の威儀つてものをだな。

「うん、それ無理。だって、翔太クンだし。今さら呼び名なんて変えられないよ」

あいつと却下されたので、俺は諦めて仕方なく雑草抜きを始めた。

久々に再会した幼馴染、麻由美のおかげで俺はようやく理解してきた。

俺の記憶から欠如しているもう一人の幼馴染、鈴音といつりしげ。彼女を思い出すことが俺には必要なんだと思うんだ。

それが琴乃ちやんを傷つける可能性がある、どうしても俺は過去を思い出したい。

私を忘れないで、その言葉が胸に深くつきわづっていた。

第14章・Forget me not 〈後編〉（後書き）

次回はヒロイン、琴乃視点の話です。

第1-5章・初恋の男の子（前編）（前書き）

ヒロイン、琴乃視点のお話です。

【SIDE・藤原琴乃】

大好きだった人がいた。

記憶に残り続けている小さな頃に一緒に遊んだ男の子。ひとつだけ年上で、私にとつては初めて親しくなった男の子だった。

ひと夏だけの思い出を彼はたくさんくれた。

また会える日が来る事を期待して、私は彼の事をずっとと思い続けていた。

……淡い初恋を今も抱き続けながら。

「琴乃、何をしているのー今日は入学式でしょー！」

「ふあーい……うう、眠い」

「ホントに朝の弱い子ね？そんなので高校生活、大丈夫なの？学校も遠くなつたんだから早く準備しなさい」

「はーーい」

私は眠い目をこすりながらベッドから降りる。
真新しい制服を着ながら登校の準備を済ませる。
春真っ盛り、今日は高校の入学式だった。
朝食を食べ終わつた頃には急がないといけない時間帯。

「いってきますっ」

「気をつかるのよ、こいつらじゃん~」

お母さんと見送られて私は自転車に乗る。
家を出てからすぐに急な坂道がある。
その手前で一人の少女が私の事を待っていた。

「遅いよ、こいつらじゃん~」

「じめんね。つこのんびりしちゃって。マコは時間通り?..」

「当然じゃん。私はせっかくの高校生活を楽しみにしてたの。
ふんっと私を叱る彼女は雑賀麻由美。
私の幼馴染で同じ高校に進学している。

「ほり、早く行かないと入学式に間に合わないよ」

私達は気持ち急ぎながら自転車をこしら出す。

「ねえ、高校に入ったらマコは何か部活でもするの?..」

「まだ決めてないけど、運動部は決定。陸上部とか面白やつじやない?..」

「マコには何でも合います。私は帰宅部、決定かな?..」

「こひちゃんは運動苦手だからね。高校つていろんな部活があるんだから何かひとつくらいやってみればいいよ」

マコもそう言われて私は微笑で返す。

「こうこうとあつやうだけば、私は特に部活をしたいとは考えていない。
アルバイトとかしてみたいとも思つていろし。」

「考えておへよ。やうやう高校だね」

私達は自転車置き場に自転車を止めて、自分たちのクラスを確認する。

「マコと回じクラスだ。よろしくね?」

「よかつた。こひちやんと一緒にならまたテストの時に助けてもらいたいもん」

「え? それだけ?」

「それも本音だけじ、こひちやんと一緒になれて嬉しいよ」

やつぱり、初めての場所に知り合いがいてくれるのは心強い。
入学式が行われてこの高校に入学したんだという自覚が湧いてくる。

体育館で校長先生の挨拶を聞いていると眠くなつて来る。

「ふわあ」

つい軽く欠伸をしてしまひ。

春先つて温かいからいい心地なの。

ウトウトしかけていると、私が眠つてしまつ前に先生の話が終わつた。

「……」「ひやん。寝てたでしょ？」

入学式の終了後クラスに戻る時にマコに注意される。

「寝てなこつて。寝そうになつたナビ」

「寝ちやダメでしきうが。この後、先輩が学校の案内してくれるんだって」

わざわざ先輩が案内してくれるらしい。

しばらくすると私のクラスに何人が男の生徒たちが入つて来た。
校舎内を案内してくれる先輩達。

「へえ、結構広い校舎だ。思ったより迷子にならそう

マコがそう言つのも頷ける。

五角形の形をした校舎なので、どこがどこなのか一度、2度では覚えきれない。

どこを通つても同じに見えるんだもん。

「でも、この学校の設備ついていいね。図書館も広いからこうんな本があるよ」

私達が最後に案内されたのは図書館だった。

「「」ひやんって本を読むの大好きだから楽しめそつじやない？」

「うん。それは書いてこる」

私の趣味は読書なので、これだけ多くの本があると読み応えがありそうだ。

いくつか気に入った本を見つけて私は楽しみにしていた。

「……」ひやん、やったの?」

ふとある事に気が付いて私は辺りを見渡した。

「「」ねん、携帯が見つからなくて……。あれ、どこかで落としたかな?」

「鳴らしてあげようか?」

「うん。お願い。もしかしたら、落としたのかも」

マコが私の電話にかけてくれると、誰かが電話で出た。

「あ、はい。そうですか、ありがとうございます。これからどちらに行きます。はい……、と。」ひやん、携帯見つかったよ

「誰か出してくれたの?」

「うん。体育館に落ちていて、後片付けをしていた先輩が見つけてくれたみたい。今、預かってるから体育館に取りに来てってさ。先生に言つておいてあげるから取つてきなよ。拾つてくれていてよかつたじゃない。ムダに探ししまわる手間がばぶけた」

「ひやん、入学式の時に体育館に落としてしまってたようだ。」

拾われていた事にホッとした私はすぐに体育館へと取りに行くことにした。

体育館では先ほどの入学式の後片付けで何人かの先輩達が椅子などを運んでいた。

「あ、キミね？　はい、これ。椅子の下に落ちていたのよ」

体育館に入ると女の先輩が私に携帯を手渡す。

「持ち主がすぐに見つかってよかつたわ。なくしちゃダメよ」

「ありがとうございます」

「うふ。これからいい高校生活を始めてね」

「はい。頑張りますっ」

携帯電話がすぐに見つかってよかつた。

先輩に私はお礼を言ってからその場を立ち去る。うとする。その時、前から一人組の男の子が机を運んでいた。

「あつ、『ごめん。そこをどうしてくれるかな？』

私はそつと避けるとひとりの男のが「『ごめんね』と軽く挨拶してくれる。

私は通り過ぎていくその横顔を見つめていた。

「おい、中山。これが終わったら帰りにどこか寄らないか？」

「いいねえ。ゲーセンにでもよつていいくか。そういうや、井上つて……」

井上、という名前に私はハツと振り向く。
優しげな笑顔を浮かべる男の人。
その顔には確かに面影があつた。

間違いない、あの人は……！？

彼らは倉庫の方へ立ち去つてしまつたので私も教室に戻る。
私は高鳴る気分を抑えながら、あの人の事を思い返す。

「……井上、翔太……？」

私が幼い頃に出会つた初恋の男の名前、それが井上翔太。
彼が同じ高校にいる、それを知つた瞬間の高揚感と興奮は私を驚かせる。

だつて、また彼に会えるなんて思つていなかつたんだもの。

教室に戻り、今日の予定が終了してから私はすぐにマコを連れ出します。

「な、何よ？どうしたの？」

「あのね、見つかったの！」

「そりや、携帯電話は見つかつたでしょ？先輩が拾つてくれたん

だもの」

「違うのよ、マコ。あの人とさつき会ったの。あれは絶対に間違いなく彼よー。さうに違いないわ。つわあ、どうしようか・本当に? 会えるなんてなんて思つてなかつたのに、同じ高校だつたんだ」

マコは興奮する私に「ちよつと落ち着きなさい」と軽く額を叩かれ。

「……彼つて誰よ? 誰かに会つたの?」

「うそ」

「うそちやんがここまで興奮する相手つて……もしや、翔太クン? 彼女も以前に彼と会つたことがあるので、すぐこの前を思い出してたようだ。

「やうよ。間違になつて。本当にまた会えたの~」

「喜ぶのはいいけど、それつて間違になく本人?」

「決まつてるじゃない。話はしないけど、間近で顔は見たの。本人だったわ」

「話してないのに断言できる? あれから何年経つてこと? と思ひのよ

あの思い出の日々から過ぎ去つた年月は遠い。

「9年と8ヶ月。もうすぐ10年だよ」

「……こつちやん、よく覚えているね？私も覚えているけど、セシ
まで詳しくは覚えていないって。さすがに恋している女の子は違う
わね。それで、翔太クンはここに先輩だったの？」

「ええ、井上先輩にまた会えるかもしれない」

そう思つと嬉しくて仕方がない。

彼の母親は私の母と親友なので、付き合いはある。
けれど、先輩本人の話は私もしないのでこれまで会えずにいた。
ほぼ10年の月日を経て、再会できたことの喜びは大きい。

「ていうか、何で井上先輩って呼ぶわけ？昔はちゃんと名前で呼んでたのに。そんな他人行儀にいきなりならなくても」

「だつて、今さらそう呼ぶのは恥ずかしいでしょ？」

「……よく分かんないけど、よかつたじやない。こつちやんがずっと好きだった相手なんだから、恋人になれるといいね？」

彼女の何気なく言つた一言に私は愕然とする。

「恋人……？」

そうだ、あれから10年経つて先輩も変わっているはず。

「もしかして、恋人のひとりやふたりもいたらどうしようつー！？」

「……こつちやんってそんなキャラだつけ？」

運命的な再会に喜ぶ私に呆れるマコ。

それは桜の散り始めた春のお話、この物語が動き出すまであと少

し

。

第1-6章・初恋の男の子（後編）（前書き）

ヒロイン、琴乃視点のお話です。

【SIDE・藤原琴乃】

井上先輩との再会。

私が長年思い続けてきた人はすっかりと成長していた。けれど、少しだけ会う時間が遅かつたかもしれない。

「よかつたじゃない。こつちゃんがずっと好きだった相手なんだから、恋人になれるといいね？」

彼女の何気なく言つた一言に私は愕然とする。

「恋人……？」

そうだ、あれから10年経つて先輩も変わっているはず。

「もしかして、恋人のひとりやふたりもいたらどうしようつ！？」

何たる失態、この時までその可能性は全く頭になかった。いつか私が先輩の恋人になりたいという漠然とした憧れと夢。小さい頃に出会つただけの男の子。

それでも、ずっとと思い続けてきた私にはその事実はかなりショックだった。

もつと早く、会う事ができていれば……未来は違ったのかな？

「……そつか。先輩に恋人がいるんだ？」

「おーい、こつちゃん？」

「あれからもう9年8ヶ月も経ってるんだもん。先輩に恋人がいるのも、仕方なくて……仕方ないから……ぐすつ」

「え？ あ、ちょっと待つてーーー」つちゃん、早まるな！？まだ何も知らないんだつてつば。ホントに恋人がいるかも分らないんだよ？今日会つたばかりで本人かどうかもわからないんでしょ？が

そう言えばそうだった。

先ほど会つたばかりだと言つのに、思わぬ想像で私は自分自身を傷つけていた。

何も彼に恋人がいると決まつたわけではない。

「まだ私にも可能性くらいはある？」

「十分すぎるほどにあるってば。その先輩が本当にあの翔太クンなのか、確認して、色々と調べてみればいいじゃない。恋人とかの話はそれからでしょ？ね？」

マユの励ましに私は落ち込んだ気分から少しだけ回復する。

「……うん。調べてみよう」

「よし。とりあえず、今日はこのまま帰ろう。明日から私もお手伝いしてあげるから。今日は入学気分を味わおうよ。帰りに、駅前のケーキが美味しいお店にでも……」

親友の励ましつて結構大きいものだった。
たつた一言で余裕のなかつた私を落着かせてくれたのだから。

数日後、私は出来る限りの方法を使って先輩の事を調べた。

この学園に通り知り合いの先輩達への聞きこみで分かつたのは……。

…

「先輩はやっぱり、井上先輩だよ。間違いなかつた」

昼休憩、マコとお互にいろいろな人から聞いてきた情報を交換し合つ。

「……どうやら、本物みたいな感じ。母子家庭でお母さんが看護師って言うのもあってるんでしょう？部活は所属なし。現在は帰宅部。頭も特別いいわけでもなく、運動神経もそれほどでもない、じく普通の男の人って印象が強いね？」というか、これだけ平凡というか普通の子が翔ちゃんだったんだ？

「変な事を言わないで。井上先輩はやればできる子なの」

「……それ、思いつきり失礼な発言だつて感じでござる？」

だって、普通とか言われるとなぜかムツとするんだもの。

それはさておき、間違いなく先輩があの時の男の子だつてことは判明した。

「こんな遠まわしな事をせず、じくちゃんのお母さん経由で調べてもらえば楽だったんじゃないの？親友でたまに遊びに来たりするんでしょ？」

「それは、そうだけど……恥ずかしいじゃない」

肉親に自分の好きな人を知られるのって結構恥ずかしい。
両想いならまだしも、まだ片思いでしかないんだから……。
お母さんに知られたら絶対にからかわれるに違いない。
その羞恥に耐えてまで、彼女を頼るという選択肢は選べなかつた。

「で、目的の男の子が翔太クンだと判明して、一いつちゃんはどうするの？」

「……しばらくは様子を見たいの。まだ、正式に恋人がいないか分からぬから」

「残念ながらいないつぽいよ？ いないというより、世間的にはあまりモテないっていうか……あつ、別に翔太クンの容姿とか性格がどうとかって言うんじゃなくて、女の子受けする側の子じゃないってだけだよ？ そんな怖い顔をしないで？」

私が睨みつけると彼女は慌てて言葉を言いかえる。
先輩の恋愛関係における情報はほぼ皆無だった。

浮いた噂も話も特になし。

実際に聞いてみなれば分からぬけれど、先輩には交際している女性はいないようだ。

「様子見つて、それだけ好きなら告白しちゃえばいいのに？」

「簡単に言わないで。『好き』とかすぐに言えるはずがない」

「そうやってのんびりしても、恋人はできないんじゃないの。ウジウジしてたら誰かに先を越される可能性も無きにしもあらず。ま

あ、こいつちゃんが奥手な純情つ娘つてのは知つてゐるからしちゃうがないけどさ」

「……分かつたわ。今すぐにも告白して来る

マユは「ま、待つて。からかってごめん~」と急いで私を止めてくる。

でも、彼女の言うとおりなんだと私は理解はしていた。
何もしないで大好きな人を手に入れることなんてできるはずがないんだ。

入学式から早数週間、ようやく高校生活に慣れ始めた。

中学の時は違つ生活習慣に最初は戸惑つたけれど慣れるのは早い。

私は屋上があまりにも気持ちよかつたので図書館で借りてきた本を読んでいた。

心地よい風と穏やかな口差しを感じながらの読書はそれなりに雰囲気がいい。

私は本を読みながら、つい考え方をしてしまっていた。

「……来週にでも先輩に挨拶しよう。私の事を覚えていてくれるかな？」

私と井上先輩が過ごしたひと夏と言つ時間は短いものだった。

小学校1年生の初めての夏休み。

私の家に預けられた男の子がいた。

母の親友の息子、それが井上先輩だったの。

最初は私に興味はあまりない感じだったけれど、少しづつ私の事を受け入れてくれた。

優しくて、彼の傍にいることがすく楽しくて。

たったひと夏だけの思い出が……私にとって忘れられない一生の思い出だったの。

「覚えてくれていいといいな……」

私は思い続けてきたから先輩の事はよく覚えている。
でも、先輩はどうなんだろう？

私の事なんて忘れてしまっているかもしない。
その不安は常にあって……不安を隠すために私は自分に勇気を与える。

「頑張れ、私。先輩に会って告白しなきゃダメなんだから」

これまで思い続けてきた気持ちを無駄にしたくない。
ダメかもしれないけど、自分なりにここまで頑張つて来たつもり
だった。

高校生になり、先輩と出会つてから私は自分を変えてきた。

「ソレまでは何とか準備はしたつもり。後はタイミングと運がよければ……」

近いうちに私は先輩に告白するつもりなんだ。
それだけのために今まで準備をしてきたの。
これまで気にしていなかつた容姿だつて、自信を持てるよつて化粧なども覚えた。

お世辞程度かもしれないけど、クラスメイトの男子からも評判はいい。

それに私は決めたんだ。

先輩に告白して断れるまで自分からは諦めないって。

例え、私の事を覚えてくれなくたっていい。

先輩にとつてはそこから始まりでもいいから、私を受け止めて欲しい。

「我が儘だよね、すつぐく我が儘な自分の気持ち。

「……でも、好きな気持ちは止められない」

止められないの、自分ではもうこの気持ちを抑えることなんてでききない。

私は本を読むのを止めて、腕時計を眺める。
そろそろ家に帰ろうかな。

立ち上がろうとした時、私は気づいたんだ。
いつのまにか、屋上には人がいた。

誰かいたのに私は気づいていなくてドキッとする。

考え事に集中し過ぎていたらしい。

こんなところを人に見られるなんて恥ずかしいなあ。

私は慌てて本を片づけようとする。

「あつー。」

私を不思議そうな視線で見つめていたのは男の人だった。
彼は私に気づいて、こちらをジッと見つめている。
嘘だと田の前の現実を疑つた。

そんなはずない、これは私の妄想かもしね。

こんなに都合のいい現実が起きるはずがないんだって。

「…………！」

思わず持っていた本を落としました。
そこにいたのは、井上先輩だった。
偶然にしては出来過ぎていて、必然とか言ひかけや「ヒドリマの見
過ぎだと笑われてしまうかもしれないけれど……。
私はその偶然に似た必然を感じた。
これは神様が与えてくれた私へのチャンスなんだ。
あの10年前の夏から恋い焦がれ続けてきた相手。

「好きです。私と付き合ってください」

思わず自分の口から出てきた言葉に一番自分が驚いたと思つ。
あまりにも素直に、自然に、当然のように口から出た一言。
恥もなく、身体が震えてしまつこともなく。
本当に想いのままに、彼への気持ちが溢れ出た。
さつきまでどう告白しようかシチュエーションを考えていたのが
バカラしく思えるほどに、あつさりと現実と言つのは動き出す。

「…………？」

彼は呆然としながらそう呟いた。
ずっと忘ることのない思い出がまたひとつ、出来上がる。
ほぼ10年の歳月をかけた再会、そして告白。
私はこの初恋を成就させたい。
好きな人には好きだつて想いを伝えて、大切な人と結ばれたい。
恋している人間ならば誰だつて思うことでしょう？

井上先輩、大好きです。

。

第17章・苦悶と痛み（前書き）

ヒロイーン、琴乃視点のお話です。

第17章・告白と痛み

【SIDE・藤原琴乃】

井上先輩とまさか偶然にも出会ってしまった。
夕刻の朱色の日差しが少しだけ眩しい。

「……先輩、好きです」

先輩は「へ？」と啞然とした様子で私を見ていた。
こうして改めて見ると先輩には昔の面影があった。
成長してすぐ男の子らしくなっているけれど、雰囲気はある頃
から変わらない。

「私と付き合ってください」

自分がその台詞を言う時が来るなんて思つてもみなかつた。
先輩は残念ながらすぐには私の事を思い出してくれなかつた。
予想してたけれど、寂しいのは仕方ない。
だけど、突然の私の告白にも関わらず、先輩は私を受け入れてくれた。

恋人同士。

夢にまで見た先輩との恋人関係。
言葉にしても、どこか現実味がなくて、私はドキドキと興奮して
いた。

胸の高揚を抑えることができず。

私は先輩と別れて家に帰つてからもひとりで幸せにひたつっていた。

「……琴乃、ちょっと来なさい。」

部屋にいた私にお母さんがリビングへ連れ出す。

「な、何なの？」

「私に報告すべし事があるんだじゃない？」

彼女はソファに座るよつにうながす。
じついう時の母に逆らつても後でひどい目にあうだけ。
大人しく従い、お母さんと向き合ひ。

「……わっせ、葉月から電話があつたのよね？」

「くふ、おばさんか？？」

「それがすつぐ嬉しそうだつたからどうしたのかなって思つたら、
息子の翔ちゃんに恋人ができるんだつて」

おばさん経由でバレるのは想定していたけど、じついう形で追及

されるのは恥ずかしい。

「あははっ。まさか琴乃が翔ちゃんの事を好きだつたなんてね？」

「うぐう……」

お母さんからいつ言われるとものすごく嫌な感じ。
祝福されているのは分かるけど、照れくせ。

「よかつたじゃない。琴乃が翔ちゃんの事を愛してたなんて初耳だけど？」

「いいでしょ、別に……私が誰を好きでも、んにゅっ！？」

いきなりお母さんが私の頬をむにゅっと触れてくる。
びっくりするじゃない！？

「何するのよ、お母さん？」

「笑顔を見せなさい。琴乃は笑えば可愛いんだから」

「笑わなくとも可愛いです」

「ふふつ。そうね、私の娘だもの。でも、最近になつて妙にオシャレに気を使いだしたりとかしだして、変わつて来たなつて感じていたけど、恋愛をしてたんだ」

私が先輩を好きだつたのは本当にずっと昔だ。

ほぼ9年近くは実際に会えずに漠然とした想いを抱えたままだった。

それでも、会いたい氣もちに変わりはなくて。

住んでいるらしい場所にも何度も足を運んだけど、会えずじまい。いつか会いたいと願い続けてきた相手が井上先輩だつた。

「それにしても一途に思い続けてたなんて、私は気付かなかつたわ

「……からかわれるの分かつてたし」

「やだなあ。この私が娘で遊んだりしないわよ？」

信用できない、お母さんのモットーは「面白ければよい」だもん。

「琴乃が私を少しでも信用してくれたら、もうと早くに再会できてるのに?」

「それは……」

何度か尋ねようと思つた事はあった。

彼に会いたくて、話だけでもしたかったから。学区が違うので小学校も中学校も同じじやなかつた。

「それはもういいの。結果として再会できたんだから。自分の力で会えた事に意味があるの」

「……よく我慢してたわね。初恋が実つてよかつたじやない。そうだ、この事をお父さんにも報告しなさい」

「それは無理!…?」

「何で? あの人、琴乃に恋人ができたらぜひ相手を連れてきてつて言つてたわよ。ほら、うちつて女の子ばかりだから男の子に憧れていたんでしょう。お姉ちゃんにも後で連絡しておいてあげるわ」

「もうつ、恥ずかしいからやめてよ~っ!」

私は顔を赤くしながらお母さんを否定する。

だって、家族相手に報告なんて羞恥以外の何物でもない。それに、特に自分の姉にバレたら嫌だもの。

「もういいから。私、部屋に戻るね」

「からかいすぎたかしら？琴乃、これだけは言っておくわ」

お母さんは優しい笑顔で私に言った。

「翔ちゃんはいい子よ。いい人を好きになれてよかわったわ。おめでとう」

「……うんつ」

私はお母さんに微笑みで返した。

自室に戻り、私は懐かしいアルバムを広げる。

先輩が1ヶ月間ほどこの家に預けられていた時期の写真は何枚も残っている。

ずっと私が大事にしてきたアルバムは宝物だった。

「……今日はいろいろとありすぎて疲れた」

偶然にも先輩と再会を果たして、勇気を持って彼に告白して、付き合ってくれる事になつて……。

それだけで心が満たされて幸せなの。

この10年間、抱き続けてきた想いが実った事の達成感が大きい。

「今日から恋人なんだ。どうしようつ、すごく嬉しい」

私は「写真を眺めながら、何枚かの写真を抜きだす。それを手にしながら、私は目をそむけてきたある現実と向き合つ。

「でも……先輩は私のことを……」

小さな頃の私が「写る写真」。

私は優しいお兄ちゃん的存在だつた先輩に幼心に惹かれていた。初めて親しくなつた異性に心を奪われてきた。

「先輩に嘘ついちゃつたな」

ポツリと呟いた一言に興奮が少しづつ冷めていく。

私は嘘をついた、先輩に嘘をついてしまった。

だつて、先輩が……ううん、先輩は悪くない。

悪いのは否定しなかつた私、嘘をついてしまつた私が悪いんだ。先輩に嫌われたくなかつた。

だから、嘘をついてしまつた。

その罪悪感に押しつぶされてしまいそうになる。

「これからも嘘をつき続けなきゃダメなのかな?」

先輩にある嘘をついたこと、それが後の私を苦しめることになる。それを分かつていながらも、今の関係を壊したくなくて。

「……仕方ないよね。嘘つくのは嫌いだけど、嫌われるよりマシだもん」

私は嘘をつき続ける覚悟を決めた。

いつかはバレるその時が来る事も可能性にいれて覚悟をしたの。

「私は幸せになれるのかな？」

写真で笑顔を見せる小さな頃の私に言ひ。
あの頃とは違う、この胸に突き刺さる小さな痛みを抱えての恋の
始まり。

ずっと夢に見ていた、私と先輩との交際が始まつたんだ。

第17章・告白と痛み（後書き）

次回からまた翔太視点に戻ります。

【SIDE・井上翔太】

懐かしい夢の光景。

響き渡るのは教会の鐘の音。

礼拝堂の十字架の立つ祭壇の前で俺はステンドグラスを眺めていた。

「またここにいたんだ、翔太クン？」

「……麻由美？俺を呼びに来たのか？」

「うん。ユウちゃんも鈴音も待ってるよ。早く遊びに行こうよ」

麻由美が俺の手を引いて教会の外へと出ようとする。

「待つて。俺、もう少しだけここにいたいんだ」

「何があるの？」

「この“すてんどぐりゅ”って言つの、すぐ綺麗だから」

何かを綺麗だと思ったのはこれが初めてだった。

光の加減で美しく輝くステンドグラス。

色彩豊かなガラスが描くのは天使の絵だった。

「別に珍しくないと思つよ？」

「麻由美には見慣れているかもしけないけど、俺はここに来て初めて見たんだ」

「そうなの？翔太クンがそう言つなら待つてあげる」

教会と言つ場所に来たのも、ステンドグラスを見たのもこの教会に来て初めてだ。

それだけに何度も来てみては興味津々に中を見て回っていた。その中でも特に気に入っていたのがこのステンドグラスだ。

「天使が可愛いよねえ。私も好きだけど、こここの教会のステンドグラスは小さいよ。私、もっと大きいのを見たことがあるの」

「大きいつてどれくらい？」

「あのね、隣街にある教会はすごいんだよ。“ぱいふおるがん”っていう大きなオルガンと、ステンドグラスもたくさんあったの。天使とか女神とか、すつごく色が多くて綺麗だったなあ……」

それほど綺麗ならば一度、見て見たい。

「教会つて結婚するための場所なんだろう？」

「結婚式もする場所。おじいちゃんが言つてた。教会は神様にお祈りをする所なの。皆が幸せに生きていけますよつこつて」

麻由美の言葉に俺は「そうなんだ」と頷いて椅子に座る。

「翔太クンは今、幸せ？」

「今はお母さんがないなくて寂しいけど、皆がいてくれるから幸せだ

」

母のいない寂しさを癒してくれるのは友達がいるからだ。この夏で新しくできた何人も友達のおかげで寂しくない。

「……そろそろ、行こうか」

「ううつ。今日こつもの公園で遊ぼうよ」

でも、俺は一つの不安を抱きつつあった。
この夏が終われば皆と離れ離れになってしまふのではないか。
せつかく仲良くなれた子たちとまた別々になってしまふのはさうく辛い。

母に会いたい気持ちと友達との別れ。
どちらも俺にとっては寂しい事だった。

……。

どうやら、夢を見ていたようだ。

「おーい、起きあ。もう休憩だぞ？」

俺を揺さぶる中止の声で目が覚める。

4時間の数学は先生が不在で自習時間だったために寝てしまつたのだ。

「んっ。男の声で起きた」とせどむなしに事はないな

「人が善意で起こしてやったのに、何たる言い草だ。それには同感だが。起されたるなら、女の子がいいのは当然だろ」

中山は呆れた顔で俺に言ひ。

「まったくだな。しかし、何か夢を見ていたのだが……どんな夢だった？」

「知るか!? お前の夢物語なんて興味ない。口の夢でも見てたんだろ? 恋人とくんずぼぐれつか? 良い御身分だな」

「違うつての。うーん、最近、妙に変な夢を見るんだよな。何でだろ?」

夢を見ると言つより、何かを思い出すといつが……。

夢から覚めてもほとんど覚えていないんだが、どうにも変な気分になる。

「夢つてのは『脳が記憶の整理するためのもの』だつてよく言つぞ? どうせ昔の記憶でも思い出してるんじゃないのか? 大抵、夢は覚えてない事が多いんだから気にするなよ」

中山の言つとおりかもしれない。

いちじち夢を気にしていたらきりがない。

例え、過去の記憶だとしても、起きてからも覚えてないなら意味がないからな。

「そりいや、お前の携帯、震えてたぞ?」

俺は起き上がると、マナーモードだった携帯を取り出して履歴を見る。

不在着信が1件、相手は……麻由美？

一昨日の土曜日、久々に再会を果たした幼馴染のひとりだ。麻由美も琴乃ちゃんと同じこの学校の生徒だった。

「何だろ？、かけ直して見るか？」

俺が電話をかけるとすぐに麻由美が出る。

『気づくの遅い～っ！今すぐ、屋上へ来てよ、翔太クン』

「今から？いや、今は無理。琴乃ちゃんが……あれ？」

琴乃ちゃんが俺を迎えて来ているはずだが、教室には来ている様子がない。

『「じつちゃんなら、ただいま買い出し中。翔太クンのパンもついでに買っててくれるから、急いでじつちに来て。一緒にご飯を食べようって思ったの』

どうやら、お昼のお誘いらしい。

普段は琴乃ちゃんと一緒に食べているが、麻由美も参加するようだ。

「了解した、すぐにに行く

『ダッシュで来てね。あと3分以内に私の所に来なきゃ、罰ゲームだから。それじゃ、スタート！』

罰ゲーム?と気になる発言で止めた彼女は電話を切ってしまった。くつ、こじから3分で屋上に行くには廊下を走らなきゃならない。まったく、面倒な事をさせやがるが、麻由美の性格的に提案にのらなかつても不戦勝で罰ゲームだらう。

俺は急いで階段を上って屋上に出る。

時間は2分30秒過ぎ、何とか間に合つた。

俺が屋上の扉を開けるがそこには麻由美の姿はなかつた。

「……あれ、いないぞ?」

昼食を食べる何人かの生徒はいるが、琴乃ちゃんも麻由美もいない。

再び、携帯電話が鳴るので出て見ると、

『あと10秒だよ?間に合わないの?どうしたのかな?』

「屋上についたが、どこにもいないぞ?お前、今どこにいる?」

『ヒント。そこから真っすぐ前を見て』

「前?前なんて見ても、特別何もない……って、ええ!?」

俺の目の前から数十メートル先、誰かが手を振っている。

『残り時間、3秒、2秒……』

「ちょっと待て。それはすごい、『ジジヤない』ことかー?」

『一秒、0~つ!~はい、残念でした。翔太クン、間に合わなかつたから罰ゲーム』

麻由美は『何にしようかな?』と楽しそうに笑いやがる。電話が無慈悲にも再び切られて、俺はガックリと肩を落とす。この学校の校舎は5角形の形をしている。いわゆるペントagonみたいな形状で、屋上が繋がっているためにかなり広い。

麻由美がいたのは何を思つてか、この入口から一番離れた反対方向のベンチだつた。

「これは普通に反則だろ?」

何て言つても言い訳にしかならない。

あの麻由美が昔と変わつていらない証拠だ。

昔から俺をからかつたりするのが好きだつたのだ。

「……さつさと行くか」

俺は諦めて罰ゲームを覚悟しながら彼女達の元へと向かつた。

「はい、お疲れ様。惜しかつたね、翔太クン」

屋上の片隅のベンチで俺を待ち構えていたのは麻由美と琴乃ちゃん

んだ。

特に琴乃ちゃんは申し訳なさそうな顔で「すみません」と苦笑い。

「麻由美のする事を責めてもいいか？」

「私はちやんと屋上だつて言つたもの。罰ゲームは……後でいいや。まずは食事にしよう。私、すしくお腹が空いてるんだ」

「へーへー。俺もじ飯にするか。あつ、琴乃ちゃん、買つてきてくれてありがとう」

琴乃ちゃんが買つてくれたのは俺の好みを把握してきているのか、俺の好物のパンばかりだ。

俺はお金を支払つてパンを手にする。

「いただきまーす」

挨拶もそこそこに俺達は食事を始めたことにした。

大好きな甘いクリームパンをかじりながら、琴乃ちゃんに話題。

「琴乃ちゃん。麻由美も同じ学校だつたんだな

「はー。そうですよ。何度か紹介しようと思つていたんですけど」

「じつちやんの恋愛を優先してたの。せつかくの再会に私が水を差すのもアレでしょ？しばらく、様子を見てからと思つていたら会えちやつたんだよ。翔太クンと出会つたのは偶然なんだからね

本当ならばG.W.くらいに俺と顔をあわせる予定だつたようだ。

そんなことを気にしなくてもいいと思うのだが。

俺と麻由美が話をしていくと、琴乃ちゃんが控えめな声で尋ねてくる。

「あの、マコの事は覚えていたんですか？」

「え？ ああ、マコって麻由美のことか。そうだな。ものすごく明るい女の子がいたのは覚えていたからさ。麻由美と会つてすぐに思い出したよ。麻由美は昔と全然、変わつていなくて……」ビラビラした、麻由美？」「

俺の田の前で何やら手を動かして、よく分からぬジョスチャーをする麻由美。

俺は分からず、「何やつてんだ？」と疑問を抱く。

その理由はすぐ分かった。

「へえ、そなんですか。マコはすぐに思い出したことですね？」

「え？ あれ？ 琴乃ちゃん？」

「……私の事なんて、全然……思ひだしてくれなかつたのに。マコはすぐですか？ いいなあ、マコ……羨ましいですねえ」

俺、俺、地雷を踏みました……。

俺の発言に落ち込む琴乃ちゃん、麻由美は「あ～あ」と軽く肩をすくめる仕草をする。

「何て冗談ですよ？ 別にいいんですけどね。先輩にとつてはマコの方が記憶に残る女の子だつただけですから。私の事なんてどうでもよかつたと言つ事ですから。残念ですけど、私、まったく気にしてませんからっ！」

実は内心はめっちゃ怒りますか、琴乃ちゃん？
珍しく不満そうに頬を膨らませる彼女に俺は戸惑つ。
恋人を怒らせるとはやつちまつたぜ……ガクッ。

【SHIDE・井上翔太】

琴乃ちゃんをふとした事で怒らせてしまった。

彼女を思い出せずにいた事は俺にとっても負い目を感じてこる。俺は何とか言い訳をしようと必死に考えた。

「違うんだ、琴乃ちゃん。これは、その、変な意味ではなくて……」

「別にいいワケなんていりませんよ」

「違うんだってば。ほら、麻由美も何か言つてあげてくれ

「何で私が翔太くんのフォローしてあげないといけないの？」

素で返すとは何とも薄情な幼馴染である。

恋人と喧嘩なんて言つ自体だけは避けたい。
琴乃ちゃんって意外と怒らせると怖いんだ。

「琴乃ちゃん……？」

無視状態で食事を続ける琴乃ちゃん。

「……あ、あのさ、琴乃ちゃん。別に俺は麻由美の事を覚えていないし

「再会した時にすぐに思い出してくれるほど、覚えてくれたのに？」

「麻由美は黙つてくれ」

下手に話を「じりせる時には躊躇るのが。
おかげで琴乃ちゃんは「むすつとした顔を見せる。

「……へえ、すぐここ?」

「やうだよ。いつかやんは忘れてたなんて薄情者だよね」

フォローしてくれる様子もない麻由美。
本当にこの子は昔から変わっていない。
ただ、今は敵に回すわけにはいかない。

「麻由美、お前なあ……」

「あははっ。だって、翔太クンってからかうと可愛いんだもん」

「あんまり、変な事言つといじめるぞ」

「じゅちゃんの前であんまり変な事は言わない方がいいと思つよ」

ジーッと視線を感じるのは気のせいではない。

「麻由美と翔太先輩つて仲いいですね。別にいいんですけど」

「琴乃ちゃん、機嫌を直してくれ。俺達は別に仲がいいってわけじゃないで……」

「えーっ。やうなの?私と翔太クン、仲がいいと思つていたのに?」

「……ふいっ」

ガーン、琴乃ちゃんにそっぽを向かれてしまった。

俺は麻由美に曰で「何してくれてるんだ?」と非難する。

一番悪いのは忘れていた俺だが、それをあおった麻由美も同罪だ。

「……私、もう行きます」

「え? あ、ちょっと、琴乃ちゃん! ?」

「あとはお一人で仲良く話でもしていくください。それでは……」

冷たくあしらわれてしまつた。

これは本氣で怒つておられるのでは?

追いかけ損ねで、麻由美と屋上でふたりっきりになる。

「麻由美、何をあおつてるんだ? あん?」

「怖いよ、翔太クン~。私にハツ当たりしないで」

俺が睨みつけるとさすがに麻由美も反省する素振りを見せた。

「琴乃ちゃんに嫌われたらビーフしてくれる?」

「ユウちゃんが翔太クンを嫌う事はないから安心して。何年、翔太クンの事を好きだと思つてゐるの? 10年は長いよ?」

「……あれだけ怒つてたらどうか分からぬ」

琴乃ちゃんに出会つてからずつと笑顔しか見ていくなくて。あんな不満そうな顔を見たのは初めてなのだ。

それゆえに俺も気持ちが焦り、不安になる。

俺は食後のジュースを飲みながら屋上から空を眺める。青空に雲が流れしていくのをジットしてみている。

「なあ、麻由美？俺は琴乃ちゃんの事を忘れていたわけなんだが」

「エリちゃんだけじゃなくて、鈴音の事も忘れているけどね」

「それもそうだけど、今、大事なのは琴乃ちゃんの話だ。俺って何でこんなに昔の事を忘れているのかなって考えたんだ」

「そり、ついに翔太クンも気づいてしまったのね」

麻由美は淡々とした口調で真面目な顔を俺に向けた。今までと違う雰囲気に俺は思わず息をのむ。

「な、何だよ？まさか、俺が忘れている事に意味があるのか……？」

あの10年前に俺に何か起きたとか、そういう話か？

「教えてあげる。それは、翔太クンが……」

「俺が…どうした？言つてくれ、麻由美」

事故にあつて気起きを喪失しているとか、何があつたというのか？ 麻由美はゆっくりとした口調で俺に言つ。

「それは、翔太クンがただの忘れっぽいおバカさんだつたつてこと

麻由美の発言に俺はイラッとしてその頬を思いつきつぱり張る。

「いひやい～！？」

「ユウちは真剣に話しているんだ。冗談はやめや

「怖いよ、翔太クン。もつと心に余裕を持ちなさい」

俺は麻由美的頬を引っ張りながら深いため息をつく。
結局、俺が忘れてしまっているだけという事らしい。
本当に情けない、マジで凹むぜ。

俺は麻由美から手を離すと彼女は「痛かったよ」と頬を膨らませた。

「俺が忘れっぽいだけなのか。どーしてなのかな。琴乃ちゃんの事、中々思い出せなくて……彼女は別に過去なんて気にしないでいいって言ったんだけどな」

「気にしないでという台詞は気ににして欲しいことこの言葉の裏返しなのではないか。

過去の話をする度に琴乃ちゃんは悲しい顔をする。

みんな顔をさせたくないのに、昔は思い出せない自分が寂しい。

「……俺も情けなくてな。思い出したいと思つてゐる

「ユウちゃんは別に思い出してくれない事を責めてるわけじゃないんだ。ただ、自分が翔太クンの特別じゃなかつた事がショックだつたの。自分は覚えてないのに私が覚えられたことがムカつとしてる

だけ

「やうなのか？」

「そうだよ。こつちゃんにとつては翔太クンが初恋の相手で、長年思い続けてきた相手だもの。当然、自分の事を覚えて欲しかったはず。けれど、それはそれでいいの。覚えてくれていなくても、彼女はここから始めようとしていたんだ」

「……それって最初の頃に言われたっけ」

琴乃ちゃんには俺に言つたんだ。
俺達が出会つたここから始めよつて。

「でも、そつは言つても、やつぱりさびしいんだよね。こつちゃんも、女の子だから彼氏が自分じゃない他の女の子の事を覚えていたら嫌な気持ちになるじゃない。翔太クンだつて逆の立場なら嫌でしょ？」

「当然だな」

俺もしぐじつた、と後悔中だ。
対応さえ間違えなければ結果として彼女も不機嫌にさせずにすんだはず。

「どれだけ言い訳しても琴乃ちゃんを忘れていた翔太クンが一番悪いと言つわけ。反省してこつちゃんに謝りなさい」

「……あのせ、麻由美。俺に協力してくれないか？」

「協力？私が翔太クンに？」

琴乃ちゃんに謝罪して許してもらつてからどうするのか。
俺もいい加減にあの夏の日の事を思い出しておきたい。

「俺が忘れているあの10年前、何があつたのか教えて欲しいんだ」

琴乃ちゃんを苦しめている事の正体も知りたい。
あの夏の日々が俺達の始まりだった。
俺は思い出の中に何を置いてきたのか、忘れてしまった過去を取り戻したい。
過去は過去だが、それを思い出せない限り、琴乃ちゃんを苦しめ続ける気がしたんだ。

【SIDE・井上翔太】

あの10年前に俺は琴乃ちゃんと出会い、何を体験したのだろう？
うつすらとした記憶しかない過去。

その理由を含めて俺は過去を求めていた。
放課後になり、俺は麻由美と共に琴乃ちゃんの家の近所を歩いて
いた。

「翔太くん、先に言つておくけど、私が知つてる記憶が必ずしもこ
っちゃんの過去に関係してるとは限らないからね？」

「分かつていて。それは当然のことだ」

麻由美は琴乃ちゃんと一緒にいる事が多かった。
それゆえに思い出を共有している事も多いはずだと俺は思つたん
だ。

だけど、それが正解だと信じていてるわけじゃない。
俺には思い出すきっかけが欲しい。

俺達が訪れたのは麻由美の実家でもある教会だ。

神父様は出かけているのか、留守で誰もいないと麻由美は言った。

「まずはここだね。おじいちゃんの教会。ここで私と翔太くんが出
会つたの。翔太くんをこっちゃんがここに連れてきた。翔太くんは
教会のステンドグラスが気に入っていたんだ。覚えてる？」

「何となく、な」

中へ入らせてもらひうと、この間も見たステンドグラスが飾られている。

大きなガラスの絵を眺めているとどこか懐かしさも感じるのは事実だ。

「翔太クンは結構気に入つてたの。ここでよく遊んだのもあるけど、こーしてステンドグラスを眺めていた事もよくあつたよ」

「寂しかつたのかもしれないな」

「寂しい。そうかもしないね。お母さんとも離れて、見知らぬ人の家に預けられて、こっちゃん達と仲良くなっていても、子供心に不安はあるだろうし」

麻由美は頷きながら俺の隣の椅子に座りこむ。

同じように俺も座りながらステンドグラスに視線を向ける。彩り豊かなガラスで出来た絵はどこか人の心を落ち着かせる。過去の俺もこの絵を見て、自然にそう言ひ穏やかな気持ちになつていたのだろうか。

「昔の俺つてどういう奴だつた？ 感受性豊かなタイプだつたか？」

「うーん。どうだろ？ 全然、大人しいタイプじゃなかつたよ」

「そらだらうな。俺が大人しいわけがない」

自分で言つて悲しくなるけどな。

いわゆる悪ガキでもなかつたが、多少の無茶はする子供だつたはずだ。

小さい頃はよく悪戯しては母さんに怒鳴られていたからな。

「……そんな俺がこのステンドグラスを気にいるなんて珍しいと思わないか？」

「それは思ったかも。翔太くんって外で遊ぶのが好きなのに、この教会ではすっごく大人しくてびっくりしたもん。ずっとこのステンドグラスを見ていたからよっぽど気にいったんじゃないのかな」

「この椅子によく座つて眺めていたと言つ。

何か神様に祈る事でもあつたのかね？」

「俺が神を信じて祈るような子供だったかどうか、その辺は覚えていないが今の俺は間違いなくそんな真似はしない。

「この教会で他に何かなかつたか？どうにも俺はここで何かした覚えがある。誰かと一緒に……何かをしたんだよ？」

「何かつて言われても、私も分かんないつてば。ここでは同じ年くらいう子が集まつてゲームとかお話を聞いたりとかしたよ？でも、そういうんじゃなくて、ロマンティックなイベントをした記憶があるんでしょ？」

「ロマンティックって何だ。まあ、確かに、何かしたのは確かなはずなんだ。特別に思い入れがあると言つが

大事な思い出がここにはあるような気がする。

「重要な場所つてこと？私の知る限りではそー言う事はなさそう。きっと、私がいなかつた時にこつちやんか、鈴音ちゃんと何かしたんじゃない？」

「そつか。……何をしたんだろつな？」

それがどうしても思い出せずに諦めることにした。

麻由美も分からぬのならば、仕方ない。

教会内を見渡しながら俺は「次の場所へ行こうか」と麻由美に告げた。

これ以上、ここにても情報は得られなさそうだ。

「次はどうがいいかな」

「俺が知らない場所もあるのか？」

「ユウちゃんと一緒にいたのは展望台公園だけでしょ？あの場所以外にも翔太くんと過ごした思い出がある場所はあるの」

彼女は次の場所へ移動するように言った。

それは住宅地を抜けてこの高台の最上とも言える広場だった。山が広がる手前の広場は空き地になっていた。

「…………？」

「よく皆でバトミントンとかした場所だよ。公園だと木に引っかかるから、ボール遊びとかはここでしたの。覚えてない？」

「覚えている。確か、他の近所の子たちとサッカーとかしたかも」

「あつたよ、そーいうこと。でも、男の子の割合つっここの近所じゃ少なくて、男の子3人に女の子6人つて言つハント戦で勝ちまくつてたつけ」

「なるほど、負けた記憶しかないわけだ。よく罰ゲームとかをせりれたな」

「あつたねえ。で、罰ゲームで思い出したけど、今日のお皿の罰ゲームは覚えている?」

麻由美の陰謀にはめられた例の件か。
俺は軽く首をかしげながら、

「はて、何のことや?」

「……薄情者な若年性健忘症の翔太クンはいつか痛い目にあいそう」

「それを言つた。はあ、罰ゲームつて結局何をすればいいんだ?」

「ふふつ。喉が渴いたからジュースでもおじつてもらおうかな」

麻由美は近くの自販機を指差す。

それくらいならかまわない。

こうしてわざわざ案内をさせているのもこれでキャラだ。
自販機前で悩む麻由美は俺のおじりだと喜びながら選ぶ。

「何にしようかな。炭酸はキツイからオレンジジュースにしよう」

「了解。俺はコーラにでもしておけ」

ふたりで空き地を歩きながらジュークを飲む。

冷えたジュークで喉の潤いを満たした所で次なる場所へ。時間はまだ夕焼けに差し掛かる前でしばらくはありそうだ。

「 じゅちゃんの家から近い場所に幽霊屋敷って呼ばれる場所があるの」

「 …… 幽霊屋敷？」

「 うん。今でも現存しているよ。古い洋風のお屋敷でね、見た目がすげいのよ。見ればきっと分かると思う。何回か翔太クンも行ったから覚えているんじゃないかな」

琴乃ちゃんの家の前を過ぎ去りしばらく進むと住宅地でも洋館が並ぶエリアに入る。

その端の方に一軒だけ古びた洋館があった。
錆ついた扉は朽ちて、中に入る事もできそうだ（不法侵入は犯罪です）。

「 つひの教会と似た感じだけど、じゅままでひどくなつよ」

「 確かにこれは幽霊屋敷って言われるな」

「 …… 中はもっと怖いけどねえ。よく肝試しどとか、探検とかで来たなあ。覚えてる?」

「 全然、覚えてない。どういう経緯でこのボロ家は建つてんだ？
普通なら取り壊されたりしているだろ」

「 これだけボロいと言つ事は誰も住んでいないんだろう。」

「20年くらい前に一家離散したって聞いている。夜逃げ同然になくなっちゃったんだって。今は誰が所有者から知らないけど、ずっとこのままだよ」

たずがに中にに入るわけにはいかないが、俺達は外からその洋館を眺めつづける。

「ここのボロ屋敷の内装は？」

「見たまんまで古い建物。怖いから近づきたくないな。そうだ、思い出したつ」

声をあげて彼女は俺の顔を見る。

「何を思い出したんだ？」

「そうだよ、ここで鈴音と翔太クンが行方不明になつて大騒ぎになつたんだ。一緒に中で探検していたら、いつの間にかふたりがいなくなつて……こっちちゃんのおばさんに後ですごく怒られたの。アレ以来、入つていないよ」

「俺と鈴音が？」

鈴音ひいて言ひのまあの「お兄ちゃん」つて呼んでくれていた子だる。

この場所で、俺が仲良くしていいたと言ひの子と行方不明になつたらしい。

「結局、地下の倉庫で見つかったんだ。鈴音が足を怪我して、それ

を翔太クンが助けようとして倉庫に閉じ込められちゃったみたい。古い屋敷だから鍵も緩んでいたんだろうね。大人が何人も来てふたりを探してようやく見つかったんだ

麻由美は「私も怒られて嫌な思いをしたんだ」と記憶のない俺を責める。

「それはすまなかつた。それで、俺達は無事だつたのか？」

「鈴音は怪我してたけど、翔太クンは無傷だつたよ。ただ、疲れきつていてそれから何日か寝込んでたみたい。こつちゃんも心配していたんだから」

俺が行方不明になつていたと言う洋館。

何となくだが、暗闇の倉庫の記憶が蘇る。

……何だかそう言う事があつたかもしれない。

「実は俺つて暗いところがダメなんだよ。不安になるつていうか。今でもそうなんだけどさ。電気消して寝れないんだ」

「そうなの？うわっ、それってあれじゃない？トラウマ。ここでの経験が翔太クンの心に傷を負わせてたのかも。怖い思いをして、暗い場所が嫌いになつたんだ？」

「という事なんだろうな。ずっと理由不明で、あの10年前の辺りからだつたからほほ間違いないと思う。どうか、俺はここで閉じ込められたせいで暗所恐怖症になつたのか。今になつて思うと情けないな」

治そうと思つても今でも治せない。

暗い場所で寝る事がどうしてもできないのだ。

普通に夜の街を出歩く程度は問題ないんだが、寝るとなるとどうしてもダメになる。

母さんも理由が分からず、俺の困った癖のひとつになっていたのだが、今になつてようやく理由が理解できた気がする。

過去は自分の人生の積み重ねてきた記憶だ。

当たり前なんだがその重みって奴を実感させられる。

そりや、琴乃ちゃんだって怒るよな。

俺が彼女の過去を否定する言葉の一つ一つが傷つけてしまつナイフのようなものだ。

「少しずつでいいから思い出さないといけない

俺はその事を強く感じながら、幽霊屋敷の洋館を後にした。

第21章・過去を求めてへ後編》

【SIDE・井上翔太】

「なあ、聞いてもいいか？俺がすっかり忘れている10年前の事をどうして、麻由美や琴乃ちゃんは詳細に覚えているんだ？」

最後の場所である展望台公園に向かつ途中、俺は気になつて麻由美に尋ねる。

麻由美は「え？」と何を今さらといった風に俺を見下した田で見た。

「私やこひちやんは、どこかのお兄さんみたいに薄情者でも、若年性健忘症でもないからだよ。私達はまだ若いからねえ」

「おー、俺は年寄りの爺さんか」

「それよりひどいかも。おじいちゃんは同じ事を何度も言ひけど、どこかのお兄さんはそれすらできないから」

「……言ひ返すこともできません」

ぐうの音も出ないとはこのことか。

忘れてしまった俺が全て悪い。
何で忘れたんだろうな、俺……。

人生で可愛い女の子と縁があつたのは琴乃ちゃん達だけだったの

」。

小学生の頃は何でも興味持つからさ。
少年サッカー部に入つたりしていたし、琴乃ちゃん達の事を忘れ

てしまつたんだろう。

「まあ、理由があるとすると……あの頃の私達に親しい男の子は翔太クンだけだつた。琴乃ちゃんなんてきっと初めて話した男の子かもしれないよ？幼稚園の時も全然男の子と話そうともしなかつたの」

「……男嫌いってやつか？」

「うーん。嫌いというか、男の子と話す機会がなかつたというか。こつちゃんつて昔はすっごく人見知りだつたからね。男の子は怖いつて勝手な印象を抱いていたのかも。それも誤解だつて理解したのは翔太クンのおかげかな」

まだ、俺にとつてのイメージと琴乃ちゃんの過去のずれ。

俺の記憶にいる琴乃ちゃんは元氣で明るい女の子。

（）まで来ると当然、俺の方の印象がおかしいと疑い始めていた。

「……琴乃ちゃんつて、大人しい子だつたのか？」

「基本的には大人しいかも。今もそうだよ、翔太クンの前じや積極的な素振りを見せているけど、それは演技。かなり無理して翔太クンに合わせてる」

「どうして……？」

俺は別に無理して明るく振る舞つて欲しいとは望んでいない。
違和感が消え去らない理由。

それは、もしかしたら、本当の彼女と接していないからなのではないか。

「どうしてって、こつちゃんが翔太くんを好きだからに決まってる。10年ぶりの再会、高校の入学式の時にこつちゃんが翔太くんを見つけたのよ。でもさ、何で直接会うのにこれだけ時間が空いたかその理由分かる?」

「2週間ぐらいになつて偶然にも再会した。その2週間の事か」

「偶然がなければきっと本当の再会はもつと後だつたと思う。こつちゃんは自分に自信が持てるようになるまで頑張っていたのよ。お化粧とか全然しなかつたのに、急にメイクの練習とかはじめた。性格もそう。好かれたい一心で今の彼女は無理を続けている。その結果、恋人同士になれたけどね」

琴乃ちゃんは俺のために無理をしているのか。

それは間違いだ、俺は素の彼女でもきっと好きになつていた。

「自信を望む理由が分からぬ?」

「ああ。そこまではなくとも、俺は別に気にしないぞ」

「それを彼女に気にさせているのが、翔太くんの“過去”なんだけどなあ」

意味深に呟いた彼女は苦笑いを浮かべていた。

麻由美が最後に連れて來たのは何度も來ている展望台公園だ。夕闇の森林の中を抜けて、展望台へと出る。

「……ここが私達の思い出の場所がある場所。よく遊んでいたし、何度も連れてきたはず。翔太クンが一番、仲がよかつたのは鈴音だつて言つたでしょ。本当に仲が良くて、幼い頃のこっちゃんは嫉妬して、拗ねていたと思つんだ」

それが嫉妬と言つ感情だと理解できなくとも。
子供同士でおもちゃの取り合ひをするように、子供にも譲れない想いといつものはある。

「いつも仲良く遊んでいた鈴音。それが羨ましかつたんだよ。だから、こっちゃんなりにどうすれば翔太クンと仲良くなれるか考えていたはず。再会しても今のままじや振り向いてもらえないつて思つたんだ」

「……俺を再び見つけて、付き合つたために無理をした。過去の事があつたからか」

「端的にいえば、だけどね。翔太クン、女の子の本心に気づいてあげなきゃダメだよ」

琴乃ちゃんが俺を好きでいてくれたその気持ちは嬉しい。だが、やはり俺には腑に落ちない記憶のずれがあるのだ。

『翔ちゃん、遊ぼうよ。今日は何しようか?』

俺を連れまわして遊んでいた琴乃ちゃん。

鈴音と言つ少女は俺の記憶の微かな記憶でしかない。

『……翔お兄ちゃん。ついてきて、こっちはだよ』

俺をお兄ちゃんと呼び慕つてくれていた鈴音は一体、どんな子だったのか。

「俺の記憶の中の琴乃ちゃんは常に明るくて、楽しい子だった。本当に大人しい印象なんてひとつもなくてさ。逆に言つと、鈴音の方は物静かだったかもしれない」

「鈴音が？うーん。こっちゃんは人見知りだからギャップがあるかもしれないけど、鈴音は昔から大人しくはなかつたけど？」

「……あー、もう。わけが分からん。何が真実なんだ」

「それほど悩むなら覚悟決めて、こっちゃんとお話すればいいのに。翔太クンが悩んでる理由、私の方がワケわかんない」

その勇気がないのだ。

琴乃ちゃんを傷つける事になつてしまつ展開が本当に怖い。どうしても、聞けないのは失つ事を恐れているからかもしれない。

「もう一度だけ確認する。俺と鈴音が仲が良かつたんだな？」

「何度も言わてもそつなんだけど？そんなに気になるなら本人に会えばいいじゃない」

「会えるのか……？」

「多分。会いたければすぐに会えるかも。だつて、GWくらいには帰省するはずだもの」

鈴音は全寮制の学校に通っていると聞いた。

GWならばこちらに戻つてくるかもしない。

「麻由美、頼みがある。もし、鈴音が戻つたら俺に連絡をしてくれないか？直接会つて話がしてみたいんだ」

「いいけど？でも、私に頼まなくともこっちさんに頼めば？」

「……それはちょっとな」

鈴音絡みはビビりも彼女に尋ねにいく。

負い目があるわけじゃないが、触れてはいけない話題に思えた。

麻由美は腕を組みながら考え方をする。

俺の態度が気になつたようだ。

「あのさ、翔太クン？私も確認していい？」

「確認……？何だよ、俺にか？」

「もしかしたら、翔太クンが覚えていないっていう理由が分かったかもしね。おじいちゃんが言つていた意味もね」

「神父様が、俺に何を言つていたんだ？」

「そういえば、琴乃ちゃんの事を尋ねた時に何かはぐらかされてしまつたっけ。

俺は勢いで麻由美的肩を掴んでいた。

「教えてくれ。麻由美、お前しか頼れないんだよ」

「そんなんに焦らなくてもいいじゃん。びっくりするなあ。あのね、翔太クンには自分で思い出すべき事があるつておじいちゃんはそう言っていた。私も気になっていたんだ。翔太クンって、もしかして

「

麻由美が何かを告げようとした時、森の中を風が吹き抜けていく。夕焼けの日差しが俺達以外の影を作っていた事に気づく。

「 な、何をしているんですか、ふたりとも？」

呆然とした表情で立ちすくむのは琴乃ちゃんだった。

俺は気づく、俺は麻由美と距離を詰めて意味深な会話をする姿が誤解を生んでいる、と。

逆の立場なら確実に誤解する。

俺と麻由美が親密そうに会話する光景は裏切りの光景以外の何物でもなかつた。

顔面蒼白と言つた彼女に俺は後悔で血の気が引いてた 。

第22章・崩れる信頼

【SHIDE・井上翔太】

「な、何をしているんですか？ふたりとも」

麻由美に身体を触れさせた状態の俺を、琴乃ちやんは見て驚きの声を上げた。

間違なく誤解されている。

俺が逆の立場ならきっと変な誤解をしているだらうから。
そうではなくとも、自分以外の相手と親しくする光景など不愉快以外の何ものでもない。

「じつちやん？え？何でここに？」

「……マコ、ひどいよ。私の先輩に変なことしないで」「ち、違つてばー？私、何もしてないし」

慌てて麻由美が身体を離して誤解を解こうとする。
けれど、悲しみの表情を浮かべる琴乃ちやんには通じない。
ふたりが険悪になる必要なんてないのに。

「先輩もひどいですっ。私、確かに今日は喧嘩していましたけど…」

「違う、違うんだ。琴乃ちやん」

「何が違うって言つんですか？私の知らない所でこんな風に、誰も

「……いないとこりで抱きついたりして、そんなの……嘘だつて、ビリして言えるんですか」

怒らせた事に対する後悔と罪悪感。

俺の軽率な行動が彼女を傷つけている。

それを痛いほどに感じたから俺は謝る事しかできない。

「誤解なんだ、琴乃ちゃん。俺達の話を聞いてくれ」

「聞きたくないです。私、先輩の事を信じていたのに…」「だから、それが誤解なんだつてばー。」

琴乃ちゃんに話だけでも聞いてもらおうと俺は何とかしがみつくる。

重苦しい雰囲気に俺達はそれぞれ追い詰められていた。

こんなはずじゃなかつた。

俺が過去を知りたいと思つたのは琴乃ちゃんを傷つけないようこと思った事なのに。

「……琴乃ちゃん、話を聞いてくれ」

「嫌ですっ。聞きたくありません。私は、先輩が好きなのに、こんなのつて……」

彼女は俺達に拒絶の意思を見せせる。

その反応に俺たちは互いに顔を見合わせて小声で言つ。

「……もしかして、いつちゃん。私と翔太くんが出来てると勘違いしていない?」

「そうだろうな。しかも、彼女の中ではきっと裏切ったのはお前の方だぞ。琴乃ちゃんの旦がそう言つてゐる」

「嘘～つ。私が寝取つた側！？」琴乃ちゃんの彼氏を奪う真似するはずないじゃんつ

そもそも、俺と麻由美は再会してからまだ数日しか経っていない。動搖している彼女に俺が出来る事と言えば必死に説得するだけだ。

「俺の話を聞いてくれ……つて、琴乃ちゃん！？」

俺達の前から逃げよつとする彼女。
俺は逃がしてはいけないと追いかけよつとする。

「待つてくれ、琴乃ちゃんつ！？」

「待ちません。先輩が、先輩がそんな人だつたなんて……マユも、先輩も嫌いです」

「違うつて！？それも違うけど、前に木がつ……危ない！」

「…………え？きやつ！？」

俺の声に気づいた彼女は慌てて止まろうとするけど間に合わず。
思いつきり大木と正面衝突して彼女は地面に転げた。
木にぶつかつたと言つよりは木の根っこに引っかかつたよつだ。

「！」琴乃ちゃん、大丈夫か！？

「うへ、ひっく……」

涙目で腕を押さえる彼女。

「ドジっ子だ、と普段なら笑い話にしたいがこの場合はそうはいかない。」

幸いにも怪我はないが、何とも運と聞が悪い。

「痛いです……うつ……」

「ほ、ホントにじめん」

俺は転んで立ち上がれない彼女に近づく。

何とか話を出来る状況に俺は強引に持ち込んだ。

「琴乃ちゃん。俺は本当に麻由美に何もしていない。キミに内緒でふたりで会っていたのは事実だ。けれど、それは意味があるんだよ」「

「何があるって言つんですか？先輩、私、拗ねていました。先輩が私の事を“まだ”思い出してくれてないのにマコの事は覚えていた事を寂しいって思いました。でも、だからと言つて先輩が嫌いになつたわけじゃないんです」

「……え？」

今、彼女はまだ思い出していないと言つたか？

どうしたことだ？

確かに俺は思い出せていない、けれど、小さい事だけど彼女の事は覚えているはずなのに。

「……それすらも違うと言つのか？」

彼女は俺が触れようとすると身を引いて逃げようとする。

「だからって、こんなに早くマコに気持ちを変えてしまったなんて。
ひどいです」

「変えてないって。俺は今でも琴乃ちゃんの事が好きだし」

「……だったら、何でこんな真似をしているのか説明してください
つー」

「そりゃ、そうだよな。

俺がしている事を責められるのは仕方ない。
彼女に隠れて過去を探ろうとした。

それ自体は悪い事ではないが、いつもいつ真似は避けるべきだった。
最初から彼女に言つべきだったのだ。

俺は琴乃ちゃんの悲しい想いをさせたくないで、いいや、これは
言い訳だ。

過去を覚えていない俺の罪悪感が自然と彼女からの追求を避けて
しまつただけなんだ。

「分かった。説明するよ」

俺は彼女に向き合つて全てを話すことになった。

「……つえーん、その前に気まずい修羅場の場面に私がいる理由を
教えてよ」

俺達の横で琴乃ちゃんに睨まれて困り果てる麻由美。
すまん、麻由美には余計な迷惑をかけているがもつじざりく付き
合ってくれ。

「琴乃ちゃん。俺はさ、ただ過去を知りたかっただけなんだ。琴乃ちゃんとの思い出を、ちゃんとした形で思い出したかったんだ。俺、本当に琴乃ちゃんが好きだよ。初めて出会ってから2週間、いろんなキミを見てきて、好きだつて思つてる」

俺の場合は好きになつたのが過去じゃない。

過去の記憶じゃなくて今のこの子を好きになつた。

「だけど、琴乃ちゃんは昔から俺を好いてくれているだろ。何ていふか、焦っていた。琴乃ちゃんの想いに俺がついていけない気がして。過去を思い出せたら、思い出話も出来てもつと近づけると思つたんだ」

「……翔太先輩？」

俺は彼女にゆっくりと近づいてその手を取り、身体を起こしてやる。

今度は逃げる事もなく俺の手を握る彼女。

「俺、琴乃ちゃんが悲しい顔をするのが嫌だからずるをしていた。麻由美に会つて、彼女経由で過去を思い出せば、琴乃ちゃんは傷付かないって。ダメなんだよ、そんなことをしちゃいけなかつた。俺が琴乃ちゃんに向き合わないとダメなのに」

「先輩……。私の事をそつと風に考えて貰っていたんですか？」

「恋人になる時、ここから始めようつて最初に言つただろ。キミには悪い事をしていると罪悪感がある。過去を思い出せない、その事にとらわれちゃ本末転倒。意味ないのにな。そんな事にも気付けなかつた」

俺が今、大事にしなければいけないのは過去の思い出ではない。
それも大事だけど、もっと大事なのは琴乃ちゃんだ。

彼女を傷つけるような事をしてまで思い出す必要はないのだから。

「ごめん、本当にごめんな。俺はただ、琴乃ちゃんに想いを追いつかせたかっただけだ」

「先輩が私を想つてくれていて嬉しいです。私、マコが羨ましかつただけで、拗ねたりして、先輩を困らせて……」

俺は彼女を優しく抱きしめる。

朱色の空、照らす夕焼けに俺達は染まりながら抱擁しあう。

「約束するよ。俺は琴乃ちゃんを裏切らない。だから、琴乃ちゃんも俺を信じて欲しい。俺って、情けないけどさ。いつか、絶対に思い出してみせるから。もう少しだけ時間をくれないか？」

「私も、先輩を信じていいんですね？私はいつも自分に自信がなくて、先輩が他の相手に振り向いてしまうんじゃないかな。そう思つたら、悲しくて……」

その心配、しなくていいよ。

残念ながら俺はそこまでモテる人間でもない。

俺達はそれぞれ、不安になってしまったのだ。

新しい変化が俺達を変えてしまうのではないかって。

俺達は顔を見合わせて距離を詰めあう。

「先輩……好きです。大好きです。お願ひだから、私を好きでいてください。他の女の子に振り向かないでください。そういうのは私

も嫉妬しちゃいます。私、先輩にもっと好きになつてもいいやるよつに頑張りますから」

「そんな事をしなくても、十分、俺にとっては魅力的なんだよ」

俺の言葉に微笑みを浮かべる彼女。

この子の笑顔を守りたい。

俺はそう感じさせられながら、その脣を重ね合わせる。

「んうっ……」

キスを続けながら俺の脳裏によぎるある一つの光景。

『初めてのキスをファーストキスって言つんだって』

『ふあーすと起きる? そつ言つんだ?』

『うん。だからね、これが俺達のファーストキスだよ

子供同士のキス、これまでの思い出の中でも鮮明に思い出せた。

「…………琴乃ちゃん。俺、少しだけ思い出せたかも知れない」

「何をですか……?」

「俺達が初めてキスをした場所。それって、あの教会じゃないか?」

俺の一言に彼女は驚いて涙を浮かべた瞳を見せる。

だけど、気になるのは……あの時の相手は本当に琴乃ちゃんだったのか……?

「……はい。そうです。やつと、思い出してくれましたね。些細な事でも、“本当の私”を思い出してくれてよかったです。翔太先輩」

本当の琴乃ちゃん。

その台詞の本当の意味を知るのはこれからもっと後の事だ。だが、今の俺達は幸せな気持ちでいっぱいだった。もう一度、キスをして互いの想いを確認し合つ。

「……おーい、おふたりさん。ラブシーンはいいけど、私がいるの忘れてませんか?……って、聞いてないし。修羅場に巻き込まれ、生キスシーンを見せられる私って不幸すぎ。早く帰りたいよお~っ、しくしく」

そう言つて嘆く麻由美、後で思いつきり彼女に怒られたのはまた別の話。

ふたりの関係をこれからもっと深めあう事ができる。
そう思つていたんだけど、現実はそう甘くはなかつたんだ。

第23章・幸福の実現（前書き）

今回は琴乃視点です。

【SIDE・藤原琴乃】

大好きな先輩を失うこと。

私にとつてはもう、それだけは一番失いたくない存在になつてい
た。

私の大事な恋人。

先輩との初めての喧嘩。

きつかけは私の嫉妬から始まつた。

先輩は今でも私の事をちゃんと思い出してくれていない。
それなのに、マユの事は一度で思い出した。

それが悔しくて、悲しくて……。

挙句の果てに、ふたりが私の知らない所で会つているとなれば勘
違いもする。

マユには好きな人が別にいるから、ありえないって言うのは後か
ら冷静になつて思い出すんだけど、その時はすぐびっくりして自
分でも思わず怒りが出てしまつた。

「……ふーん。なるほどねえ。それがこつちゃんが私を敵対視して、
睨んで責めまくった上に、最後は仲直りのキスシーンを見せつけた
理由なんだ?」

「う、ごめんつてば。私が悪かったの。マユ、許してよ」

学校の昼休憩になつて、私はマユに謝罪した。

親友を疑う事も、その、キスしているところを見せつけてしまつ
たのも反省している。

私にはつい思い込んだら突つ走つてしまつ悪い癖がある。

今日は先輩は友人と食事を取るらしい、久々にマコとふたりっきりだ。

お弁当をつつきながら私達は雑談をかわしていた。

「別にもういいけどね。私がこつちゃんの彼氏を寝取る趣味はないって事だけ理解しておいて。むしろ、私はふたりの仲を良くするために動いていたのに。裏目に出了のも、何て言つか不運だわ」

「あはは……」めんなさい。やつと言えば、昨日はどんな場所を回っていたの?」

「うーん。高台の墓地とか、幽霊屋敷とか」

「うぐう。幽霊屋敷にも行つたんだ? 私、あそこは嫌な思い出しかないな」

あの古びた屋敷はとても怖くて近づきにくく。今でもそうだ、あの前を通るのはすくへ苦手なの。

「あの場所で前に鈴音と翔太クンが迷子になつた事があつたじゃない?」

「うん。結局、地下室で見つかつたんだ」

「ワインセラーって書いつのかな。ワインの保管庫だった場所に1日暗い閉じ込められてすぐ怖かつただろうつな。でも、翔太クンはそんな事も覚えてないんだって」

「……怖い記憶ほど封印したくなるからじゃない?」

嫌な思い出ほど、思い出したくないのは普通の事だ。
私はお茶を飲みながらマコの視線に気づく。

「……な、何？私を見て？」

「あのセ、昨日、翔太クンと一緒に見て回つて、私はある事に気づいたのよ。」

「へえ、何に気づいたの？先輩の秘密とかだったら教えて欲しいな」

私がそう言うと彼女は真面目な顔をして言う。

「……こっちゃん、翔太クンに嘘をついているよね？」

「え？あ、えっと……」

思わず追求に私は言い淀んだ。

私が彼にある秘密を隠しているのは事実だ。

それをマコに気づかれるなんて。

よく考えれば先輩と話ををしていれば、その違和感に気づくのも自然なことかもしれない。

「……やっぱり、うなの？こっちゃん、それでいいの？」

「だつて、仕方ないじゃない。今さら言ひだせないし」

「翔太クン、過去を思い出せなくて当然だと思つ。だつて……「うぐ
つ！」」

私は彼女の口を手で押さえていた。

他人の口からでも聞きたくない事実だつた。
私にとつて、その嘘は本当にバレるのが怖い。

「うぐ~。な、何するのよ」

「じめん、つい」

「ついつて何? もうつ、そんなので本当の恋人として大丈夫なの?
過去は気になつてふたりとも言つさび、一番氣にしているのは
いつちゃんじゃない」

「そうかもね。でも、私はそれでいいの。どうせ、私は……」

昔の私では先輩の心を捕らえる事は出来ないから。
今、新しい関係として作り上げた信頼。
それだけで十分、本当の事を言えば過去は過去としてしまつてしまいたい。
だが、そのことにはダメはダメにも納得がいかないようだ。

「いいわけないじゃない? いつか嘘がバレたらどうするの? それに
鈴音だけ、もう少しひで帰つてくるんだしね」

「……」

間近に迫るGW、それが私にとっては憂鬱の種だ。

「……本当にいいの? 嘘をつき続けたままで? それって、一番つらいのはいつちゃんでしょう? 分からない。そんなの、意味がないじゃない? 好きなんでしょう、それでいいの?」

「意味がない、か。そうだね、私もそう思つ。逃げてはいるだけなんだ。だって、怖いんだもん。今までの事が全部、壊れてしまいそうで……そう思つたら、どうしても、何もできなくて……」

思い出まで、失いたくない。

私は今までいい。

不变、それを望んではいけないの？

「……逃げだと思つけどな。ホントに、翔太クンが好きならきっと正面から向き合つても大丈夫だと思つよ？」

「怖い……怖いの、私」

嘘がバレた時、私達の関係が終わってしまう気がする。

先輩は私を責めるんじゃないかな。

私の事を嫌いになつてしまふんじゃないかな。

そう考えてしまつと何も考えたくない。

マコは深いため息をついて言つんだ。

「ユウちゃん、逃げるな。ちゃんと言えぱいにじょん

「それが出来たら苦労しない」

「どうせ、初めは翔太クンが悪いんだろうナビ。否定しなかつた、ひつひやんも悪いんだよ？本当にそれでいいわけ？」

マコの叱咤に私はショックとしながら、

「それでも、私は嘘をついてでも、少しでも先輩に私の事を覚えていて欲しかったんだ」

彼の記憶にわずかでも残っていたかった。
だから、私は嘘をついたの。

「……思い出の少女、そんな子がどこにもいなって知られたら、
翔太くんどう思うんだろうね？鈴音も帰つて来たら、嘘は突き通せ
ないよ？今のうちにごめんなさいって言つて、眞実を告げた方がい
いんじゃないの？」

「私、思うんだ。翔太先輩を信じたって……」

「それって眞実を知つても、こっちゃんに振り向いてくれるって言
う事？」

私は静かに頷く、終わりの時間は迫りつつあるかも知れない。
それでも、わずかな可能性に賭けてみたいの。

「こっちゃんがギャンブラーなのは分かつた。逃げてるなりに頑張
つて考えてはいるんだ？それが正しいかどうか、私には分からない
けど、こっちゃんがそう決めているのなら私からは彼には何も言わ
ないようにする」

「ありがとう、マユ」

私はお礼を言つと「私よつこっちゃんが心配だよ」と彼女は言つ
てくれる。

親友つていいな、と思いながら私は空を眺めていた。
屋上から見える晴れ渡る青空が綺麗だ。

「嘘つきには天罰がくだるんだろうね」

だけど、視界の先には雨雲が見え隠れしている。
もうすぐ雨が降るかもしね。

「 めぐね、翔 ちゃん……」

弦いた言葉は風に乗って4円の春の空へと消えた

。

第23章・幸福の実現（後書き）

次回からは新展開になります。

第24章・嘘つきの恋《前編》

【SIDE・井上翔太】

……それはどれほどの昔の記憶だらうか。

暑い夏、蝉の鳴き声の響く森の中に俺はいた。

カブトムシ。

いきなり俺の田の前に突き付けられたのは黒光りする角を持つ昆虫。

「……カブトムシ？」

「やつだよ。カブトムシ。そここの木で見つけたの」

角の部分を持ちながら田の前の少女はやつと俺にカブトムシを手渡す。

「翔ちゃん、男の子だから好きでしょ？あげる」

「…………ありがとう。でも、俺はあんまり虫は好きじゃない」

「やうなの？」

俺にカブトムシを手渡してくれたのは“琴乃ちゃん”だ。

彼女は数日前に俺が預けられた家の娘。

すぐに仲良くなつたのは良いけれど、女の子にしては元気すぎる子だった。

普通なら虫を嫌悪するものなのに、全然苦手ではない様子。

「男の子は皆、好きだと思っていた。パパと虫とつに行つたりしないの？」

俺は足を動かしてモタつくカブトムシを眺める。

「……俺、お父さんいないし。お父さんって、会つた事もないんだ。お母さんと一人でもうつと暮らしている。琴乃ちゃんはお父さんとよく出かけるの？」

「私のパパ、アウトドアが好きなの。だから、私もよくいろんな場所に連れて行つてもうつんだ。キャンプしたり、テント張つて星空を見たりするの」

「アウトドア？ キャンプ？ テント？」

小学2年の俺にとってはまだ聞きなれぬ単語ばかり。

彼女は俺に説明しようと頭をひねる。

「えつとねえ、外で遊ぶ事をアウトドアって言つんだって

「やうなんだ？ 全然知らないや」

俺にとつてはそれらは縁のない言葉だった。

休日に家族どどこかに遊びに行つた。

遊園地、山、海など、友達はよく家族で出かけたりするらしい。

でも、俺はお母さんとはあまり出かけた事がない。

いつもお仕事で忙しいから、面つても無理だつて分かつていたか

ひ。

片親だけの生活に慣れてはいても、寂しさくらいはある。

俺もどこかに行つてみたい、知らない場所で楽しい思い出を作つ

てみたい。

「それなら、今度、パパに頼んでどこかに連れて行ってもらおう。夏休みはずつと私の家にいるんでしょう？ そうしよう？」

明るい笑顔で言う彼女。

だが、俺はどこか寂しさを感じていた。

俺にはお父さんはいない。

お父さんっていうのが家族でどういつ立場なのは大体知っている。

……俺にもお父さんがいれば、お母さんと離れなくともよかつたのかな？

「翔ちゃん？ ビーツしたの？」

「え？ あっ、その……カブトムシ、可哀想だから逃がしてもいい？」

「可哀想？ 翔ちゃんって優しいんだね。いいよ、逃がしてあげて。どうせ、家では飼えないもの。“鈴音”が怖がるから」

彼女が名前を呼んだ鈴音と言う女の子。

琴乃ちゃんの“妹”、俺はまだあまり話をした事がない。大人しい子で俺が話しかけてもすぐに逃げられてしまう。

「鈴音はカブトムシが嫌いなんだ？」

「虫とか大嫌いだよ。足がうにょつとしてるのが嫌みたい」

俺はその手に持ったカブトムシを逃がそうと木に近づける。

その時だった、俺達の背後で小さな女の子の声がする。

「あ、あの、お姉ちゃん。しょ、翔お兄ちゃん。ママがお昼ご飯だから帰ってきてって」

控えめな声で俺達を呼ぶ少女。

「そつ？ 分かった、すぐに帰る。ほら、行こう、翔ちゃん」

琴乃ちゃんが俺の手を引いて歩きだす。

俺は片手に掴んでいたカブトムシをつい手放してしまった。

「あつ！？」

元々逃がすつもりだった、逃げる事は全然かまわない。だが、そのカブトムシが羽ばたいた先にいたのは……。

「きやつ！？」

鈴音めがけて飛んだカブトムシ、彼女の服に引っ付いてしまったのだ。

虫嫌いの彼女は驚いて慌てふためく。

「い、嫌！？ は、離れてよ～つ！？」

その様子を琴乃ちゃんは「虫ぐらいで騒がないで」と妹に呆れる。虫が大丈夫な彼女は平気なのだろう。だが、俺もそうだが、苦手な人間には本当に嫌なものなんだ。

「た、助けて、うえーん」

泣き出してしまつ鈴音を俺は見てられずにつぐにカブトムシを引き離す。

「翔お兄ちゃん……？」

「もう大丈夫だから。変な場所に逃がしてごめんな

俺は今度こそ、カブトムシを空へと放つた。
涙に濡れた瞳で俺の顔を見つめてくる彼女。

「ありがと、お兄ちゃん

鈴音は俺にそう言ひ、涙をぬぐつた。

それまで俺を避けていた彼女。

初めて、彼女が俺の顔を見て話をしてくれた。
可愛らしい顔つきをしている女の子だと思った。

「……翔お兄ちゃん」

もう一度、俺をそう呼んだ彼女は俺に手を差し出してくる。
鈴音の小さな手を握り返すと微笑を浮かべる。

「あつ、ずるーー。鈴音、翔ちゃんとは私も仲良くなたいのに

琴乃ちゃんの声に俺達は笑い合つ。

夏の日差し、少しだけ俺達の距離が縮まつた瞬間だつた。

……。

夏はまだ遠い、4月下旬のある日。

俺は母さんからの電話で目が覚めた。

最近、新しく働き始めた隣街の私立病院。昨日も泊りの仕事で留守にしていたのだが。

「……はい？」

『だから、机の上にある資料を持つてきてって言つてるの。今すぐ持ってきて』

『今すぐこって今、何時だと思つてるんだよ』

時計はまだ6時半、俺はまだ寝ていたい気持ちだ。

『朝から会議があるの。その資料を忘れちゃったからすぐに欲しいの。これでも朝になるのを待つてあげたのよ。夜中の3時に連絡したわけじゃないんでしょ』

そりゃ、うううううが、俺ことひろひらも同じだ。

『分かつた。すぐに持つていぐ。ビロに行けばいい?』

『私の勤める病院は分かるでしょ? せこの内科のナースステーションに来て』

『はいはい。すぐに行くよ』

『私がいなかつたら誰か他の人に渡しておいてね。それじゃ、任せるわ。30分以内に来て。なるべく急いで、いい?』

おい、30分つてここから自転車でも時間はかかる。
だが、相手はそのような事など気にせず、電話を切りやがった。

「仕方ない。さつとと行つてくるか」

俺はベッドから起き上がり、さつと着替えて出かける準備をする。

資料も見つけて、俺は母の命令通りに急いで病院へと向かつた。

自転車をこぎ続けて20分、目的の私立病院が見える。
場所は知っていたが、実際に来るのは初めてだ。
立派な建物、病院自体もかなり広い。

「ここか。ナースステーションつてどーだ?」

俺は中に入るとまだ時間も早いためか、人の気配がない。

「あれ~つ?お姉さん、ここだつて言つたんだけどな?」

受付もまだ時間外だったので誰もおらず、通りがかつた看護師に
道を尋ねたのだが……。

『外科、ナースステーション』

「……外科じゃん!~?」

母さんが言つた内科とは違つ。

単純ミスだが、時間的には厳しくなつてきた。

母さんは時間に厳しいお人だ、ここは早く届けなければいけない。だが、普通ならどこかにありそうな地図も見当たらず、俺は困り果てていた。

「おや、キミ、こんな時間にどうしたんだ……？」

医師だろうか、白衣を着た男性が俺に気づいて声をかけてくる。よかつた、誰でもいいから人がいてくれて助かる。

「……すみません、内科のナースステーションはどうですか？」

「内科？ああ、それならここから先に行つたところだよ。私もこれから向かう所だ。何か用事でもあるのかい？」

「母がナースなんですが、忘れた資料を届けに」

「……そつか。それなら、案内しよう。こちらだ」

「……この先生に渡してもいいような気がしたが、この手の資料は出来る限りは手渡しておいた方がいいだろう。

「そう言えば、キミのお母さんの名前は？」

「葉月です、井上葉月。看護師長をしていろと聞いてますが、……？」

「……葉月の息子？まさか、キミは？」

彼は俺の顔をマジマジと見つめてくる。

口髭をはやした40代前半くらいのおじさんだ。
驚いた顔を見せる彼に俺も驚く。

「……あ、あの? 何ですか?」

初対面のおじさんに見つめられても困るだけだ。

「いや、何でもない。そりが、彼女の息子か……」

彼はそう呟いて、俺から視線を外す。

何だろう、この人は……どこかで会ったような?

不思議な感覚を俺は抱き、彼の横を歩きながらナースステーションへと向かった。

第25章・嘘つきの恋〈後編〉

【SIDE・井上翔太】

早朝、母さんに頼まれた資料を届けに勤務先の病院を訪れた。俺が出会ったのは口髭の似合つ謎のおじさん。

母さんの事を知っているようだが、一体誰なのだろうか？

「……そう言えば、名前を聞いてもいいだろうか？」

「俺は井上翔太って言います」

「翔太。そうか、いい名前だ。僕は佐々木信彦（ささき のぶひこ）。この病院の院長をしている」

「院長先生だったんですね？」

「ひと月ほどまえに就任したばかりだよ。それまではずっと地方の大病院を転々としていた。この病院は僕の祖父が経営する系列の病院でね。ようやくここに落ち着けそうだ。……葉月、キミのお母さんとは古い友人だったんだ」

うちの母がこの病院に来て、すぐに看護師長になれたのは彼のおかげなのだろうか？

その事を尋ねて見ると、彼は笑いながら言つ。

「逆だよ。僕が彼女にこの病院にきてもうれるように頼んだ。看護師として優秀な彼女を、別の病院から引き抜いてきたのさ」

「そりだつたんですか」

廊下を歩きながら俺は母の態度を思い出す。
この病院の話を受けた時、どこか嫌そうにしていた気がしたのだが
が気のせいいか？

「……佐々木さんと母さんはどういう知り合いなんですか？」

「僕と葉月かい？十数年前、初めて勤めていた病院が一緒だつたんだよ。まだ僕は2年目の研修医で、彼女も新人ナース。互いに新人として、戸惑い、悩み苦しみながら大変な仕事に明け暮れていた。それから僕も地方に行つたりして、疎遠気味になつていたんだ」

彼はそこで言葉を止めて、俺の顔を見る。

「その後も時々、仕事で逢うこととはあったが、本格的に1年ほど前にこちらの地方に再び戻つてきたのが縁で葉月と再会したんだ。それからは友人付き合いもしている。だが、キミの話は葉月からは聞いていなかつた。子供がいる事もね」

「……母もいい歳ですけど？」

「ははっ。そう言う意味じゃない。彼女はあまり自分の事を話さないから気になつてね。まあ、十数年たてば変わつている事もある。彼女が結婚して、子供がいる事も知らないのは友人としては恥ずかしい事だな」

彼は苦笑いをして、口髭を撫でた。

「佐々木さんは結婚しているんですか？」

「していた、が正しいかな。10年ほど前に結婚したが、3年前に離婚してね。妻には逃げられてしまつたよ。自分でも反省しているが、家庭をかえりみない典型的なダメ夫だつたからね」

医者と書つ仕事は忙しい事もあり、うまくいかなかつたようだ。離婚後、彼は今は8歳になる娘とふたりで暮らしているらしい。

「キミは何歳かな？」

「今年で17歳になります。高校2年生ですよ」

「17歳？17年前……？」

「……それが何か？」

彼は何か気になつたのか、歩く足を止める。

「いや、何でもない。質問ばかりで悪いが、キミのお父さんはどういう人だろう。やはり、医師とか医療関係者かい？」

俺の父親……顔も見た事のない、名前も知らない相手だ。少なくとも俺の記憶に父親の記憶は一切ない。

「父親は知りません。母は未婚らしいので」

「……未婚？結婚はしていないのか？」

「結婚はしていないらしいですよ。俺も実際の父親とは会つた事もありませんから。ずっと母さんと一緒に暮らしをしてます」

彼ならば、俺の父親の事を知っているのではないか。

そうは思つたが、長らく会つていなかつた事を思えば知らない可能性の方が高い。

別に今更知りたいわけではないので別にいいか。

「ふたりで暮らすのは大変だろ？ 看護師なんて忙しい仕事だ」

「もう慣れましたけどね」

そんな話をしていると、内科のナースステーションに到着する。

「僕はここの隣の部屋に用があるので、これで失礼するよ。また機会があれば、今度はキミの話を聞かせて欲しい」

「案内してもらひ、ありがとうございます」

俺は礼を言つて彼を見送つてから、ナースステーションに入る。時計はギリギリ時間内、怒られずに済む。

「あの、井上葉月はどこにいますか？」

俺が中に集まつていた女人に声をかけると、すぐに呼んでくれる。

母さんは俺の顔を見るや否や、「翔太、遅い」と俺を責める。

「せっかく持つてきてあげたのに、それかよ。これでも出来る限り、早く来たつもりだ」

「……時間内でよかつたわ。ありがとう」

「今度は忘れものなんでしないよつしてくわ。やついや、やつを
佐々木さんつていう院長にあつたんだけど、母さんの知り合つだつ
たんだな。口髭がダンティズムなおじさんだつたぞ」

俺がここまで案内してもらつた事を話すと母の顔色が変わる。

「えつ……あの人にはつたの？」

「古い友人なんだろ？ 彼の誘いでここに来たつて聞いた

何かに警戒するような彼女。

佐々木さんに気をつける理由でもあるのだろうか？

「そうね。確かにそうだけ……。何か話をした？」

「普通の話をして、俺の事を聞かれた。母さんに子供がいたつて知
らなかつたらしい。黙つておへどどの事か？」

「聞かれないから言わなかつただけよ。別に白痴できる子じやない
し」

「グサツ。そりや、医者相手に白痴できる子じや出来がよくなくてす
みませんねえ」

素で言われると傷付くわ。

まあ、その辺が母さんらしいんだけどな。

「あの人と母さんは仲が悪いのか？」

「本当に悪いなら、私が病院を移るはずがないでしょ？」

「やじや、やうだが……」

「昔の同僚のよしみで給料の良い「ひかり」を紹介してくれただけよ」

「つもなりはりせりものをしておこしては珍しい歯切れの悪い言葉だ。

母さんは俺の言葉をざべらかして資料を受け止める。

「……もうこいわ。気をつけて帰りなさい」

「ひこっす。眠いかりもひひと瞬つする」

「学生は良いわねえ。羨ましいわ。私もあと3時間ほどで帰るから」「はーはー。それまでに風呂の準備へりこしておくれ。それじゃ」

俺は任務終了して母さんと別れる。

さて、やつまと朝飯食つて寝るとするか。

俺は朝焼けの眩しい中、再び自転車に乗つて家に帰る事にした。

……。

看護師会議を終えた葉月に佐々木が声をかける。

「葉月。少しいいかい？」

「院長がわざわざ会議を見物？何か用事でも？」

「別に。現場を見ておきたかっただけだ。こちらの病院もすぐに慣れたようだな」

「設備がいいから、前よりも楽よ。人員も優秀だし、さすが私立といつところかしら」

葉月は佐々木の顔を見ずにそう答える。

「翔太君と話をしたよ。キミに子供がいたなんて聞いてないが？」

「聞かれなかつたから答えなかつた。それだけよ。別にいいでしょう？私も38歳だし、子供の一人くらいいるわよ」

「彼から結婚はしていないと聞いている。ずっと、ひとりで育てていたのか？」

「……翔太も余計なおしゃべりをしたわね。それが何か？」

葉月は仕事があると彼をあしらうような仕草を見せた。だが、佐々木は葉月の手を掴みながら、逃がそうとしない。

「16歳らしいじゃないか。17年前、ちょうど僕達がそれぞれ違う病院に勤めるようになった時期だな。あれから何度も、会う機会はあったが、子供の話は一度も聞いたことがない。なぜ、何も言わなかつた？」

「……だから、何？懐かしい話でもしようと言つの？」

「あの子の父親は……？」

葉月はきつと唇をかみしめながらその手を振り切る。

「……誰でもいいでしょ？ 貴方の知らない人よ。勘違いしないで。私がこの病院への誘いを受けたのは貴方の事があつたからじゃない。最低でも、翔太には大学くらい行かせたいから、給料の待遇のよさに誘いに乗った、それだけよ」

「なるほど……。葉月、相談くらいしてくれればいいだろ？」「

佐々木の言葉から逃げるように彼女は視線を俯かせる。

「17年、か。あの当時、キミはいきなり僕をフツて、一方的に交際を終わらせた。病院を離れる事が原因だと思っていたが、その意味をもつと深く考えておくべきだったかもしれない。葉月、正直に答えてくれ。あの子の父親は？」

「死んだわ。……翔太にとつて、父親は17年前に死んだのよ。もうどこにもいないの。心配しなくとも、父親は貴方じやない」

「嘘なんだろう、葉月。彼の年齢を考えたら……」

葉月は佐々木を無言で睨みつける。

佐々木にとつては大事な話なので、その視線にも耐え続ける。

「……嘘なんてついてない。私が貴方と別れた理由はね、私に他の男がいたからよ。彼との子供ができてしまった。だから、貴方と別れた。その後にその彼も事故で亡くなつたの」

「葉月、僕は……」

「浮氣をしていた私を軽蔑した？翔太に罪はないわ。憎いと思うなら私だけを恨んで。そういうことなの。それがすべてなの…」

「恨むはずがない。キミは、そんなことをする子ではなかつた。」「

佐々木の言葉をさえぎるように、葉月は辛辣な表情を見せて言う。

「昔の事よ。私が貴方を裏切つた、それだけの事なの。お願ひ、もう、あの子には近付かないで」

彼女は呆然とする佐々木を無視するように部屋を出ていく。
ひとり取り残された佐々木は壁を力強く叩いた。

「……キミは嘘が下手だな、葉月。その程度の嘘に騙されるものか。それなのに、僕はバカだ。17年もキミのついたとんでもない嘘に騙され続けていたなんて」

何とも言えない複雑な気持ちが彼の心の中に渦巻いている。

「井上翔太……まさか、彼が僕とキミの子供なのか」

自分の手が震えている事に彼は気づく。

それまで考えもしなかつた現実が彼を襲う。

だが、どれだけ後悔しても17年と言つ年月は取り戻す事が出来ない。

「今まで何度も葉月と会つてきたのに、何も知らなかつたなんて…」

そして、病院の院長と云う自分の今の立場も……その現実を受け入れる事を許さない。

第26章・次なるステップへ

【SIDE・井上翔太】

琴乃ちゃんが可愛くて仕方がない。
美少女だし、健気で、俺を慕ってくれる彼女は本当に最高だ。
恋人がいるという事がこれほど俺を幸せにしてくれるとは付き合
う前まで思いもしなかったのだ。

「彼女つていいなあ。世の中、恋人があふれる理由がようやく分か
つたよ」

「てめえ、最近の惱氣でばかりだな」

「惱氣もするさ。今の俺は最高に幸せだからな」

友人の中山に毎回、呆れられるが幸福な俺は惱氣くらいする。
先日は喧嘩して険悪だったが、それも過ぎ去り、距離も近づいた。
あと2、3日で待ちに待ったゴールデンウィークだ。

「GWだ。もちろん、彼女とデートする決まってる」

「誰もまだ何も聞いてないっての。……自分で言うな

「いや、この時期の話題だからさ。ゴールデンウィークはどう過ご
す? そう聞かれる前に答えてみた。短期バイトもしてお金も入った
しな」

「この時のために遊ぶ金くらいは琴乃ちゃんと稼いでいるのだ。

「この長期休みが終われば、本格的にアルバイトも始めたい。やつぱり、お金って遊びに行くためには大事だからな。

「……硬派でモテなかつた頃のお前はどこに行つた？彼女なんていらない、俺には必要ない。恋などに浮かれている人間はバカばつかりだ。過去のお前のセリフだ」

「過去の俺よ、お前は愚かだつた。本当に恋つて素晴らしい」

「ちくしょーーーう、羨ましくなんかないぞ。俺は羨ましくなんかないからな」

拗ねる中山、まるで昔の俺を見ているようだ。

昔の俺は恋人ができた現実を知らなかつた。知らないゆえに勝手に嫉妬していたんだよ。その愚かな過去の俺は忘れ、今の俺は恋を満喫する。

「デートはどこに行つこうかなどと悩み中なのだ」

「どこに行つても人だらけでつまらんと思つた」

「はいはい、負け犬の言葉はどうでもいいし」

余裕の発言に悔しがる中山。

その優越感に浸りつつ、デート計画を立てようとする俺は雑誌を眺めながらデートスポットを探そつとする。

「そういう話は変わることなく、中山って昔の記憶が思いだせなかつた事あるか？」

「……何だ、そりゃ？」

「例えば小学生時代に仲良かつた友達とかの顔つて思いだせなかつたりしないか？」

「普通だろ、それは。昔の事なんてそんなに覚えてない」

中山は「それでも印象的な事は覚えているかな」と言つ始める。

「小学校の時に好きな子がいてな、その子の事は今でも覚えてたりする。大抵の奴はそうじやないか？何かひとつくらい覚えてるものがあるだろ。お前にはそういうモノがないのか？」

「うーん。あるはずなんだからさ。どうせ思い出せない」

子供の頃、俺は琴乃ちゃんに惹かれていたからな。
俺にとっての初恋をなぜ俺は忘れてる？

「……何度も考へても答えが出ない。何でだらうな？」

「よく分からなーいが、思ひ出つてるのはキーワードひとつで思い出すものだろ？過去の記憶が思ひ出せないって言つのは検索ワードが間違えているんじゃないのか？ちゃんとしたワードだと簡単に開くも

のね」

時々、昔の事をふと思ひ出す事がある。
それはきっと、ある特定の想ひ出に關するワードが一致したから思い出すのだらけ。

「やうこいつの、何でこうだったのか？ヒペーンで記憶だつけ。物

「語的な記憶で覚えているから思い出せないんだ。何か思い出すきつかけを見つけられるといいな」

「ああ、そうだな」

麻由美の事を思い出せたよつにきつかけさえあれば琴乃ちゃんの事を思い出せるはず。

「でも、今さら思い出す事に意味はあるのか？それが今のお前に何の関係があるんだよ？小さな頃でも思い出して過去に漫るにはまだ若いだろ」

「ちよつとな……」

俺は誤魔化して話題を変えた。

脳内記憶の検索キーワードが間違っている。

本当にそうなのだろうか？

帰り際、人々で賑わう繁華街。

俺と琴乃ちゃんは手をつないで恋人らしい恰好で歩いていた。学校帰りにどこか寄るつて言うのはあまりなかつた。

「まあ、普段は『』がよつて歸るってあつしな』からな。この、ある機会を増やしたい?」

「……先輩と一緒に何でもいいです。いつていられるだけで幸せですか？」

小さな手から伝わる想いと温もり。

「ホールディングワークだけど、遠出しないか？」

「遠出ですか？」

「うん。琴乃ちゃんと一緒にどこか遊びに行きたいなって。まだ俺達つてデートらしいデートって数えるほどしかしてないじゃないか。俺的にはもつと回数を増やしたいんだ」

付き合い始めてもうすぐ3週間に突入する。
だが、デートはまだ水族館デートや買い物デートなど3回程度しかない。

ここはこの大型連休で回数を増やしておきたい。
あわよくばキスの次のステップに行ったりして……。
なんていう男の欲望もほんの少し抱いてはいるが。

「そうですね。遊園地、とか子供っぽいですか？」

「別に子供っぽくはないと思つけど、行きたい？」

「ああいう所に恋人同士で行つてみたいなって思つていたんです。
先輩が嫌じやないなら、ぜひ一緒に行つてみたいですね」

琴乃ちゃんの口から遊園地と言つ葉がでるとは思つていなかつた。

「いわゆる絶叫系とか得意な方?」

「……えっと、好きだつて言つたら変ですか?」

「ううん。変じやないけど意外だなって」

琴乃ちゃんは照れくさうに笑いながら言つ。

「怖いけど好む、つてタイプですよ。お化け屋敷も、絶叫コースターも

「ふーん。 そうなんだ?」

「翔太先輩はどうなんですか? 苦手だったりします?」

俺に話を振られて、俺は何と答えればいいのやら。
知識で知つても、現実を知らないのだ。

「一度くらいしか行つたことないんだよな、遊園地つて……。子供の頃に遠足で行つたくらいで、実際の絶叫系つてのは体験した事がなかつたりする。テレビとか雑誌とか情報としては知つてるけどな」

彼女相手なので嘘も見栄もはらずに俺は正直に答えた。

その子供の頃は絶叫系は身長の関係で乗れず、観覧車とかは乗つた覚えがあるが……それくらいだ。

親も忙しくて、中々連れて行ってくれる機会もなかつたから。

彼女は俺の家庭環境を思い出したのか口を片手で押さえる。

「あっ、『めんなさい』

「……別に謝られる」とじゃない。母親も忙しいってのはあるナビ、俺も特にいきたいと思つたことがなかつたんだよ」

「先輩、私と一緒に行きましょう? ゼひ、行きたいです」

先ほどよりも積極的に俺を誘う彼女。

琴乃ちゃんって本当に優しくていい子だな。

「やうだな。琴乃ちゃんとならいい思い出もできそうだし」

「……ふふっ、楽しみにしておきますね。あつ、これ可愛い」

街角のお店で気に入つた雑貨を見つけた彼女はそちらへと近づく。ふち、デートを楽しみながら俺は彼女の横顔を見つめていた。

恋人が出来た事が俺にとっての一つの変化を生んだ。

それまでの自分を変える、新しい世界を切り開いてくれた気がする。

これからもいろんな事を積み重ねて関係を深めていきたい。

大好きな女の子、琴乃ちゃんと一緒になら何でもいい思い出になつていくような気がするんだ。

第27章・記憶のない父親

【SIDE・井上翔太】

「……翔太、父親に対して興味がある?」

それは「ゴールデンウイークの初日の夜の事だった。夜勤明けの母さんが起きてくるや、いきなりそんな事を言いだした。

その台詞を初めて来た時、俺は思わずドキッとする。

「ま、待て、誤解だ。母さん、俺と琴乃ちゃんはまだそこまで深い関係になつていないし、子供だって当然にできてません。俺はまだパパになつてないし、孫はまだまだ先の話だ。そんなに急かされてもまだ学生の俺たちは困るぞ」

「……アンタ、バカ? そんなの分かつてるわよ。付き合い初めて1ヶ月でそもそも、子供が出来たかどうかも分からぬし、アンタにそんな度胸もないのは分かつてる。ヘタレを絵にかいたような典型的なヘタレが恋人に手を出せるはずがない。童貞のくせによく言うわ」

「ものすごく最後は失礼な事を言つた……!」

しかし、誤解されていないのなら最初の発言の意味は何だ?

「俺が父親になつたと言つ意味じゃないとどういう意味か分からないんだが?」

「バカ。ホントにバカ。アンタ、私の子じゃないと思いたい」

「子供にグサツとくる暴言を吐くのはやめてください。傷つくわ。で、何だよ？俺の実の父親についてよつやく喋る氣にならなかったのか？」

それは今まで母が避け続けてきた話題だ。

俺はあつえなこと内心思いつつも、食器洗いを続けながら母さんに尋ねる。

「ちらはただいま油汚れとの戦いだ。

洗剤よ、何としてもしつこい油汚れに勝ってくれ。

「やつね。何も話さないってのは、悪かったわよ」

俺は泡だてた洗剤で食器を洗っている手を止める。
おじおじ、あの母さんが俺に謝つたぞ！？

「……びつした、母さん…？何があつた？悪いモノでも食べたのか！？」

「……アンタの来用の小遣い、2割削減してやる」

「じょ、「冗談だつてば。それくらいあつえないと困ったんだ。」「うかい減らすのはやめて」

「はあ、翔太のバカを加減にどうでもよくなつてきたわ

俺はそつと洗い物を終えて、リビングの椅子に座る母に向かって
「う。

「うやら、片手間に聞くよくな話ではなく、真面目な話のようだ。

「これは真剣に聞いた方がいいだらう。」

「それで俺の父親はいるのか？」

「……死んだ。翔太が生まれる前に、事故で亡くなつたわ」

「というのが今までの言い訳であつて、本当は生きているんだろう？」

事故死と言つ可能性もなくはないが、命日にどこかへ行つてる様子もない。

それにつけの母さんは両親とも仲が悪く、俺も数度くらいしか祖父さん達には会つていなからな。

何からしらの理由があるとみていいだらう。

「母さんが両親と仲が悪いのもそれが理由か……？」

「翔太の分際で色々と考えつくものね」

「まずは息子に対する過小評価を撤回してもらおうか」

「……そうね。バカは失礼だわ、アホにしておきました」

「ましたって、過去形！？」

どちらにしても侮辱的扱いだが、この態度は当たりと見るべきか。長い付き合いだ、雰囲気だけでも何となく察する事ができる。

「ふーん。生きてるんだ。だけど、母さんとは結婚せずに、今は別の家族がいる、と」

「……アンタ、どこまで知ってるの？」

「うわ、ちよっとよくあるドラマ風に言つたら当たつたか？」

それには俺も驚き、母さんはやられたと言つた顔をする。

この程度のカマかけに引っかかる彼女も珍しい。

相当動搖しているのか、慌てて今の態度を否定する。

「ち、違うわ、変なドラマみたいな事を言うから呆れただけよ

「俺の父はどこかで生きていって、今は別の家族がいる。離婚しているわけでもないから、俺の親でもないわけだ？」

「……」

母さんは今度は黙り込んでしまつた。

今から16年前くらい前と言えば、母さんの歳的に21、22歳くらいだろ？

まだ専門学校を出て新人ナースだったはずの母さんに何があったんだろ？

何やら考えていた彼女は、ようやく口を開いた。

「結婚してなくともあの人はアンタの父親よ。血筋ではね」

「もしかして、もしかするとですが、俺って実は認知されてない？」

「……『めんなさい』」

母さんの謝罪に俺は自分の存在が極めて危つい事に気づいた。

今まで平凡に生きてきた俺にとっては衝撃的な事実。

いや、可能性としては存在していたので、考えてなかつただけだ

な。

「……あー、まあ、何と言つか、ベビーな空氣ですな」

あまりにも重い話に軽い口調で俺は言つしかない。
この沈みきつた母の態度に何とも言えなくなる。

「つまり、俺は俗世間で言つ、隠し子という奴だったのか?」

無言で頷く母さんは今にも泣きそうな顔をする。

……ほ、ほう、俺がねえ、ドラマみたいな隠し子設定があつたと
はびっくりだぜ。

胸にグサッとくるものはあるが、今さら感もあり、俺よりも母さ
んの方が辛そうだ。

「私が選んだのよ。あの人はまだアンタの存在にも気づいていなか
つた。16年間ずっと隠してきたから。私のエゴでアンタの人生を
狂わせてきたのは謝罪しても謝罪しきれない。本当に悪かったと思
つていい」「…………わざわざ隠さなきやならない相手が俺の父親ってわけだ?」

「そうね。今のあの人には迷惑をかけられない。翔太にはすぐ悪い事をしていくと思うわ。でも、貴方に父親は会わせられないの。
責めるのなら、私を責めていい。それだけのことをアンタに私はしたの」「

重い、空氣が重いつ！？

俺はシリアルモードは嫌いだ、そういうのはやめてくれよ。
何とかこの場を和まそと俺は考えながら雰囲気を変える。

「そつか。どんな事情であれ、母さんが話してくれた事はよかつたよ。知っている事と知らない事、どちらがいいかは俺が決める事だと思つし。それに、今はこうして生活できているわけだろ？ちゃんと育てても、うりつてゐる元文句何て言えるわけないし。うん、母さんは悪くないって」

この狭いマンションの一室にふたり暮らし。
ずっと働き続けてきた母さんには感謝こそしても、責める必要は微塵もない。

「……俺の事は良いからさ。その、父親なんて今さらだし、記憶すらもない相手の事をどういつ考えてもしようがないじゃないか。俺よりも心配なのは母さんだ。そもそも、再婚、といつうか、結婚も考えていいんじゃないのか？」

「私が……？」

「そりや、そうだろ。あと4、5年もすれば俺も当然、この家にはいないかもしないし。そうなつたら、どうする？まだ30代後半の今のうちに残りの人生を一緒にいられる相手を見つけるのが良いに決まつてゐるじゃないか」

俺がそう言えるのは琴乃ちゃんのおかげでもある。

俺は人が人を愛する意味を知つた、価値を実感している。

母さんには母さんの事情で、ひとりで俺を育て続ける道を選んだんだろ？

それもきっと彼女なりの相手に対する愛なんだと思つ。

「年齢の事を言わるとムカつくわ。私はまだ若いわよ

「……反応するのはそこなんだ」

「でも、翔太にそう言われるなんて思つてもみなかつた。本当ならもつと楽な生き方をさせてあげられたかもしね。片親で苦労をかけ続けきた、その罪悪感もあるわ」

人間には変えられるものと変えられないものがある。

人は自分の過去は変えられない。

過ぎ去つた時の流れを変えるのは不可能だ、人生をやり直す事なんてできない。

けれど、人は自分の未来は変えることができる。

これか先の事を、どう考え、どう生きていくのか。

人生つて短いよつて長いのだとまだ子供の俺ですら感じているんだ。

「母さんは幸せになるべきだと、俺は思うよ。俺は琴乃ちゃんに出会つて愛を知つた。人つてさ、出会い一つで運命変わるつて本気で思つた。それまで何となくしか思わなかつた愛情つて言うものが実感した途端にすごい力があるつて思えたんだ」

恋は生きるために必要なものなのかもしれない。

今の俺は満たされている。

この幸福感はこれまで体験した事のない物で、人と人が愛し合つ事をやめられないのは当たり前の事なんだと思つていい。

「何を親相手に惚氣てるのよ」

「……それだけ、愛は素晴らしいと気づいたのだ。青春を絶賛謳歌中の俺は幸せなんですよ。だから、いつまでも過去を引きずつてな

いで母さんにも幸せになつて欲しいワケ。老後を寂しく老人ホームで過ごしてほしくはない 「きやふつ！？」

良い事を言ひてるのになぜか顔面パンチ。

と言つても、全然、痛くもないけどな。

母さんの顔を見れば分かる、それはただの照れ隠し、何だか嬉しそうに見えた。

「……アンタは最後にいつも余計な一言を言つわね」

「痛い……。お、俺の言いたい事は理解してくれた？」

「それなりに。翔太がそう言つてくれるなら、私も考えてみるわ

「うー。そうしてくれ

母さんが抱え込んできた事情、それを俺は垣間見た気がした。けれど、それは全てではないのだろう。

俺には言えない複雑な事情があるはずなんだ。

それに対して、隠し子として扱われると言つ事は社会的にマズイというわけだ。

うーん、どう考へても浮氣や不倫と言つ悪い意味しか思い浮かばないのだが？

真っすぐな性格をしている母さんがそんな悪事に手を染めるはずもない。

となると、相手に立場があつて結婚できなかつた可能性が高い。

……つまり、俺の父親はそれなりのすごい人なのかもな。

だからと言つて、母が隠そうとする以上は俺は実父に会つ事はなさそうだが。

俺も深く探るつとしてはいけないのだろう。

今は、長年、ひとりで抱え込んできた母さんの本音を聞けただけよかつたとしょつ。

翌日、俺は母は再び夜勤で、今日もひとりで夕食なので、コンビニに出かけようとしていた。

階段を下りてマンションの外へ出ようとした時に俺は声をかけられる。

「 やあ、翔太君。久しぶりだね」

口髭の似合づおりじわん、確か病院であつた院長の佐々木さんだ。彼が何でここに？

「どうしたんですか？こんなところで」

「……少し、キミに話があるんだ。よければ、これから夕食でも一緒にどうだい？」

「え？俺に話ですか？」

いきなり現れたこの人は何を考えているんだろう？
その時の俺はまだ、何も知らず、分からずについた。

【SIDE・井上翔太】

俺は病院で知り合つた院長の佐々木さんと一緒に食事をする事に。俺に用があると言つた彼。

そして、俺も彼には聞いておきたい事がある。

佐々木さんはちょうど俺を身籠る前の母と友人関係にあり、親しい人物のひとり。

過去を知る上で、彼ならば本当の父親が誰か心あたりがあるかもしれない。

当時、交際していた相手。

母さんは俺が誰かの隠し子であると言つた。

それはきっと浮氣や不倫の類ではなく、事情で結婚できなかつただけだろう。

もしも、まだ母さんに相手を想う気持ちがあるのなら……。

俺が隠された存在である理由くらいは知りたいじゃないか。

母さんの話では既に父親には別の家族がいるようだ。

これがドラマなら、相手を憎んでその家族を壊してやりたい復讐劇が始まるとかもしねーが、あいにく俺にはそのような気持ちはない。微塵もない。

別に今さら親になれと、俺を認めろとは言わない。

ただ、真実が知りたいだけだ。

俺と言つ人間がこの世に生まれた、その意味くらいは知つておきたい。

「佐々木さんの車つてすごいですね」

「ただの趣味さ。大学生の頃から車だけが僕の唯一の趣味でね」

高級車に乗り、颯爽と道を進む。

さすが有名病院の院長、お金持ちは違うなあ。

「すまないが、つむりの娘も一緒に食事をしてもいいかい」

「かまいませんよ」

「僕の話は食事の後でいい。キミも何か僕に聞きたい事がありそうだ」

俺の顔を見て彼はそう言い切った。

さすがお医者さん、と言づか、俺も分かりやすい顔をしていたのかな。

「」つむりも後でいいです

「そりゃかい。それでは先に食事を楽しむ事にしよう」

車は小学校の前に停車して彼の娘を乗せる。
車に乗つて来たのはまだ幼い少女、髪止めの赤いリボンがよく似合っている。

彼は8歳の娘がいると言つていたな。

「あれ、パパ？」のお兄ちゃんはだあれ？」

「冬美、挨拶をしなさい。この人は……」

「俺は井上翔太。キミのお父さんの知り合いだ」

「」んにちは、お兄ちゃんつーわたしは佐々木冬美（ささき ふみ）。小学校2年生なのつ。よろしくね、えへへつ」

純粹で可愛らしげに笑み、本当に可愛い女の子だった。

「冬美ちゃんと一緒に暮らしをしているんでしたつけ」

「まあね。普段は家政婦を雇つて、冬美の面倒や家の事を頼んでいる」

「家政婦……メイドさん？」

「ははつ。キミの年頃では美人なお姉さんがしてくれると嬉しいだらうけれど、ベテランのおばさんだよ。メイドとも呼ばないしね。ベテラン相手の方が僕も安心できるからわ」

苦笑いをする彼、冬美ちゃんは「？」と不思議そうな顔をする。そうだよな、家政婦って名前はどいつも男のロマンの象徴であるメイドとは結びつかない。

これも悲しい、所詮はメイドは妄想の文化でしかないのか。

「翔太君も葉月と一緒に暮らしだろう。何かと大変な事も多いだらう？」

「もう慣れました。さすがに子供の頃からずっとですから。母さんも仕事ばかりで、あちらの方が大変だと思います」

「葉月は看護師と言う仕事が好きなんだよ。本当に天職だと語えるほどにね」

夜勤は辛いだろうが、本人は仕事自体は楽しそうにしている。
人に関わる仕事は母さんに合っている。

「僕も妻と別れてから身にしみて感じたが、子供をひとりで育てる
と言つ事は大変だ。葉月はよく頑張つている。本当ならば……いや、
何でもない。もうすぐ店につくよ」

彼は言葉を濁して、車の運転を続けていた。
その横顔がどこか寂しそうに見えたのは氣のせいだろうか？

佐々木さんが連れて來たのはホテルにある高級フレンチのお店だ
った。

「いつ場所に全く縁がない俺にとっては驚くだけだ。

「あ、あの、ここですか？俺なんかがついて來てもいいんですか？」

「気にする事はない。ここはそれほど敷居の高いお店ではないよ」

そうは言つても、一流店には違ひなく、値段も張るだろう。

先日に会つただけの相手を連れてこられる場所としてはこちらは
緊張してしまつ。

俺達は席に案内されて、彼は適当に注文したが、俺はかなりビク
ビクしていた。

「……今日は月に数度の冬美との食事会なんだ。私も忙しくてね、
たまの休日はゆっくりと冬美に付き合つよつとしている」

「んにゅ？何、パパ？」

「何でもないよ、冬美。大人しくしていなさい」

「はーいっ」

落ち着いた様子で席に座る彼女、しつかりとした娘だ。あの年頃の俺にこんな真似できたつけ？

無理だな、すぐジツとできずに暴れていたかもしれない。そして母さんに怒られているだろう、そうに違いない。

「佐々木さん。どうして俺をここに？ただ、単純に友人の息子を連れて、というワケではなさそうです。わざわざ、俺の家まで来たんですから何か理由があつたのでは？」

「……先にも言つた通り、キミに尋ねたいことがあつたのさ。少し込み入つた話だ。よければ今は食事を楽しんでくれ。ここのお店の料理は美味しいよ」

「うう、俺はナイフとフォークは使い方がよく分からんのですがお兄ちゃん、わたしが教えてあげるよーっ」

俺の隣の席に座っていた冬美ちゃんはそう言つて、使い方の説明をしてくれる。

フォークとナイフの実践訓練中……これが中々難しい。普段から食べなれないのでよく分からん。

「あのね、ナイフの持ち方はこつするの。切りやすくなるためにこうじう持ち方がいいってパパがよく言つてるの

「ううか。なるほど、ナイフはこう風に使うんだな。冬美ちゃんはよく知ってるな」

「えへへつ。ほめてくれてありがとつ。次はフォークだけど……」

……さすが、金持ちの娘、しつけというか、教育がなつております。

幼い見た目であなどるなれ、金持ちの娘さん。

庶民の俺とは次元レベルで大違ひだぜ、金持ちの娘さん。
俺と違いナイフとフォークはきつちりと扱える様子、さすがだ。
さらに礼儀作法にマナーまで身についているとは……生まれの違
いの恐ろしさに俺は人生を嘆きたくなる。

ていうか、8歳児にナイフとフォークの使い方を教わる俺つて人
としてどうなの！？

経験ないんだから仕方ないじやない、ぐすつ。

一般庶民には来る機会もないお店なのですよ。

運ばれてきたメニューにも愕然させられる。

「う、これは……す、」

それまでの人生で食べた事もない厚切りのステーキ。

冬美ちゃんはお魚料理のようだ、佐々木さんが選んでくれたよう
だ。

「冬美ちゃんは肉料理より魚料理が好きなんだ？」

「だつて、お魚さんの方がヘルシーなんだもん。身体のためにもお
肉よりもお魚さんの方がいいんだよ」

「……何かあらゆる意味で、す「」い子だなあ」

生まれも育ちもよければこれほど品位のいい子に育つのが。
俺は感心しながら生まれて初めての高級ステーキを食べる。
う、美味しい……あふれ出る肉汁と厚みのある肉の触感が最高だ。
一口食べてよく分かる、近所のスーパーで半額シールが貼つてある安物ステーキとは全然味が違うと言つ事にびっくりだ。
高いお肉つてこんなにころけるものなのか、初めて食べたが感動ものであります。

「気に入つてもらえたようだね」

「は、はい。す「」く美味しいですよ。それしか言えないとくらいです」

「そうか。それならよかつた」

彼は俺の顔を見て微笑む、なぜか先ほどから俺の顔を見られて気が恥ずかしい。

大方、俺のマナーが悪いのだろう。

食べ方のマナー知らないと言つ事は大変に恥ずかしい事だと身に染みております。

すみません、今日は勘弁してください。

隣の冬美ちゃんなんかフォークの扱いもつまくて綺麗に魚を食べている。

「んにゅ？お兄ちゃん、どうかした？」

「冬美ちゃんは上手に食べるなあって思つていたんだ」

「「」やー。ありがとう。お兄ちゃんつ

か、可愛いな、この子……無邪気な笑顔がたまらんぜよ。

……ハツ、俺にロリコン属性はありませんよ！？

幼女の笑顔に癒されてにやけそうになる自分に少し幻滅した

。

第29章・言葉と真実

【SIDE・井上翔太】

生まれて初めての高級フレンチ。

大満足の食事を終えて、食後のコーヒーを飲みながら俺と佐々木さんは本題を話し合つ。

「さて、それじゃそろそろ本題を話そつか

冬美ちゃんはデザートのパフェ（これもかなり高そうだ）を美味しそうに食べていた。

デザートを大人しく食べているので、俺達は会話を始める。

「まずは翔太君の話から聞こうか」

「いえ、そちらからお願ひします。俺の方は大した話ではないので……」

「そうかい。それじゃ、僕から話そう。最初に不愉快にさせてしまふかもしれない事を詫びておきたい。だが、僕も知りたい事でね。キミの父親についてだ。单刀直入に聞きたい、キミは一度でも実の父親と会い、話をした事があるかい？」

それは俺が聞いたかつた質問とほぼ同じ話題だった。

俺の父親、それが誰なのか？

俺はコーヒーカップを持つ手に力を込めながら言つ。

「いえ、一度もありません。俺が生まれた時からずっと母さんとふ

たりだつたので

「さうか。キミは知らないのか」

「はい。俺が佐々木さんに聞きたかつたのも同じ質問です。過去に俺の母が交際していたらしい男の人を知つていたら、と思つたんです」

「彼女は綺麗で人気のある看護師だつた。仲のいい男も何人もいたからな」

俺に真実を語つた時の母の顔を思い出す。

俺の父親の話をした顔は辛そうで、でも、どこかそれは自分に納得した顔でもあつた。

彼女なりの決意を持ち、彼と別れて俺をひとり育てたのだらう。そして、今でもきっとその相手の事を……。

「別に今さら父親が誰でも俺はいいんですよ。ですが、母さんはきっと今でもその人を想つてる。向こうの事情もあるんでしょうが、できれば、俺は一度だけ話をしてみたい。過去の事、母の事、俺の事、俺は話だけを聞いてみたいんです」

俺は誰かの隠し子だ。

世間的に認められていない子供だと母は言った。

今さら、俺が掘り返していい過去なのか、それもよく分からぬ。

「相手に事情を思えば俺は父親相手であるうと話をする権利はないんでしようけどね」

既に向こうには別の家族がいる。

今さら俺が現れても困るだけだろうが。

俺の話を黙つて聞き続けていた佐々木さんは顔色を変えていた。

「そんなことはないんじゃないかな。一人の子の親として、自分の子供に会いたくない人間はいないと信じたいが……」

「事情が事情だけに拒絶される事もあるでしょう。俺の立ち位置はかなり微妙なようです。それに俺は別に相手の家族を壊してまで眞実を知りたいとは思つてません。それはきっと母さんが嫌がる事で、避け続けてきたことだと思いますから」

母さんがひとりで俺を育ててきた16年間にはきっとある意味があるのだと思つ。

それを俺の勝手な判断でぶち壊す事だけはしたくない。

「……ふこゅう、お兄ちゃん達は何のお話をしているの？」

デザートを食べ終わつた冬美ちゃんが不思議そうな顔をしている。まだ幼い彼女には分からぬ話だ。

「冬美ちゃん。家族は大事だろ？」

「パパのことは大好きだよ。ママはいなくなつちやつたけど」

「俺も母さんと二人暮らしで、大事に思つてゐるんだ。どんな事情があつても家族は幸せでありたい。それが一番だよね？」

「うん」

「ひとつ微笑みを浮かべる冬美ちゃん。

そう、きっと俺の本当の父親にも冬美ちゃんのよつな子供がいて、家族がいるはずだ。

その笑顔を壊す事はしたくない。

「……キミは優しい子だな」

「俺が優しい？ それは違うと思います。ただ、俺は分からないだけなんです。生まれてから父親と言う存在を全く知りません。知らないものだから、どう触れ合うべきなのかも分からぬ。知らないのに、知りたくなる。複雑な気持ちです」

俺がその父親と対面しても何を話せばいいのか。

「もしも、その相手に会えたらキミはどうする？ 16年もキミを放つていた彼を恨むかい？ どんな事情があつたとしても、キミや葉月と離れた彼は別の家族を作り、それなりに幸せを得ていたとしたら？」

佐々木さんの言葉はどこか“確認”的に聞こえた。
確かに過去を聞きたいが、別に特に責める気持ちもない。

「……普通なら恨むべきなんですか？ さつきも言いましたけど、俺は別に憎んでいない。きっと俺の父親は、俺の事を知らずにいた可能性が高いです。母さんは自分ひとりで何でも抱えてしまう、そう言つ人だから」

多分だけど、相手の負担を考えて見を引いた、彼女はそうしたはずだ。

今まで父親の事を何も言わなかつた。

それは彼女なりの責任と覚悟だつたはず。

「それに妬みや恨みを抱くほど、俺は今の生活が不憫でも辛くもないです」

俺と母との一人暮らしは羨ましい悪い生活じゃない。
生活は苦しくても、母さんは俺を慰めてくれていたし、ちやんと
家族としての温もりも知つている。

だから、俺は父親を恨む事がなことだと思つんだ。

「今日は本当にあつがとうございました。食事、とても美味しかったです」

俺は再び自分のマンションまで車でおへつてもらい、彼に礼を言つ。

「うひらも話が出来てよかったです。機会があればまたキミを誘おつ
「それは楽しみにしてます。また何か分かったら、教えてくださいね」

「ああ。冬美もキミの事を気に入つたようだし」

俺は後部座席の冬美ちゃんに声をかける。

「それじゃ、またね。冬美ちゃん」

「うん。お兄ちゃん、バイバイ。今度は私と遊んでね?」

「 もうらん、次はそつするよ。じゃ、バイバイ」

俺はそつと手を振つて彼女も小さな手をこじりながら俺は佐々木さん達を見送つた。その反応が可愛いなつて思いながら俺は佐々木さん達を見送つた。

「 しかし、お金持ちはす』いねえ。あんな料理、初めて食べたし」

本日のステーキは本当にす』く美味しくて感動した。

テレビで高級料理を食べている光景を見て、一度くりこは食べて見たいと思っていたが、実際に食べるトマジで感動だ。

「 それはそれでおこといて。問題はあるの問題か」

今回の事はゆれこには黙つておいた方がいいと、佐々木さんからも口止めされていた。

ゆれんの過去を探るよつた真似をするのは何だかなあ。

「 ……俺の父親か。今、ビルで何をしてるんだ？」

そう呟いた俺は携帯電話に琴乃ちやんからのメールが来ている事に気づく。

「 おっ、琴乃ちやんからのメールだ。何だらつ？」

それは明日の朝9時に待ち合わせで、遊園地デートをする約束の連絡だつた。

遊園地に関しては俺もよく分からないので、彼女に任せていたのだ。

「明日、か。琴乃ちゃんとのトーク、楽しみだなあ」

俺はそのトークを楽しみにしながら夜空の月を見上げる。
黄色いお月さまが今日はやけに綺麗だ。

「明日のトークのために準備しなきや」

気合いでいれて頑張るぞ、なんて思しながら俺は自分のマンションの部屋と帰る。

こうじると難しい事は考えてもしうがない、なるべくしかならぬいつてね。

……。

佐々木は車を運転しながら自分の娘に声をかける。

「冬美。翔太お兄ちゃんはどうだった？」

「す、ぐ優しかったよ？お話しして、楽しかったもん」

「わづか。また会いたいか？」

「うん。今度は一緒に遊んでもらいたいなあ」

娘の言葉に彼は「そうだな」と頷いた。

車の窓の外、流れいく景色を彼は見つめる。

夜の街並みに視線を向けながら独り言をつぶやいた。

「もしも、僕がそつだとしたら……どんな顔をして彼に会えぱいいんだ？」

翔太は顔も知らぬ父親を恨んでいないと言つた。

だが、それは現実味がないからだろう。

実際にそう言つ状況になれば心境も変わる、と佐々木は感じていた。

「……葉月と話をしよう。まずはそれからだ」

どんな責めでも自分は耐え抜かねばならない。

それが人の親という責任、逃げる事のできない宿命。

「僕は、僕のすべきことをする。それだけだ」

全ての始まりは17年前のある出来事。

佐々木にとつても、それは大切な過去だった。

第29章・言葉と真実（後書き）

次回からは葉月の過去編です。

第30章・愛ゆえに『前編』（前書き）

翔太の母、葉月の視点です。

【SIDE・井上葉月】

母親として子供の成長を見守る。
それは親としての幸せのひとつ。

「翔太？ いないの、翔太？」

病院の看護師の仕事をしている私、葉月は夜勤明けで家に帰るといつもいるはずの息子が家にいない事に気づいた。
まだ朝の8時過ぎ、ゴールデンウィーク中なので昼まで寝ていると思った。

部屋をのぞいてもいないし、どこかへ出かけてしまったんだろうか？

「あれ、本当にいないし。朝から出かけてしまったの？」

お風呂はちやんといってくれていたので、出かけてから間もない
と分かる。

このまま寝てしまふからいなくともいいけど、顔くらい見ておきたかった。

「ふう、あの子もいないならお風呂に入つて、寝よ！」

そう思っていたら、携帯電話にメールが来ているのに気づく。

相手は私の幼馴染である理沙。

翔太は彼女の娘である琴乃ちやんと先月から付き合い始めている。
親友の子供同士が付き合つ事になつたのは良い事で、私としても

ふたりの仲がうまくいく事を望んでいる。

それに、琴乃ちゃんは可愛いから将来、あの子のお嫁さんに来てほしいし。

「……えっと、暇なら電話して?」

メールにはそう書かれていたので、私は彼女に電話する。ずっと幼馴染として仲がいい理沙は今の年齢になつても信頼できる親友。

よくふたりで会つたりしているので、メールのやり取りも普通の事なんだけど。

「理沙、どうしたの?」

『お仕事お疲れ様。葉月は知らないと思つて教えてあげるわ。今日はね、琴乃と翔ちゃんはデートに行つてるの。遊園地デートだつて琴乃が張り切つていたわ』

ああ、なるほど。

それならこの朝から出でていく理由も分かる。

彼らは付き合いはじめてから何度もデートをしているようだ。恥ずかしがつてか、あまり私にはちゃんと話してくれないのが寂しい。

「そうなの。翔太も琴乃ちゃんをリードできるかしら?」

『うちの琴乃の方が翔ちゃんに激ラブだからねえ。琴乃も気難しい子だから愛想つかされないようにして欲しいわ』

「それはないわよ。だって、あの子は……」

『葉月の血縁の息子だから?』

「ふふっ。もうじやなくて、あの子、ヘタレだもん。今までも女子と付き合ひなんて全然なかつたんだから浮氣とかの心配はしなくていい。そんな度胸もないからね」

私達はお互に笑いあいながら、翔太のヘタレ話に盛り上がる。

『せめて、優しいって言ひてあげなさいよ』

「優しいのは認めるけど、ヘタレな性格を直してほしいとも思つてるので」

あの子は昔からそうだった。

慣れない女の子相手だと緊張してしまつ。

昔、仕事の都合で少しだけ理沙に彼を預けていた時期があつた時は、琴乃ちゃん達とうまくやれていたようだけじね。

『琴乃も大人しい子だから、翔ちゃんとは相性的にはいいはず。いい関係を続けてくれればいい』

「わうね。でも、付き合ひつて事は色々と問題もあつて大変なものよ。彼らも、これからたくさんいろんな経験をしていくわ」

『わうにうのも恋愛の「うちじやない?あー、若にうといいわよね。青春時代が懐かしい』

お互に泣きしごん昔になつてしまつた高校時代を思い出す。

『……そう言えれば、仕事を変えるって言つて聞いた話はどうなつたの？』

「ん？仕事を変えるんじゃなくて、仕事場が変わっただけ。隣街の私立病院で今は働いているわよ。給料面もよくなつてすいへやりがいがあるわ」

『ちよつと待ちなさい？確かに、あそこの今の院長って？』

やつぱりそこには反応するか、幼馴染相手には誤魔化しが効かないから辛い。

「まあ、それはそれで……ねえ？」

『あのねえ。「ねえ？」じゃないでしょ。思いつきり、葉月の元彼じゃない』

「あははっ、もう十数年も前の話だし、元彼なんて言葉は使わないわよ」

私は苦笑しながら、さつと片手で自分のバッグから手帳を取り出す。

そこに入っているのは色あせた写真が一枚。

まだ若い頃の私が男性に抱きつく形で幸せそうに笑っている写真だ。

相手の彼は佐々木信彦、まだ私が新人ナースだった時に初めて交際した男。

私より2歳ほど年上の彼も当時はまだ新米の医者でお互いに仕事を覚えるのが大変ながらも、付き合った1年間はとても楽しかったし、充実していた。

「信彦さんが院長として正式にあの病院を引き継いだりじいの。昔の縁である病院で働いてみないかって言われたのよ」

『……あのさあ、葉月。気を悪くしたら「めん。翔ちゃんの父親つてもしかして?』

「聞かないでよ。理沙の意地悪……」

理沙にもあの子の父親については語った事がない。ずっと未婚だった事も気にしてくれていたと思つ。彼女の言つとおり、翔太の父親は信彦さんだ……そもそも、ひとりしか交際したことないし。

この事実は誰にも言つた事がない。

『……そうだったの。でも、それならどうして? 彼と付き合つていたんじゃないの? 優しくて頼れる人だって当時もすぐ自慢してたじゃない』

「どうして、かな。きっと捨てられるのが怖かつたら……」

『そりや、相手は家柄も優秀なお医者さんだったけど、付き合つてたら話すべきだったんじゃないの? その言い方だと彼にも翔ちゃんの事を言つていのね?』

私は「ええ」と返事しながら、もう一度写真の方へと視線を向ける。

あの頃の私はとにかく、嫌われたくない事に必死だったんだ。

「今は向ひつも結婚している身よ。妻も子供もいるみたいだし、そ

れにもう何年も経つてゐる。そちらの関係の方は今さらよ

『葉月は今でも彼の事は好きなの?』

「……好きよ。好きな男の人の子供だから、私は翔太が大好きなんだもの。大切な息子として可愛いと思えるの。憎しみなんてあの人には抱いた事はないわ」

そして、自分が選んだ選択肢は間違いではなかつたと今も信じている。

あの時、じうじて身を引くことが一番正しかつたんだって。

『葉月はバカね』

「うわっ、あつさり言つてくれるじゃない。親友なのに冷たい」

『バカよ、本当に……。今まで事情を相談してくれなかつた事も含めてね』

理沙は親友だから話せない、そつと言つ事もある。

「葉月は幸せになるべきよ。いつまでも独り身でいるつもり? 翔ちゃんだけ独立する歳もそう遠くないんだから」

「それと同じセリフを翔太に言われたわ」

あの子も私の幸せを願つてくれている。

私のエゴイストな考え方で、翔太には片親と言つ苦労の生活を強いり、普通の子供が体験するような家族としての温もりも、人並みの幸せも与えてあげられなかつた。

それなのに、あの子は責めることなく、私の幸せを考えてくれた。母親として間違つていないつて、思わせてくれた事が何よりも嬉しかった。

『さすが翔ちゃん。ちゃんと葉月の息子として見てきているよ。さすが琴乃が見込んだ彼氏だけのことはあるわ。……佐々木さんの事はダメだとしても、相手くらいそろそろ見つけなさいよ』

「考えておくわ。私もまだ若い時に相手くらじ出会わないと後悔しそうなもの」

翔太が私を許してくれた事で、私も自分の事を考えられるようになってきた。

自分の人生はまだまだ長くてやり直せる。

彼がそう私に思わせてくれたんだ。

私が翔太を身籠つたのは21歳の時だ。

ちょうど1年前に私はある人に出会つた。

憧れていた看護師の仕事を目指して、専門学校を卒業し、新米ナースとして仕事に追われる日々を過ごしていた。

ある日、私は仕事である経験をして、休憩室でお茶を飲んでいた。缶の紅茶を手に持ちながら私はうなだれていたんだ。

「どうかしたのか？」

私に声をかけてきたのは若い男の医者。

「こんな場所で泣いて……何かあったのかい？」

泣いている、と彼に言われて初めて気づいた。

私の頬をゆっくりと伝う涙に。

白衣に身を包んだ彼は私にハンカチを差し出す。

私はそれを受け取つて溢れ出る涙をぬぐう。

「すみません……うつ……」

泣いているところを人に見られた事は恥ずかしいけど、それ以上に辛かつた。

「よければ話をしてくれ。僕も研修医で新人だけど話くらいなら聞いてあげられる」

私は先ほど、起きたばかりの話を彼にしていた。

つい先日まで私はひとりの少女の看護の世話を担当していた。その子は5日ほど前に交通事故で運ばれてきたまだ幼い少女。彼女は最初こそ、足を骨折していただけで命の別状がないと判断されていた。

早く退院して、友達とお話をしたい、遊びたいと楽しそうに私は笑顔を見せていた。

だけど、昨日になつて容体が急変、意識不明になり、今朝方、急死してしまったのだ。

交通事故に会つた時に頭を打つており、後からになつて命を落とす事態の悪化を招いた。

「私も早く異変に気付けていればあの子を救えたかも知れない。そう思つたら、私はすぐ悔しくて、悲しくて、無力でした」

あの子の笑顔が忘れられない。

笑顔を救えなかつた事の後悔が私を苛んでいた。

「人の生き死に関わるのがこの仕事です。分かつてはいるんですよ。ひとつひとつの事に落ち込み続けてはいけない事くらい。それでも、私は……救つてあげたかった。私、この仕事を続けていいのか、自信をなくしてしまつて……」

「キミは看護師だ。救えなかつた事を悔やむ気持ちは分かる。綺麗事や理想、安易な奇跡はこの病院という世界にはない。現実にあるのは理不尽な辛い物も多い」

夢を見てきた看護師という職業はあまりにも辛くて、大変なのだとと思い知らされている。

「けれど、キミや僕らは多くの患者を救う事もできる。それを忘れてはいけないよ。キミは無力だと言つたが、これから先、キミも多くの人を救う事になる。もちろん、救えない人もいるだろう。だからと言って、諦めてしまえばそれで終わりだ」

彼はそつと私の頭を撫でる。

その手の温もりに私は心を動かされていた。

「……救えなかつた命は確かに辛い。全ての人を救う事はできない。この職業は人の命と関わる大変仕事だ。それでも、僕らには僕らの出来る事があるはずなんだ。心に整理をつけて、キミは前を向いてくれ」

私は頷くと彼は「今は辛いだろうけど、いい看護師になれるよう頑張ってくれ」と、彼は私を励ましてくれた。

私がしなくちゃいけないのは落ち込み続ける事じゃない。
あの子のような子供を一度と出さないように、私もしっかりと仕事をしなくちゃいけないんだ。

そのまま立ち去るうとする彼、私は彼のハンカチを握りしめていた。

「あ、あの、このハンカチ。洗つてお返します。お名前を教えてもらえますか？」

「佐々木信彦。この病院で今は外科の研修医をしてい

「私は井上葉月です。また近い方に届けますから」

彼は微笑を浮かべて頷いてくれた。

私と彼の出会いはここから始まつたんだ。

第31章・愛ゆえに『後編』（前書き）

葉月視点です。

【SIDE・井上葉月】

18年前の出会い、私と信彦さんの関係。

「信彦さんはどうして医者になつたんですか？」

医者である信彦さんと出会つてから、私達は何度か話をしても、やがて、惹かれあつて付き合い始めたことになった。

恋人になってから数ヶ月。

まだどちらも新人なので大変だけど、お互にいい感じに癒し合つている。

今日は彼が食事に連れてきてくれて、レストランで食事をしていった。

「……ん、僕かい？僕は親も祖父も、代々、医者の家系だからね。自然な成り行きで、なつている所はある。もちろん、人の命を救いたいと言つ信念はちゃんと持つている」

「それじゃ、将来的には御実家の病院を継ぐんですか？」

「そう言つ事になるかな。それまでは、いろんな場所で経験を積みたいと思っている。葉月はどうして看護婦に？」

「私は……」

思わず、そこで言葉がつまってしまう。

けれど、彼相手に隠す事もしたくないので正直に答えた。

「私、実親と仲が悪いんですよ」

「そうなのか?」

「はい……その、親は再婚していて、義父の方との折り合いが悪くて、実家には居づらくて……。就職したいと思つて選んだ道が看護婦なんです。元々興味はありましたけど、長く続けられる仕事を考えてそう思いました」

「そうか。だが、大変な仕事を選んだな。夜勤も続くし、不規則で大変だろ?」

私は頷きながらも「やりがいのある仕事ですから」と言葉を返した。

実家から逃げだすように私はこの道を選んだ。

それでも、人の命にかかる仕事の責任感とやりがいは選んでよかつたと思っている。

「あつ……」

彼は私を抱きしめてくれる。

「僕達はまだまだ未熟だ。仕事を頑張らないとな」

「……はいっ」

彼を恋人として慕い、仕事の仲間としても信頼していた。恋人でいる事に幸せを抱き続けていた。

だけど、それはタイミングが悪い時期に重なつて起きてしまった。私が妊娠の事実に気づいたのは彼と付き合い始めて1年が経つた頃。

ちょうど、友人の理沙が妊娠したと話をしていたので、私も気にしていた。

いつかは私も子供ができる、家庭を持つかもしれない、と。それが思わず形で私に現実を突きつける。

異変を感じて調べてもらつたら案の定、私は妊娠をしていた。この妊娠の事を彼に相談するかどうか、悩んでいた。

信彦さんはここ最近、とても忙しくほとんど会えてない。噂では別の病院に移ると言う話もあり、私は不安だつた。

彼はこれからも出世する人間で、私なんかが一緒ににはなれない。そういう意味合いの話を先日、彼の母親からされてショックを受けていたのに、この事実が判明して以来、私は夜も眠れない日が続いていた。

その時は信彦さんは気にしないでいいと慰めてくれたけど、意識する程に辛くなる。

私はどうすればいいの？

どうしたいのか、それは当然、彼と結婚して彼の子供を産み育てたい。

だけど、それは望みたくても望めない。
現実という壁が邪魔をする。

私と彼では立場が違すぎるから。

それに信彦さんには夢もあり、ここで私が邪魔をしちゃいけないと思った。

「……久しぶりだな、葉月。今まで、中々連絡もできずにすまなか

つた

久々に彼に呼び出された私は夜景の綺麗な高台の公園にきていた。初めは綺麗だと思っていた夜景。だけど、彼と話をしていくにつれ寂しさが胸に込み上げてくる。

「信彦さん。話があるって何ですか？」

「……葉月。聞いて欲しい。僕は、病院を変わることになった」

やはり、噂通りだつたらしい。

この仕事で大変なのは病院を変わつたりする事がよくあること。看護師ではそれほどないけれど、医師の場合には本当によくある話。特に彼は今年で研修医も終わり、ちゃんとした医者としての仕事が始まる。

「そ、そりなんですか」

「今度、行く病院は他県なんだ。でも、葉月との関係は続けたい。僕はキミが好きだ。その気持ちは変わらない、遠距離になるけれど付き合い続けてくれないか？」

信彦さんの言葉は嬉しい、私を想ってくれているからその想いに応えたい。

でも、ダメなの……私はもう、付き合えない。

「…………めんなさい」

私の言葉に彼は動搖する。

「葉月……？」

「ダメですよ。その、私も信彦さんの事が好きです、大好きです。でも、これから先、信彦さんの事を考えれば私は……」

彼との交際を自分から終わらせるなんてしたくないの。今すぐにでも、私は彼に言いたかった。

貴方との子供ができるんだって。

「この前の母の事は忘れてくれ。あんなひどい言葉を言つなんて思つていなくて、キミを傷つけてしまった。すまない」

「仕方ないですよ。信彦さんの立場を思えば、お母さんの言つ事はもつともです」

「立場なんて関係ない。僕は葉月と一緒にいたいんだよ? 考え直してくれないか? 出来る限り、時間だって作るから」

信彦さんは私の手に触れて説得してくれる。

私だつて別れたくない。
ずっと、貴方の傍にいたい……。

「……いい機会なんだと思います。私達の関係を終えるために。信彦さんのためですよ」

頬を伝づのは冷たい涙。

私は真実を隠し続けて、彼との別れを決意する。

今の私は彼の将来を考えれば足かせになってしまつ。

彼の事を思えばここで身を引いた方が良いに決まつていてる。

「なぜだ、葉月……？僕のためにビリコウだと。キミがいれば、
僕は」

「お願いですから、これ以上、私を苦しめないでください。私が本音で貴方を嫌つてゐるわけがない。一緒にいたいです。それでも、私は貴方のために何もしてあげられません……」

好きなのに別れなくちゃいけない、そんな理不尽はない。それにこのお腹にいる子を考えても、信彦さんと離れてしまつ事は大きな不安だ。

それでも、どんなに考えても、悩んでも、私には彼と別れる以外の選択肢を選ぶ事なんてできなかつたの……。

夢を抱く彼のために、私が出来る事はひとつしかなかつた。

もしも、私が今ここで子供がいると話せば彼はビリコウ反応を見せるか。

彼は子供を堕ろせと言つ人間ではない。

責任を持つ形で私を支えてくれるに違ひない、それは分かつていた。

そこに不安はなくとも、私の不安は私自身の問題だ。

「好きか嫌いか、そんな単純な理由で好きでい続けられたらどんなに幸せだったか……信彦さんは私にとっては立場が違います。同じ立場には絶対に立てませんから」

代々続く医者の名家のお金持ち。

次世代を担うと期待されている医者としての未来も潰せない。

「葉月……キミを僕は苦しめていたのか？」

私は涙を流しながら彼の手を離す。

言わなくちゃいけない、私は自分の口から別れの言葉を言わないといけないんだ。

「……さよなら、信彦さん。貴方と付き合えて、私は幸せでしたよ

最後は頑張つて笑おうとしたけど、やつぱり泣いてしまった。
涙ぐんだ瞳で見つめた彼は何とも言えない顔をして沈みきついた。

ごめんなさい、信彦さん。

私は胸の痛みに耐えながら彼との別れを受け止めようとしていた。

それから数ヶ月後、彼は病院を去り、私も出産のために病院をひとまずやめた。

だから、下手な噂にならずに済んだと思つ。

あのまま病院にいれば、遠くの彼にも子供の話が届くかもしだい。

その後、産まれてきた翔太を私はひとりで育て続けていた。

大切な人との子供、私にとつては彼との絆だ。

不仲だった両親はシングルマザーの道を選んだ私を責めたけれども、出産費用の資金を援助してくれたりして不安定な生活を続ける私を支えてくれた。

翔太には悪い事をし続けてきたと思う。

楽ではない暮らしを強いけり、我が傭すら聞いてあげられない。親としては最低な自分を私は責めていた。

そんな私の葛藤をよそに翔太は良い息子に育つてくれていた。彼が3歳になつた頃に、私は再び看護師の道を進んでいた。

新しい病院に採用されて忙しいながらも、翔太との二人暮らしを

続けていた。

けれど、彼が8歳の小学2年の夏。

私は病院を移り変わる事になり、しばらくの間、慌ただしくなるために翔太を親友の理沙に預ける事にした。

その時、彼は初めて家族の温もりと言つモノに触れたんだろう。理沙からもらった息子の写真は楽しそうな笑顔を浮かべていた。彼を迎えた時は、私に抱きついて嬉しそうに笑つてくれた子供の顔が今でも忘れられない。

この子には普通に両親がいて、家族のいる生活をさせてあげられない。

そんな自分のふがいなさと翔太への罪悪感に胸を締め付けられた。信彦さんとはアレ以来、何度か合う事はあつたけれど翔太の事は話せずにいる。

本当の話をできるわけがなかつた。

信彦さんと別れた事が正しかつたのは証明されていた。

彼は身分のいい女性と結婚して、勤め先の病院でも出世しており、順調に名前も有名になり、名医として評価されていた。

今になつて隠し子がいたなんて到底話せるわけもない。

時は早いモノで十数年も経ち、翔太も高校2年生になつた。

少しヘタレ気味だけど、優しい子だし、最近は恋人もできた。

どこかで反抗期を迎えて、捻くれることもなく真っすぐに育つてくれたのが嬉しい。

父親の事はちゃんと話せてはいなければ、いずれは向き合わなくちゃいけない。

信彦さんの関係も、再び同じ病院に勤務する事になつたりして私自身にも変化が起き始めている。

“過去”を受け止めなくちゃいけない時が来ているような気がしていたの。

第31章・愛ゆえに『後編』（後書き）

次回からは新展開です。琴乃のつき続けている嘘。その真実が明らかに……。

【SIDE・井上翔太】

「ゴールデンウィークと言う事もあり、遊園地は子供連れやカップルで賑わっている。

俺達もその中のひと組であり、デートを楽しんでいた。

「……ほんの数週間前にはありえなかつたんだよな」

俺に恋人ができる、一緒にデートするとは夢の世界の出来事のような気がしていた。

恋人がいなかつた昔はよく恋人がいる奴らを妬んでいたものだ。琴乃ちゃんは「まず最初はどこにしましょ?」とパンフレットを見ている。

俺にとつてはちゃんと遊園地を楽しむのはかなり久々なので正直、どこでもいい。

「……でも今日の俺は楽しめそつだから。

「……雨は夜に降るって話だつたか」

空を見上げるとお日様が照りしているが、遠くの方に暗い雨雲が見える。

夕方までは天氣が持つが、その後は豪雨らしい。

「天氣が崩れない事を祈るしかないな」

俺はそう呟いて琴乃ちゃんに声をかける。

「どうにかするか決ました……？」

「はい、まずは一番最初なので軽めのものこしましょい」

「おっ、いいねえ。それで軽めの奴って？」

「ウォータースライダーです」

……はい、なんですか、それ？

いかんな、無知とは恥ずかしいものだ。

いくら俺が遊園地という物に対しても全然知らないても、ここに尋ね返すのは恥ずかしい。

ウォーター、例えば水。

スライダーということは野球の球種か？

勝手な想像を組み合わせた結果、水絡みの何かというイメージが浮かぶ。

気楽な感じで俺はウォータースライダーに乗り込んだのだが……。

「ぐあーっー？」

水の上を船のようなものが急加速して突っ込み、曲がりくねりを繰り返して最後は滝からダイブというスリル溢れる絶叫系。

予想してなかつた展開であり、俺にとつては心の準備ができていなくて大変だった。

ウォータースライダー終了後、何とか無事に帰れた俺はフラつきながら、

「ゆ、遊園地の初心者には少々辛いものだつたな。琴乃ちゃん、出来れば次からはどういうものなのか、説明を求む」

「あははっ。」めぐらしく、わざと最初に選びました

ガーンっ、琴乃ちゃんに遊ばれている！？

「だって、何も知らない先輩の反応が可愛くて」

「可愛さなんていらないから。俺、怖いの苦手だから」

「そういう事言つと、つい意地悪したくなりますよ？」

今日は立場逆転、琴乃ちゃんのペースに乗せられた。いつもなると、俺は身を任せられない。

「そうですね、次はアレを行きます」

「アレって何？」

「アレはアレですよ。まあ、行きましょうっ！」

琴乃ちゃんは俺の手を取り、楽しそうに笑う彼女。女の子の手つてどうしてこんなに小さいんだろ。手を繋ぐだけで幸せになれる。

そんな俺の些細な幸せをぶち壊すように、琴乃ちゃんが連れてきたアレと言つ正体が明らかになるわけだが……。

廃病院風の建物が怖々と俺達を誘つてやがるぜ。

アレ＝お化け屋敷。

……琴乃ちゃんも俺の苦手分野ばかりをチョイスしてくれた。

「…………デスか？」

「「」ですよ？先輩は「」ーー「」のがダメでしたっけ？」

「いえ、全然問題はナイデスヨ」

声を上擦らせながら俺は答える。

彼女は俺の内心の怯えを知つてか知らずか、

「そうですね。こんな子供騙しの作り物、全然怖くありませんよね？」

「そ、そりゃそうだろ？あははっ、怖くないって……わあ、行こうか

に、逃げ場がないーっ！」

追い込まれた俺は仕方なくお化け屋敷に突入する事になる。

廃病院を舞台にしたお化け屋敷なんて雰囲気だけさ。

とか思ついたらリアリティー溢れる人形や人の演出が続出。次々と恐怖が俺達を襲つてきやがる。

しかも、俺は暗くて狭い場所は過去のトラウマで大嫌いなのでもはやノックダウン寸前。

「大丈夫ですか？顔色悪いですけど？途中でリタイアします？」

琴乃ちゃんは全然、怖がつておらずむしろ楽しそうにしている。

「の子はこういうのが得意なのだろうか？」

「ーん、女の子って見た目のイメージと違う時があるから怖い。

「怖いなら怖いと認めたらいいんです。先輩、意地なんて張らないでください」

「意地を見せなきやいけない時があるんだよ、男の子にはね

「くすつ。先輩、台詞はカツコいいんですけど、真っ青な顔色で言わ
れても……」

薄暗いこの場所で顔色までは分からないのでからかわれているだけだ。

実際に恐怖で何かなりそうだが……。

ちくしょう、男として情けなさすぎる。

「それじゃ、私は怖いのでリードしてください」

嘘だ、めっちゃ楽しんでいたくせに、怖いわけない！？
琴乃ちゃんの意外な一面、この子、意外とVだ……。

その後もお化け屋敷の恐怖と悪戯をしかけてくる琴乃ちゃんのダ
ブルアタックに俺は散々な目にあわされることになる。
「うぎゃー……ガクッ。

お化け屋敷にすっかりと力を奪われた俺は、その後も絶叫系のジ
エットコースターに敗北してぐつたりとうなだれていた。
重力を断ち切られたような激しいアップダウン。
加速するコースターを前に人間は何とも無力なのだろう。
食事もかねてベンチで一休みの俺は呆然としていた。
もうダメです、俺の最後は今日かもしれない。
ただ今の俺は口から魂が抜けそうなイメージ。

「せ、先輩？ホントに大丈夫ですか？」

さすがに俺の顔色の悪さに琴乃ちゃんも焦る。

「翔太先輩。私、少し調子に乗つてました。先輩が遊園地、初めてなのに、『怖い物』がダメなの知つていたのに」

グサツと地味に傷つけないでくれ。

「……琴乃ちゃんって案外、意地悪つ子だつたんだな」

「うう。そ、それは……先輩の反応が可愛いからつけてやつかも言いました」

「琴乃ちゃん。うひちこきてくれ」

俺は?と不思議そうな顔をする彼女をぎゅっと抱きしめる。

「せ、先輩……?」

「ういう場所だ、誰かに見られても雰囲気的に悪くないだり。俺は遠慮することなく琴乃ちゃんの温もりを感じる。俺の腕の中で大人しくしている彼女。

「うひしてるとか」く安心できる

「……先輩、怒つてます?」

「怒らないよ。琴乃ちゃんの事、俺が嫌うはずがない」

軽い悪ふざけ程度、誰でもすることだ。

それに琴乃ちゃんが俺にしてくると重い事は心を許してくれている証拠だ。

初めは互いに距離を取りあつていた気がするけど、今は本当に距離も近い。

「俺さ、暗い所、全然ダメなんだよな

「……え？」

「つい最近、麻由美に聞いたんだけど、俺つて鈴音つて子と一緒に幽霊屋敷に閉じ込められてた事があるって話を聞いた。それ絡みらしいんだけど」

「あの事件で……」「めんなさい、先輩。そうとも知らずに私は……

シヨンッとしてしまつ彼女、俺は抱きしめ続けながら言葉を紡ぐ。

「気にしなくていいよ。俺もいつまでも暗闇を恐れちゃいけないしあのさ、琴乃ちゃん。ついでだから、聞いてもいいかな？」

「はい。何ですか？」

「鈴音つて誰なのかな？」

俺がずっと気になつていた相手。

もうひとりの幼馴染、鈴音。

ずっと彼女の存在が気になっていた。

麻由美は、ゴールデンウィークになれば会えると言つていた。

今はどこか別の場所にいるらしい。

「……鈴音、ですか？」

「話しかけていいのなら聞かないけど？」

「別に話しかけではありませんよ。だって、鈴音は私の……」

「もしかして、琴乃ちゃんの“妹”？」

俺の言葉に彼女は黙り込んで、やがて静かに頷いた。

「そうなんだ。なるほど、そう言う事か」

それなら今までの過去の話にもつじつまが合ひ。
琴乃ちゃんの妹、鈴音……。

『翔お兄ちゃん』

大人しくて物静かだった鈴音の事を思いだす。

「あ、あの、私……」

「どうしたの、琴乃ちゃん？」

「……いえ、何でもないです」

琴乃ちゃんは何か言つのをやめてしまつ。

まだ、この話題はどうしても彼女の表情を暗くさせてしまつ。
琴乃ちゃんは妹とは不仲なのか？

「そろそろ、俺も復活してきたから、次のアトラクションへ行こう

か。出来れば大人しい奴を希望するよ。激しいのは苦手だ

「……」「とは、メリーゴーランドですか？」

「……そのまま子様レベルにしなくていい。普通でお願いします」

俺達はそう言つて笑いあう。

例え、彼女が何かを隠していたとしても俺はどんな真実でも受け入れる。

俺が琴乃ちゃんを愛していると言つた事実には微塵の揺りぎりもないから。

第33章・キス、時々、嵐《後編》

【SIDE・井上翔太】

……。

小学2年の夏、俺はいつだつて琴乃ちゃんと一緒だつた。遊びに連れていく彼女、明るくて元気な彼女に翻弄される毎日。それが楽しくて、俺もいつも彼女の後ろを追つていた。

「翔ちゃんっ。ねえ、見て。大きなセミを捕まえたの」

相変わらず、彼女は虫を素手でつかんで遊んでいた。

「ミーン」と鳴くセミが可哀想で俺は逃がしてあげるよつて言ひ。

「えーっ。せっかく捕まえたのに?でも、いいや。翔ちゃんがそう言つなら、逃がしてあげる。セミも短い命で夏を楽ししまなきやいけないものね」

セミを空へと放り投げて逃がす彼女。

「そうだ。“鈴音”と“麻由美”を連れて幽霊屋敷に行かない?」「幽霊屋敷って何?」

「向こうの方にある大きなお屋敷。ずっと前から荒れていで、皆から幽霊屋敷って言われているの。ほら、探検に行くよ」

琴乃ちゃんに連れられた俺は途中で麻由美と鈴音を誘い、問題の幽霊屋敷に行く事に。

十五 お屋敷、それほど見ても怖い。

「 」「 なんだ？」

思いいつきつ雰囲気が出ていて俺は足がすくむ。

「 ちゃんと懐中電灯も持ってきたから行くよ」

「 ……やめておいた方がいいよ、お姉ちゃん」

鈴音が声を震わせて琴乃ちゃんを止める。
けれど、彼女は「行くと決めたら行くの」 と俺達に有無を言わ
せない。

「 琴乃ちゃんって怖いものはないの？」

「 ん？ そうねえ、怖いのは幽霊とか虫とかは問題ないよ。本当に怖
いのは……」

「 怖いのは？」

「 私のお母さん。すぐに怒るから怖いの。お母さん以外は怖くない」

苦笑いをする琴乃ちゃんに俺は「理沙おばさんか」と思わず納得
してしまっていた。

の人ならばしょうがない、ホントに怒ると鬼ように怖い。

「 鈴音は怖いものあるか？」

「 私は……暗い所が嫌い。虫も、大嫌い……」

「鈴音は怖がりだもの。虫とかホントに嫌いよね？」

「だ、だつて、あんなに気持ち悪い恰好してるんだもん。誰だつて怖いよ」

鈴音がそう言つて怖がるのに琴乃ちゃんは平氣な顔をしていた。
姉妹でもこれだけ差があるんだな。

「ほら、翔太くんっ。鈴音もこいつちやんも早く行こうよ～っ」

麻由美は麻由美で乗り気になつて鈴音の背中を押して屋敷内に入
る。

薄暗くてほこりっぽい屋敷、そこで何が待ち受けていたのか。
その時の俺達はまだ知る由もなかつた。

……。

ハツと意識を取り戻した俺は気がつけば夕焼けの空の下にいた。
隣を歩いていた琴乃ちゃんは少し疲れた様子だ。

「先輩？ 次は最後です。観覧車ですよ？」

「あ、ああ……」

どうやら、その前のジョットロースター（本日3回目）で意識を失つていたらしい。

まったく持つて遊園地とは怖い所である。

「琴乃ちゃんに怖い物はないのか？」

「はい？ 私ですか？……ありますよ、怖い物ぐらー」

「やうなのか？」

俺の記憶では琴乃ちゃんにはそういうもの、なさそうだったが。

「ええ。昔は暗いところも大嫌いだったんです。でも、いつからか大丈夫になつたんですね。それでも、今でも嫌いなモノはあります」

「……例えば？」

“虫”です。虫だけは今でも全然ダメなんですよ。気持ち悪くて触れません

俺はその言葉にどこか引っかかりを感じていた。

琴乃ちゃんは虫が嫌い？

むしろ、得意だったような気が……俺の記憶違いか？

「ほら、そんなことより、並びましょう。この観覧車で今日のデートも最後なんですから。最後はちゃんと楽しみましょう」

「ああ、やうだな。さすがに観覧車は重力を断ち切られる事もない

「……観覧車でそんなプレイがあつたら、ある意味、怖すぎますよ
ね」

俺はそれ以上、深くは考えずに田の前の現実を楽しむ。

後にして思えども、色々と考えておくべきだったのかもしれない。

現実の田で見てきた琴乃ちやんと、過去の記憶の琴乃ちやん。

少しずつずれていく、矛盾を持った記憶。

「……違ひ、何か違う?」

違和感を抱きつつも、俺にはそれを否定できる明確な確信があるわけではない。

俺達の番がやってきて観覧車に乗りこむ。

徐々に上へと上がって行く観覧車。

「あっ、すみません。電話です」

彼女は携帯電話にかかつてきた電話に出る。

「お母さん? びひしたの?え?」

びひやひ電話相手は理沙おばさんとのようだ。

「あ、うん.....分かった。翔太先輩、つちの母が代わって欲しいこと言つてます」

「理沙おばさんが?」

俺が電話を代わると理沙おばさんがいつもの明るい声で言つ。

『デート中にじめんな、翔ちゃん。今日は帰りはまつちよつじ飯を食べて行つてと言つお誘いなの。翔ちゃんが琴乃をホテルでも連れ込む予定があるなら別だけど』

「……本田はそのような予定はありませんから」

『やうなの？全然、全く娘の身体に興味なし？それはそれでどうと思つわ』

「琴乃ちゃんの意思を俺は尊重してるので。とにかく話は分かりました」

俺は理沙おばさんに変な突っ込みをされたくないので電話を切る。今日は俺も家に母さんがいるのでその旨を伝えておく。

「ユリから眺めるのって綺麗ですよね」

「そうだな。俺は遊園地は平和なアトラクションが好きだ」

「ぐすつ。先輩、今日は楽しめましたか？」

「まあ。何だから楽しかったのは事実だ」

それは遊園地のアトラクションもあるが、琴乃ちゃんと一緒だったのが楽しかった。

やっぱり、彼女とのトーントー最高です。

「……遊園地って知らない事ばかりで驚いたよ」

本当に小さな頃に来た以来だったので、ジオラム「スターとかあんなにすごいとは思わなかつたのだ。

「今日はありがとうございました、琴乃ちゃん」

「無理をさせてしまつたんじゃないかって、思いました」

「大変ではあつたけど、楽しかったよ」

狭い室内、観覧車つて特別な感じがする。

「……先輩、私のこと、好きですか？」

それはちょうど観覧車が頂上付近にたどり着いた頃のこと。
琴乃ちゃんは俺に尋ねると真っすぐに可愛い瞳をこちらに向ける。

「大好きだよ」

ふたりつきりなので恥ずかしさなどもなく言い切る。

「私も大好きですよ。ずっと昔から好きです」

「琴乃ちゃん……？」

いつもと違う雰囲気の琴乃ちゃん。

それは彼女なりの覚悟があつたのかもしれない。

「先輩。私は先輩にずっと嘘をついてきたんです」

「嘘……？それはどういつ嘘なんだ？」

「それは……それ、は……」

彼女は言葉を詰まらせる。

今にも泣きそうな顔をしながら俺に向かを言おうとする。

「無理しなくていいよ、琴乃ちゃん」

「ダメなんです。本當はもうずっと前に会つた時から言わなくちゃいけなかつたのに。私はするべくと言えませんでした。このまま先も私は先輩をだまし続ける事が辛くて、嫌われてもいいから眞実を言った方がいいって……」

彼女が嘘をついている。

それは一体、何なのか？

けれど、俺は涙を流しそうになる彼女を抱きしめてしまった。

「例え、キミが何の嘘をついていても嫌いになる事はない。それは安心してもいいから。それだけは俺を信じて欲しい」

「翔太、先輩っ」

「無理して言わなくていいよ。琴乃ちゃんが話せるようになつたら言つて欲しい。その時は俺も話をちゃんと聞くから」

彼女の覚悟を押しつぶすような気がしたけれども、こんなにも震えている彼女に無理をさせて言わせることがじやな気がした。ふたりで観覧車から眺めた赤く染まる空。

「先輩……『めんなさい』……」

俺たちはキスをかわす、観覧車が下へとつづくまでの間……。琴乃ちゃんを守りたい、どんな嘘でも受け止めるつもりでいた。だけど、彼女のついた嘘が俺達の関係そのものに影響していたな

んて思わなかつた。

理沙おばさんの誘いで俺は“デートの帰りに彼女の家に寄る事になつた

一応は恋人の母親と言う事で対応にはいささか困る。
琴乃ちゃんは家に向かうにつれて無言になつていぐ。
何かがあるのかな、と思いながらもそれを聞けずにいた。
俺達が玄関の前に立ち、扉を開いたその時。

「あつ、おかえりなさい」

明るい声で出迎えてくれたのはひとりの美少女。
俺は一目で分かつてしまつた。

目の前にいた女の子が“誰”なのか。

淡いブラウンの髪が印象的な彼女は俺に満面の笑みを見せる。

「久しぶりだね、“翔ちゃん”。10年ぶりかな、ずっと会いつかつたよ」

「まさか……鈴音、なのか？」

「そうだよ。鈴音でーす。ホントに久しぶりだよね」

明るい笑顔で微笑む鈴音。

もうひとりの幼馴染、鈴音との再会は“琴乃ちゃん”との“別れ”を意味していた。

第34章・嘘がバレる時

【SIDE・井上翔太】

俺は一目で分かつてしまつた。

目の前にいた女の子が“誰”なのか。

淡いブラウンの髪が印象的な彼女は俺に満面の笑みを見せる。

「久しぶりだね、『翔ちゃん』。10年ぶりかな、ずっと会いたかったよ」

「まさか……鈴音、なのか？」

「」の女の子が鈴音、ずっと俺が思いだせなかつた彼女。

「そうだよ、鈴音でーす。」うして会うの、本当に久しぶり

俺と対面する鈴音、それに動搖を示したのは琴乃ちゃんだった。顔を青ざめさせて、何も言わずに家の中へと入つてしまつ。

「あ、琴乃ちゃん……？」

「せっかく琴乃にも何ヶ月かぶりに会うのに。まあ、いいや。ほら、早く家に入つて。懐かしい話も色々としたいもの」

俺の想像と違う鈴音の姿に戸惑う。

この子は、こんな子だつただろうか。

違う、何かが違う。

リビングに通されると料理の準備をする理沙おばさんがいた。

「翔ちゃん、おかれり。琴乃とのデートは楽しかった?」

「ええ、それはいんですが……」

「懐かしいでしょ? 今日は鈴音も寮から帰つて来たのよ」

全寮制の学校に通つていると行つていた。

だけど、それ以上に俺の違和感の正体が俺は知りたい。ソファーに座りながら、俺は鈴音を見つめる。

「ホント、10年ぶりって長じよね。翔ちゃんも身長も高くなつて、成長してるし」

「……鈴音も綺麗になつたと想ひよ」

「あははは。ありがと。でも、琴乃と付き合つてゐんだつて? 聞いた時には、ちょっとびっくりした。翔ちゃんがまさか“妹”と付き合つなんてね。琴乃の方が先に彼氏ができるなんて思つてもなかつたわ」

違和感が納得に変わる。

彼女が俺を“翔お兄ちゃん”と呼ばずに“翔ちゃん”と呼ぶワケも。

ずっと鈴音は琴乃の妹だと想つていたのに、姉であるという事実も……。

「あ、あのそ、鈴音つてもしかして、俺と同じ年?」

「え? そうだよ、高校2年生。何? そんな事も忘れちゃつた?」

「もうひとつだけ。琴乃ちゃんって、昔は俺の事を何て呼んでいた……？」

「普通に“翔お兄ちゃん”。だって、年下だし、あの子つてばすぐ控えめな子だつたけど、翔ちゃんに懐いてたもの。私の妹ながらお淑やかで大人しいもんね」

……ずっとトゲのよう突き刺さつていた違和感の正体。それは俺が間違えていたといつ現実。

どうしても、鈴音を思い出せなかつた理由。

それは当然のことだ、俺が彼女と琴乃ちゃんを認識として間違えていたから。

俺が琴乃ちゃんと思つていた明るい女の子が鈴音だつた。逆に鈴音だと思つっていた大人しい女の子、琴乃ちゃんだつたんだ。

記憶違い、思い出み。

だから、思い出せない、思い出せるはずがない。

「あつ、私、翔ちゃんに謝らないといけないんだ。昔、いつかまた会おうつて約束してたけど、中々会えずにしてしまったんだよ？」

小さな頃に約束をしていた。

『会えなくても、私から会いに行くから』

その約束相手が鈴音だつた。

間違いない、俺はずつと思い違いをしていたんだ……。

これまで琴乃ちゃんと接してきた抱いてきた違和感の数々。そして、琴乃ちゃんがついていと言つていた嘘のこと。

あの子が時々見せていた悲しみの表情の意味。

すべてが俺に衝撃と言つ形を持つて、驚きを『える。

俺は動搖しながらも、不思議そうな顔をする鈴音と会話を続ける。麻由美が言つていた通り、俺が昔にとても仲が良かつたのは鈴音だ。

彼女の妹であり、大人しい女の子の方が琴乃ちゃんだつたのだから。

頭がものすごく混乱している。

けれども、これまで思いだせなかつた事が思い出していく。

「そうそう、それで翔ちゃんと私が幽霊屋敷で行方不明になつちやつたんだよね。あとですっごく皆に怒られたんだから」

「……鈴音と一緒に地下に閉じ込められたんだよな？」

「うん。重い扉が閉じちゃつて真つ暗中でふたりでずつと一緒にいたの。泣いやいそうな私を励ましてくれたんだよ。それが嬉しかつたし、安心できたもの。あの時は本当に怖かつたよね」

懐かしい話を彼女から聞くたびに、俺は過去を思い出していく。

「そう言えば、琴乃と翔ちゃんつてどこので知り合つたの？」

「学校だよ。同じ学校だつたから偶然にも再会して、すぐに琴乃ちゃんに告白されたんだ。向こうはそれ以前に俺の事を知つてたらしこれど、俺にとつては急でびっくりした。いきなり可愛い子に告白されたつてな」

「あははっ。そつなの？琴乃らしいね」

話が弾んでいると、理沙おばさんが料理ができると料理を運んでくれる。

「お待たせ～つ。あれ？ふたりだけ？琴乃はどうしたの？」

「そう言えば、帰ってきてから全然出てこないね。あの子、様子も変だつたし何かあったのかな？」

「翔ちゃん、呼んできしよ。」」飯だって。部屋の場所は分かるわよ
ね

「あ、はい。それじゃ、呼んできます」

さうは言つたけども、俺はどんな顔をして彼女に会えればいいのか分からぬ。

俺が悪いんだよな、最初に琴乃ちゃんと鈴音を勘違いしてしまつたから。

俺はずっと彼女を傷つけてきたんだろう。

思い出せば思い出すたびに彼女は俺に嘘うそつこうメッセージージを伝えようとしていた。

「琴乃ちゃん、俺だよ」

部屋をノックするけども、返事はない。

「あれ？琴乃ちゃん？」

何度、ノックしても返事はなくて。

「入るよ、琴乃ちゃん」

俺はそつとドアノブを回して部屋に入るけど、そこに止マートの時に使っていたバッグが置かれていただけで誰もいなかつた。

「……携帯もあるし、どこに行つたんだ？」

机の上に置かれていた彼女の携帯電話。

窓の外を見ると暗い夜に雨が降り始めていた。

「思つた通りに天気が崩れてきたな」

今日はこのまま雨が降り続くと聞いている。
デートの時じゃなくて本当によかつた。

「それにしても、琴乃ちゃんはどうしているんだ？」

俺は不思議に思いながら部屋のドアを閉じて立ち去る。
リビングにいる鈴音とおばさんに琴乃ちゃんがいない事を伝える。

「え？ 琴乃、いないの？」

「……ちゅうと待つていて」

鈴音が確認していくと、ビーナスラッシュもなかつたようだ。

「おかしいなあ。でも、話をしている時に廊下は誰も通つていないよね？あの子の部屋から外に出るには絶対にここを通らないといけないのにどうやって外に出たの？」

廊下に出て確認すると、俺達はある事に気がつく。

裏の方にある扉のカギが開いていたのだ。

「ミリを出すためにあるドアでここからも外へ出でこける。

「なるほど、ここから出て行ったのか。……それで、何あの子が逃げ出すわけ？」

理沙おばさんと尋ねられて、俺はこれまでの事を正直に話す事にした。

夕食を食べながら、彼女達には琴乃ちゃんについていた嘘について話す。

俺がずっと琴乃ちゃんだと思っていたのは鈴音だったこと。
そして、思い違いをしていたことも。

「そう言つ事だったのね。私もおかしいとは思つてたのよ。昔から大人しいあの子を翔ちゃんは明るい子と言つていたし、琴乃と鈴音を勘違いしているんじゃないかつて」

「俺が悪いんです。勘違いしていたのに」

「あの子も、あの子でそれを利用してたんじゃないかな？」

「……俺、琴乃ちゃんを探してきます」

食後、俺はそう言って外に出る準備をする。

まだ琴乃ちゃんは帰つてこない。

時計を見ればまだ8時過ぎだが、この雨を考えても放つておくわけにはいかない。

「あのや、翔ちゃん。琴乃が翔ちゃんを好きにだつたの、私、知つてたよ。ずっとあの子は翔ちゃんの背中を見続けていたから。あの子にひとつは初めて親しくなつた男の子だつた。きっと初恋だつたんだと思つ」

「鈴音とばかり仲が良くて、正直^{まことに}あの頃の俺は琴乃ちゃんの影は薄かつた氣^きがする。でも、幾つかの思い出はあるよ」

「琴乃は待つてこゐるんだよ、きっと……。早く、あの子を見つけてあげて」

鈴音がそう言つて俺に傘を一つ手渡す。

「携帯電話の番号を交換しよ? あの子を見つけたら連絡して。お風呂の準備をして待つてるから。それと、これも……」

「これ……?」

俺は鈴音から小さな袋を手渡される。

「あの子に渡せば分かるかい。あとまよひしない

「ああ、分かったよ。……そうだ、鈴音。変な」とだかども、確認してもいいかな?」

「ん? いいけど、何?」

「あのや、俺と鈴音つて だよね?」

鈴音から“ある事”の確認をして俺は玄関を出る。

降りしきる雨はまだ小雨だ。

これから本降りになる前に何とか琴乃ちゃんを探さないといけない。

「……琴乃ちゃん」

俺と顔を合わせづらー、その意味は理解できぬ。だけど、俺にも責任があるんだ。

琴乃ちゃんに俺は嘘をつかせてしまった。

俺の勘違いが彼女に鈴音を演じさせてしまったのだ。

「そりいや、琴乃ちゃんが言つてたな。俺は琴乃ちゃんの事は思い出せていないと

あの時はその意味が分からなかつた。けれど、今ならその意味を理解できる。

「俺はバカだ。大事な恋人なのに、全然、気づいてやれなかつたなんて……」

自己嫌悪と後悔をしながら俺は雨の夜を歩きだした。サーっと降る小粒の雨。

「さて、それじゃ、片づかから思い出の場所を行つてみよつか?」

俺は本当の琴乃ちゃんの記憶を、思い出を、思い出をなくちやい
けない。

彼女はきっとと思い出の場所にいるはずだ。

俺と琴乃ちゃんが体験した思い出のある場所に。

第35章・別れの時間

【SHIDE・井上翔太】

記憶の中で俺が琴乃ちゃんだと思っていた相手は鈴音だった。そして、鈴音だとと思い込んでいた年下の少女。

大人しくて物静かで、いつも俺達の後をついてきていた女の子。その子こそが、琴乃ちゃんだったんだ。

俺の思い込みによる記憶違い。

彼女はそれを否定せずに、ずっと彼女を苦しめてきたに違いない。俺はバカだな。

どうして、ここまで思いだせなかつたのか。

麻由美の言葉を思い出しながら俺は過去の記憶をたどる。

俺達の前から姿を消した琴乃ちゃんを探すために小雨の降る町を走る。

「琴乃ちゃんはどこにいるんだ？」

まずは近くの森林公园に向かつ事にした。

俺達がよく遊んでいた場所。

何度も訪れて、たくさんの思い出があるその場所は電灯がひとつあるだけで静まり返つて、どこか不気味な気さえする。

俺は森林公园に入ると辺りを見渡すが琴乃ちゃんの姿はない。

「ここじゃないのか？」

虫嫌いだった琴乃ちゃん、初めて仲良くなれたのはこの場所だった。

だけど、それ以上にここは鈴音との思い出の方が多い。

「琴乃ちゃんは琴乃ちゃんとの思い出がある場所にいると云つ事か」

それを思い出せなければ俺はきっと彼女に会う資格がない。
恋人失格、そうならないために俺は何としても思い出さないといけないんだ。

「そういうや、この大木によく上っていた時にも彼女は……」

俺は大木を見つめてある事に気づく。

それは初めて琴乃ちゃんと来た時に抱いた違和感。
この場所で体格差のある子供達が遊んでいた時の光景を思い出す。
俺はなぜあの時に気づかなかつたのだろう。

「あのぐらいの歳の差は体格に大きな差が出る。一つ年下の彼女が
俺より木のぼりが上手に出来るわけがないんだ」

この木にのぼるのが得意だったのは鈴音だ。

アウトドアが好きで、男に負けない動きを見せていた。

そして、それを「危ないよ～っ」とドキドキした顔をで眺めていたのが琴乃ちゃん。

俺と遊んだ時に彼女は一度もこの木には登れなかつた。

「あんなに思いだせなかつたのに、今はこんなにも簡単に思い出せる
る」

思いだすべき相手が間違えていたのだから仕方がない。
人の記憶つてのは都合のいいように出来ていやがる。

「…………」

幽霊屋敷の方が近いのでそちらを訪れることがある。

無人の屋敷は何度来ても不気味で、荒れ果てたままだ。

夜の雨の幽霊屋敷は雰囲気が出過ぎだらう。

「わすがにこないよなあ……」

こにいたら、それはそれで怖い。

あの夏、俺はこいで鈴音と一夜を過ごした。

真っ暗なワインセラー、こにも逃げ場もなく、俺達は恐怖に耐えていた。

それは今でも俺に暗所恐怖症とアリタマを残してくる。

「琴乃ちゃんはこにもいない。思いだせ、あの子との思い出があるはずだ」「

そう、こにあるはずなのだ。

琴乃ちゃんだけの思い出が何か……。

薄らと記憶に引っかかりを感じている。

次は高台の空き地、それ以外にも遊んだと思われる場所を訪れる。どこにもいない、どこにいるんだ?

俺は一度琴乃ちゃんの家に連絡を入れると鈴音はまだ帰っていないと言つ。

「やうか。まだ帰つていいか

『あ、でも、何かヒントになるかもしない事はある。今日の俺、麻由美にあつたのよ。ほら、幼馴染の麻由美。分かる?』

「ああ、麻由美なら最近ちよく会つてるからな。それで、麻

由美が何か？

『あの子から翔ちゃんと琴乃が付き合つてゐるのを聞いたの。その時に琴乃はある思い出があつて、翔ちゃんを好きになつたと言つていた。その場所で待つてゐるんじゃないの？』

ある思い出とは何か、それは俺が先程彼女に確認した事と関係している。

『……翔ちゃんが思いだしてあげて。あの子との過去を、思い出を』

「分かつた。善処するよ。俺にもひとつ、心あたりを思い出した」

『それなら任せるわ。翔ちゃん、琴乃の事が好きなのよね？』

「だから、じうじて探しているんだよ。過去も嘘も俺は気にしない。再会できた時から始まつたと想つている」

だけど、琴乃ちゃんにとつては違うのだ。

ずっと昔から始まつていた、それに気付けなかつた俺が悪い。口では何と言つても、本音では苦しみ続けてきたに違いない。

「必ず連れて帰るから

約束をして俺はその場所へと向かう。

俺はずっと気になつていた鈴音の言葉を思い出していた。それは先ほど出て行く時に彼女に確認したことだ。

『なあ、鈴音。俺達つてキスはしていないよな？』

『キス？してないよ、私が覚えている限りはね』

そう、どんな偽りの記憶でも、ひとつだけ真実があった。それは俺がキスをしたのは琴乃ちゃんが相手だと言う事だ。色々と頭が混乱して忘れかけていたが、俺と琴乃ちゃんの思い出の場所がある。

「……最後はここか」

俺は古びた教会へとたどり着いた。
麻由美の祖父が神父をしている教会。

『俺達が初めてキスをした場所。それって、あの教会じゃないか？』

『はい。そうです。やつと、思い出してくれましたね。些細な事でも、『本当の私』を思い出してくれてよかったです。翔太先輩』

あの時の会話、俺は違和感があつたけども、確かに相手は琴乃ち
ゃんだった。

ファーストキスの思い出の少女は鈴音じゅない。
この思い出だけは俺達の思い出のはずだ。

「ここにいるのか、琴乃ちゃん……」

教会の扉が開いていたので俺は中へと入り込む。
揺れるろうそくの炎、ステンドグラスは明かりに照らされて綺麗
だ。

「……へえ、思ったより早く来たね。翔太くん」

だが、そこで俺を待っていたのは麻由美だった。

「やつこつ」とか

麻由美は彼女の親友だから、彼女をかくまう事も容易だろ。

「鈴音と会ったんだ？そして、こっちゃんがつき続けた嘘にも気づいた」

「お前は気づいていたのか？彼女が嘘をついてた事に？」

「当然。ふたりの話を聞けば、何かが違う事も分かる。それでも、こっちゃんからは口止めされてたけどね。あの子の嘘は翔太クンには衝撃的なモノだった？」

「……俺が思い違いをしていたなんて思わなかつた。彼女を苦しめていたのは俺だ」

俺の勘違いさえなければ、彼女に嘘をつかせる事もなかつたのだから。

「そうだね。でも、入つて弱いからさ。嘘でも何でも、自分の幸せを守るために利用するの。こっちゃんは翔太クンが自分を鈴音だと思い込んでいる事を利用した。自分の思い出まで捨てて、嘘をつき続けたの」

「麻由美……琴乃ちゃんはビリしている？」「ではないのか？」

「そうだよ、残念ながら彼女はここにはいない。惜しいけど、違うみたいだよ。確かにここは翔太クンとこっちゃんの思い出がある場

所だよね。ファーストキスをした場所だつて聞いたけど？」

「琴乃ちゃんから聞いたのか。だったら、麻由美はどうしてここにいる？」

琴乃ちゃんの代わりに麻由美がここにいる理由が分からぬ。
思い出の場所はここじゃないのか？

「ここも正解には違いない。ファーストキスって大事だもの。でも、
こっちゃんは私に言ったの。本当に思い出がある場所はここじゃな
いって言つてたわ」

「何だつて……？」

もう俺の知る限りの場所は行きつくしたはずだ。
この近所で行つていない場所はないはず。

「……私は彼女から電話で翔太くんが来たらここにはいない、とだ
け告げてと言われた。でも、あの子、辛そうだったよ。本当は探し
て欲しくないんだと思う。矛盾してるよね、探してほしいのに探し
てほしくないって」

「どういう事だ？」

「翔太くんに嘘をついてた。鈴音のふりをして騙していた事を責め
られるのは覚悟済みなの。あの子が本当に恐れているのは嘘を怒ら
れる事じゃない。逃げてしまいたくなるほどに悲しいのは……」

麻由美はそつと指先をステンドグラスに向ける。

俺が子供の頃に見て來たと言つ天使の絵が描かれたステンドグラ

ス。

「贖罪^{しょくざい}と懺悔^{せんげ}。……神は人の罪を許すために存在する」

「許す？それが今の話とどう関係あるんだ？」

「ユウちゃんは許されたい事がある。そう、今の彼女は許されたい場所にいる。こっちちゃんは鈴音と翔太クンが再会するのを望んでいなかつた。それは嘘がバレる事ともうひとつ罪が明らかになるのを恐れていたから」

もうひとつ罪……？

琴乃ちゃんは何を恐れていたんだろう？

「……もう一度、全てを最初から思い出して、そろすれば、分かるはずだから」

麻由美は俺にそつ告げて、俺を教会から追い出す。

「ユウちゃんを見つけてあげて。翔太クン」

「最後は自分で思い出せつてことか」

「そういうこと。今なら誤解もせずにちゃんと翔太クンも思いだせるはずだからね」

忘れていた過去を思い出す。

それは10年前の夏、俺達の記憶。

俺は琴乃ちゃんの居場所を思いだせるのだろうか。
このまま彼女と別れる事だけは避けなきゃいけない。

琴乃ちやん、キミは今、どうしているんだよ

?

第36章・夏の思い出《前編》

【SIDE・井上翔太】

それは俺にとつて10年も昔の話だ。
まだ7歳の小学2年生だった夏のこと。
俺は母さんの仕事の都合で夏休みの間、彼女の友人の家に預けられる事になった。

琴乃ちゃんや鈴音との出会い。
あの日々は俺にとつてかけがえのない思い出になった。
俺は思い出す、その日々を……思いだなければいけない事がある。
俺と琴乃ちゃん、本当の思い出とは一体何なのか？

……。

小学2年の夏休み、また暑い夏がやってきた。
夏は暑いからあまり好きじゃない。

「それじゃ、翔太。お利口にしてるのよ？」

「うんっ。母さんも早くむかえにきて」

「……ええ、そうするわ。電話とかはするからね」

母さんのお仕事の都合で俺はあつた事もない人の家に預けられる事になつたのだ。

そこには歳が近い女の子がふたりいると聞かされていた。

仲良くして遊びなさい、と母さんに言われたけれど、幼稚園からあまり女の子とは付き合いがない俺はどうすればいいのか実際に会うまで微妙に分からなかつた。

母さんの友達で俺を預かってくれる理沙おばさん。彼女に家に連れてかれてリビングで俺は血口紹介をする。

「はじめまして、翔太です。お世話になります」

「へえ、挨拶もしつかりしてるし、可愛い子じゃない。赤ちゃんの頃にあった事はあったけど、それ以来だからね」「ね

「よひじくおねがいします。おばさん」

俺がそつ言つと彼女は不満そつに訂正をさせる。

「おばさんじゃないわ。いい?私の事はおねーさんって呼びなさい。いいわね?」

「お、おねーさん」

言わなければ怒られる、怖い、と幼心に俺は語つた。

「よろしい。翔太君、遠慮しないでくつりいで。私の娘も呼んでくるわ

理沙おねーさんはそつ言つてすぐに一人の女の子を連れてくる。
一田見れば分かる明るい女の子がそこにいた。

「夏の間だけど、よろしくね。俺は翔太って言つんだ。ヤハニは?」

「私は……私は“鈴音”だよ。仲良くなれ、翔ちゃん”つー。

鈴音、それが俺にとつて初めて親しくなる女子。
同じ年でもあり、気さくな性格の彼女とすぐに意気投合して俺達
は仲良くなる。

案内されたのは布団の敷かれた畳の部屋だった。

「ここが翔太君のお部屋よ

「私の部屋は隣なのよ。翔ちゃん」

「鈴音、彼と遊んであげて。あら、琴乃はどうしたのかしら？」

「あー、琴乃なら一人で部屋でぬいぐるみと遊んでる。翔ちゃんは
男子だから恥ずかしいのかな？」

琴乃、と言つのは鈴音の妹らしい。

俺よりもひとつ下、小学1年生だつて聞いた。

理沙おねーさんが夕食の準備をしている間に俺は部屋に荷物をお
く。

段ボール箱に入つているのは自分の着替えの服などだ。

「どーして、翔ちゃんはここに来たの？」

「お母さんがお仕事なんだつて。一緒にはついていけないから1ヶ
月間、預けられる事になつたんだ。こんなに長い間、離れて暮らす
のは初めてだからちょっと不安なのはあるよ」

「やうなんだ。ママがお仕事でいなくなつちやたの?寂しくない?」

「うーん。寂しいかもしけないけど、今は大丈夫だよ

まだ実感がない。

いつも仕事で夜にいない日もあるから特別な寂しさはなかつた。

「私なら無理。ママがいないとダメだよ。翔ちゃんはすゞいね？」

「鈴音は理沙おねーさんが大好きなんだ?」

「うんっ。大好きだよ。パパも大好きっ！翔ちゃんのパパは？」

パパ、お父さんは俺にはいない。

俺が生まれてからずっとといない。

普通の家にはお父さんとお母さんがいるんだつて……。

学校の皆にはいるからどういう存在なのか想像するしかない。

「ずっと前からお父さんはいない、あつた事もないからお父さんつてよく分からない。ねえ、お父さんつてどういう人なの？」

「パパ？えつとねえ、パパはね……」

俺が鈴音の家に来て、初めて触れた本当の家族と言つもの。
お母さんがいて、お父さんがいる、そんな普通の家族と言つもの
を初めて感じた。

家族、その言葉の意味を俺は知る。

……どーして、俺にはお父さんがいらないんだりう?
お母さんが迎えに来てくれたら、聞いてみようかな?

俺が鈴音の家に預けられて数日が経過した。

他人の家の生活には慣れ始めた。

理沙おねーさんは優しいし、料理も美味しい。

いつもお仕事で忙しいおじさんもキャッチボールを俺としてくれる。

鈴音は可愛くて、いつも楽しく俺と遊んでくれていた。

毎日が楽しかったけれど、俺はまだ挨拶しかしたことのない女の子がいた。

……鈴音の妹、琴乃ちゃん。

控えめな性格の女の子らしく、中々会話もできない。

俺が話そうとするとすぐに逃げてしまつから。

「えーっ。琴乃と仲良くなりたいの？」

「だつて、いつも逃げられちやつから気になつて」

「うーん。あの子、男の子が基本的に苦手だもの。幼稚園の頃からお話だつてしないし」

黒髪がよく似合つ人形のように整つた顔。

お人形のようという表現はよく合つていた。

俺が話しかけてもビクツとするだけで何も話してくれない。

だけど、それは思わぬ形で仲良くなれるきっかけができた。

琴乃ちゃんが苦手なのは昆虫。

偶然にも彼女の服についた虫を払つてあげた事が彼女との和解のきっかけになる。

それは夏のある日、カブトムシを捕まえた鈴音に俺は逃がすように言った。

「翔ちゃん? どうしたの?」

「え? あつ、その……カブトムシ、可哀想だから逃がしてもいい?」

「可哀想? 翔ちゃんって優しいんだね。いいよ、逃がしてあげて。どうせ、家では飼えないもの。『琴乃』が怖がるから」

「琴乃ちゃんはカブトムシが嫌いなんだ?」

実の所、俺も虫はあまり好きではない。

「虫とか大嫌いだよ。足がうごくしてるのが嫌みたい」

俺と同じ理由だった、あの無意味に多い足がすぐ嫌いだ。
そんな時、大人しい声で俺達を呼ぶ声に気づく。

「あ、あの、お姉ちゃん。しょ、翔お兄ちゃん。ママがお昼ご飯だから帰ってきてって」

「そう? 分かった、すぐに帰る。ほら、行こう、翔ちゃん」

琴乃ちゃんが呼びに来てくれて、鈴音は俺の手を引いて歩きだす。

「あつ! ?」

捕まえていたカブトムシをつい手放してしまったのだ。

逃げ出すカブトムシが向かつた先は琴乃ちゃん。

「い、嫌！？は、離れてよ～っ！？」

服にへばりついたカブトムシに大声で叫び出す。
誰だつて苦手なものがあつて、俺も直に触れるのはすぐ複雑な
気持ちだ。

「た、助けて、うえーん」

泣きだしてしまった彼女を放つておけずに俺はすぐにカブトムシ
を引き離す。

「翔あ兄ちゃん……？」

涙に濡れた瞳で俺の顔を見つめてくる琴乃ちゃん。

「もう、大丈夫だよ、琴乃ちゃん」

「ありがとう、お兄ちゃん」

安心した琴乃ちゃんの顔を見て俺も少し照れくさくなつた。
こんな笑みを見せる子なんだ。

それが素直な本音で、俺も微笑みを返す。

その事件をきっかけに俺達は急激に仲良くなり始めた。

と言つても、いつも鈴音と遊びに行く時に後ろについてくるだけ
だけど。

琴乃ちゃんはあまり構つて欲しいとは言わない。
だから、俺の方から積極的に絡むようになつっていた。

可愛い年下の彼女に慕われるのは俺としても妹ができたようで嬉

しかつたんだ。

ある程度仲良くなつた8月の上旬、俺は琴乃ちゃんの幼馴染を紹介される。

古びた教会に連れて行かれた中には何人かの子供が遊んでいた。

「ふーん。この子がこっちゃんがお兄ちゃんつて呼ぶ男の子なんだ」

「……えつと、キミは誰？」

「私は麻由美だよ。この教会の神父様はお祖父ちゃんなんだ」

そう言つた彼女は中を案内してくれる。

教会で目を惹かれたのは大きなステンドグラスだった。

一目で俺はそのステンドグラスに釘つけにされてしまった。

なんて綺麗な光景なんだろう？

キラキラと輝くガラスがあまりにも綺麗で俺はずつとそれを見続けていた。

初めて見た立派なステンドグラス。

別に俺は男だし、綺麗な物に興味があつたわけじゃない。

それなのに、俺はその幻想的な光景に身動きできずにいた。天使が女の子を優しく包み込む絵が描かれている。

「……本当に綺麗だ」

それは親と引き離された俺の寂しさを癒してくれた。

「翔太くん、どうしたの？ そろそろ、行くよー！」

「あ、うん。分かったよ」

麻由美に呼ばれたので俺はその場を離れようとする。
もう一度だけ、俺はステンドグラスを眺めた。
教会のステンドグラスは俺にとって安心できる場所だった。
やっぱり、お母さんに会えない事は俺にとって不安だったから
。

第37章・夏の思い出〈中編〉

【SIDE・井上翔太】

小学2年の夏休みも半ばに入った。

仲良くなつた鈴音と俺は毎日のように遊びに出かける。おじさんにキャンプに連れていつてもうつたり、海で遊んだりした。

それはこれまで自分がした事がない事ばかり。

家族で何かをしたりする事は楽しいのだと初めて知った。朝からリビングに鈴音に集められた俺と琴乃ちゃん。

「というわけで、今日は探検に出かけます！」

「……私はいや」

すぐに否定する琴乃ちゃん。

鈴音は「琴乃もついてくるのよ」と強引に誘つ。嫌がる彼女だけど、姉には逆らえない。

「だ、だつて、あのコーレイ屋敷でしょ？」

「そうよ。幽霊屋敷に行くの。ちゃんと準備もするから大丈夫」

「幽霊屋敷って何なの、鈴音？」

俺の疑問に彼女は意地悪く笑いながら言つ。

「ふふふつ。それはね……つこてからのお楽しみつ

「……翔太お兄ちゃん、お姉ちゃんについて行っちゃダメ」

「そんなに怖い場所なのか

俺の服の裾をつまみながら怖がる琴乃ちゃん。
ずいぶんと俺にも懐いてくれたのは嬉しいが、俺も鈴音にノーとは言えない。

「懐中電灯は2つあればいいよね。あとほ……お菓子、と、他には……」

鈴音は適当にリュックサックに詰めて意気揚々としている。
琴乃ちゃんは正反対に顔を青ざめさせていた。

「お兄ちゃん、氣をつけよ。コーレイ屋敷はホント怖いの」

「そんなに怖いんだ？」

「うん。前にマコと一緒に歩いて、すいじく暗くて怖くて泣きそつになつたの」

思いだすだけで怖いんだろうか。

彼女は顔色がとても悪いので心配になる。

「琴乃はビビりすぎなのよ。暗い所が怖いだけでしょ」

「……お姉ちゃんが怖がりなの」「

「あははっ。私が怖がり? そんなことないもん

鈴音は怖がる様子もなく、荷物を詰め込んだ鞄を俺に渡す。

「荷物は翔ちゃんが持つて。さあ、行くわよ」

外で待ち合わせをしていた麻由美を加えた4人。その4人で幽霊屋敷と呼ばれる場所に行つた。古びた屋敷、今にも壊れそうな扉を抜けた。

「足元だけは気をつけて。床がボロボロだからね」

懐中電灯を照らしながら建物の中をゆっくりと歩く。

「真っ暗だねー。ホント、いつ来てもこじりつて怖いなあ

麻由美はそう言しながらも楽しんでいる様子だ。

「……うう、暗い所は嫌い。怖いよ、お兄ちゃん」

そう言つて、俺から離れずにいる琴乃ちゃん。

鈴音は先陣を切つて、鼻歌まじりに探検気分を楽しんでいる。

「ぐすつ。これよ、これ。やっぱり、探検つてこりじゃないと

女の子なんだからもつと大人しい方がいいのに。と、俺は内心、思いながらそのあとをついていく。

「翔ちゃん、見て見て。この辺から雰囲気が出でてくるの

俺の手を引いて前へ前へと進む鈴音。

俺の後ろにいた琴乃ちゃんは泣き声にならながら、麻由美の方へと逃げる。

「ユウちゃん。大丈夫だつて、そんな泣きそつた顔をしないで?」

「だつて、ユウ……うつ

震えあがつてしまつている琴乃ちゃんに俺は「?」と不思議に思う。

「見てよ、あの絵。ユウから先はまだ中に入らなかつて残つてゐんだよ」

埃っぽい部屋の中に飾られている洋画。

カビ臭いのであまり部屋の中にはいたくない。

「……鈴音、私とユウちゃんは先に外に出てもいい?」

「何よ、麻由美まで?」

「何ていうか、今日は雨が降りそうな天氣でしょ?風もあつて私も怖いから外で待つてゐる。1時間くらいしたら出でてきくな」

彼女は腕時計を指差して囁つ。

「私、時計持つてない。翔ちゃん、持つてる?」

「うん。持つてる」

「そつか。じゃ、1時間後ね。空き地の方で遊んでいて」

「分かつた。翔太クンも気をつけてね」

麻由美が怖がって動けなくなつた琴乃ちゃんを連れて外へと出る。

「……あー、もう、あの子つたらホントに弱虫なんだからつ

「でも、怖いんだつたらしようがないよ」

俺も男じゃなければ逃げ出したい。

暗い廊下をぐるっと回つて、元の場所へと戻つてくる。
広い屋敷の中を回つていると、方向感覚が分からなくなる。

「ねえ、じいじって何だらう?」

キッチンと思われる場所。

そこには下へと続く階段がある。

「入つてみる?」

「うーん。何だか怖いなあ。ちょっと待つて」

俺は机の上に目印となるハンカチを置いていく。

「これで何かあつたら分かるよな」

そう、俺は嫌な予感がしていたのだ。

階段をおりると子供にとつては大きな空間が広がっていた。
重い扉を開けると、古い木で出来た棚が並んでいる。
懐中電灯で照らすと、「ワインセラー」と書かれていた。

「わいんせりー？って何だの？」「

鈴音も初めて来たのか、興味津々と言つた感じだ。

「ワイン、つていうお酒をいれておく棚みたい」

「ふーん。パパもたまに飲んでるよ」

「……お酒置き場なんだ」

光もなく、すごく不気味な場所だけに早く去りたい。
ほんのりと何かの香りがする、そこだけは特別な空間のような気が
ががした。

「もう飽きたから帰ろっか。琴乃たちを待たせたくないもん」

時計はちょうど1時間が経過していたのでそろそろ帰らうとする。
だけど、彼女は扉の前で身動きを取れないでいる。

「……鈴音、どうしたの？」

「あ、あれ？おかしいなあ、さつきは簡単に開いたのに

ガチャガチャとドアノブを押したり回したりするけど、ドアが開かない。

先ほどまで余裕の表情だった鈴音が戸惑つて焦り始める。

「ドアが開かなくなっちゃった」

さつと顔を責ざめさせる鈴音。

俺も代わりにドアを開けようとするけど、どうしても開かない。蹴つたり、押したりと頑張っては見たものの、扉は開く気配もなかつた。

「もしかして、俺達、閉じ込められた……？」

あれからどれくらいの時間が経つただろうか。

「しくしく……ぐすつ……」

あの鈴音が泣いている、俺は驚きながら見つめていた。
俺の隣で声を上擦らせて泣いている鈴音を俺は慰めようとする。

「大丈夫だつて。すぐに誰か助けに来てくれる」

「ホントに？ だつて、もう何時間経つてるの？ 誰も来ないじゃない」

懐中電灯で時計を見ると夜の8時過ぎ。

さすがに俺も不安にならんがら、鈴音に寄り添う。

「……ごめんね、翔けやん」

「仕方ないよ。閉じ込められちゃつたんだから

鈴音はシュンッとしながら、「うなだれていた。

普段の彼女からは想像できないけど、彼女も女の子なんだ。

「翔ちゃん。お腹空いたよ」

「確かに、リュックの中にお菓子があつたはず」

俺達はリュックに入つていたお菓子を食べて空腹を満たす。
それからもう一時間が経つて、夜の10時を過ぎた頃、悪夢は始
まった。

つけっぱなしだった懐中電灯が電池切れをしてしまったんだ。
何も明かりもなく、真っ暗になつてしまい、ふたりして震える。

「な、何も見えないよ。翔ちゃん?」

「俺はここにいるから……」

俺は鈴音の手を握りながら不安を打ち消そうとする。

「……幽靈屋敷なんて来なければよかつた」

真っ暗の室内、ふたりして後悔しながら雑談で不安をぬぐつ。

「翔ちゃんは琴乃と仲良くなつていいお兄ちゃんみたいだよね」

「そうかな?」

「やつだよ。だって、琴乃って男の子と話をするのだつて苦手なん
だよ?」

心を許してくれたのか、琴乃ちゃんととの距離は縮まつたよつと思
う。

兄妹のいない俺にはどこかくすぐったい気持ちになる。

「私はダメなお姉ちゃん。いつだって琴乃の嫌なことしかしてない。今日だつて、琴乃は嫌がつてたのに無理に連れてきたし。嫌われるかもねー」

「……でも、琴乃ちゃんも嫌いじゃないはず」

「うん。ホントに嫌ならしないけど、あの子つていつも大人しいから。私が何とかしてあげたいって……そう思つてゐるのに空回つてのかな。翔ちゃんも私の事、嫌いになつた?」

不安げな鈴音を俺は励まし続けた。

「そんなことないよ」

本音を言えば俺も怖くて、不安で押しつぶされそうだった。それでも自分は男の子だとしつゝ意地だけで、鈴音を守りつとしていた。

翌朝、眠りについていた俺達を大人たちが見つけてくれた。

あの後、様子がおかしい事に気づいた琴乃ちゃん達が知らせてくれて、皆が探してくれたようだ。

あのハンカチに気づいてくれてここを見つけてくれたらしい。

それから、理沙おねーさんに俺達は怒られたけど、心配させたから当然だ。

幸いなことに大した怪我もなく、無事に助かつたんだけど、それ

から数日の間はさすがの鈴音も大人しくなっていた。

「……あ、あの、翔太お兄ちゃん？」

「ん？ どうしたんだい、琴乃ちゃん」

鈴音が大人しいので暇な俺は琴乃ちゃんに声をかけられた。

「あのね、私と一緒におでかけしない？」

彼女から俺を誘ってくれたの初めてだったので俺はすぐに頷いた。
琴乃ちゃんと一緒に向かった先、教会で俺達は初めての思い出を作ることに。

第38章・夏の思い出《後編》

【SIDE・井上翔太】

琴乃ちゃんの誘いを受けて訪れたのは教会だった。いつもより人の数が多くてびっくりする。

「人がいっぱいいるけど、何かあるの？」

「あのね。結婚式があるんだって」

「結婚式？へえ、そうなんだ」

よく見れば中には花嫁姿の女人がいた。

「キレイ～。花嫁さん、可愛い」

「本当に綺麗だ。花もたくさん舞つてるね」

紙吹雪のように花が宙を舞う。

そして、花嫁と新郎が互いに見合つてキスを交わす。

「キスってあんなのなんだ？はじめて見た」

話では聞いたことがある。

キスっていうのは好きな人同士が唇を触れ合わせる行為だと。

「私も……見たのは初めて」

ほんのりと顔を赤める琴乃ちゃん。

「ああいつのつて楽しそうだね」

「楽しい……？」

彼女は何か考えるような顔をしている。

そして、普段の彼女からは想像もできな一言を告げる。

「翔お兄ちゃん。あのね……私とキスしてみたい?」

「え? あ、キス?」

「ママが言っていたの。キスは特別な人とするものだって

琴乃ちゃんの瞳が俺だけを見つめている。

「……ちゅっ」

俺は見よう見まねで彼女に唇を押しつけた。
小さな水音をたてる唇同士の接触。

「これがキス……?」

初めてのキスは何だかこそばゆい感じがした。

「お兄ちゃんとしたかった。すげく嬉しいよ?」

琴乃ちゃんが顔を真っ赤にさせている。

それが可愛いと素直に思つた。

照れくさくなつて俺は笑顔で誤魔化す。

「あのね、翔お兄ちゃん。いつもお姉ちゃんと仲いいよね?」

「そりだな。鈴音とはもう1ヶ月近く一緒にいるからな……」

「私もお兄ちやんと仲良くなつたみたい」

いつも控えめな彼女が自己主張するのは珍しい。

「俺も琴乃ちやんと仲良くなつたよ」

「ホントー? それじゃ、いつも来てよ。もうひとつ、来て欲しい所があるの」

俺に繋がれたのは小さな手だった。

俺よりもずっと小さくて、でも、温かくて。

それが琴乃ちやんの温もり何だと想いながら彼女の後をついて行く。

いつも遊んでいる森林公园の近く、そこには古い神社があった。その境内の中にある一本の大木。

「……?」

「ひはね、『えんむすび』の木なんだってママが言つたの

「えんむすび? って何?」

「私もよく分からぬけど、大切な人と一緒に来ると幸せになれるんだつて」

琴乃ちゃんは俺に笑いかけながら、

「「」の紙を「」に結ぶの？」

「へえ、そなんだ」

神社には他の人もいない。

俺は琴乃ちゃんに言われるがままに一緒に紙きれを木の枝に結びつける。

「……これでいいの？」

「うん。そうだよ、あとは……大人になつたらまた一緒にここに来てくれる？」

“えんむすび”のために、俺達は再会をする約束をする。

「大人になつたらまた来よう」

「えへへっ。約束だよ、翔お兄ちゃんっ！」

それが琴乃ちゃんとの唯一の約束。
俺が彼女とした大事な約束なんだ。

……。

あの約束から数週間後、俺は母さんが戻つて來たので再び家に戻

ることになった。

たった1ヶ月程度、幼い頃に預けられてただけの関係。

それ以来、会う事もなく、俺達は10年以上も離れ離れになつていた。

鈴音との記憶ばかりが思い出されていて、俺は琴乃ちゃんの記憶を忘れていた。

これが俺と琴乃ちゃんの過去、大事な俺達だけの思い出。

「思い出した、俺は……琴乃ちゃんと約束をしていたんだ」

過去を思い出した俺は小雨の降る中、あの神社へと向かう。再会してからずっと行つていなかつた場所。

だけど、キスをした教会よりも大事な場所がある場所だ。

「確かに、この道をのぼつた気がする」

何度か迷いながらも俺はその場所へとたどり着いた。

いつしか降り続いてた雨が大ぶりの雨へと変わつていた。すっかりと濡れた服の気持ち悪さを我慢しながらも俺はゆっくりと階段を上る。

その先にある神社は管理者もいないような古い小さな神社だった。

実際、誰かが手入れをしているようには見えない。

鳥居をくぐつた先、朽ち果てた建物だけがある。

夜に来るには少し雰囲気があつて嫌だな。

だけど、この先に琴乃ちゃんがいるはずなんだ。

「約束したんだ。大人になつたらもう一度ここにこようつて

彼女との約束は“えんむすび”、あの頃は意味が分からなかつた。だが、今なら理解できる。

“縁結び”、琴乃ちゃんは俺とのつながりを求めていた。

人生の中でたった1ヶ月の間の出来事だったはずなのに。

彼女は10年間も俺の事を想い続け、約束を覚えてくれていた。

「俺つて奴は琴乃ちゃんと存在を覚えていなくて、拳句の果てに鈴音を琴乃ちゃんと勘違いしていたのか。最悪だな」

まったく麻由美の言うとおり、俺は薄情者以外の何物でもなかつた。

「鈴音は確かに俺の淡い初恋ではあったが、ちゃんと琴乃ちゃんも妹みたいで可愛かった記憶があつたはずなのに何で忘れてたんだろ。10年前の事なんて覚えてないのが普通だつてのはただの言い訳だよな」

人の記憶はそれほど脆いものなのか。

長いと思える時間の積み重ねも、過ぎ去れば短かつたと感じる時間の流れ。

あの頃、俺の中に琴乃ちゃんはただの鈴音の妹でしかなかった。だが、10年の時を経て、俺達の関係は変わったんだ。

今の俺達は恋人なのだと強く意識する。

彼女は俺が思いだすのを待ち続けていたんだ。

嘘についてまで俺の傍にようとしてくれていた。

その嘘は彼女にとつてどれだけ辛い思いをさせたのか。

「俺は本当のバカだ。けれど、バカだけども、俺の気持ちは……」

鳥居を抜けた先、雨に打たれながらも木に背をもたれながら俺を待ち続けていた。

「……翔太、先輩？」

あの頃と変わらない、同じ瞳をして琴乃ちゃんは微笑んでいた。

「10年ぶりだ。やつと会えたね、琴乃ちゃん」

本当の意味で俺と琴乃ちゃんは再会を果たした。

第39章：10年ぶりの再会（前書き）

琴乃視点です。

第39章・10年ぶりの再会

【SIDE・藤原琴乃】

小さな頃、お兄ちゃんみたいに親しく、優しく接してくれた翔太先輩。

たった1ヶ月の出来事が自分にとつてはずっと忘れられない思い出になつた。

それなのに、先輩はその事を覚えていなくて。

正確に言えば、あの夏の出来事を私の記憶だけを忘れていた。私は鈴音お姉ちゃんに比べれば影は薄かつたから仕方ない。だけど、先輩は私をお姉ちゃんと勘違いしている事に気づいた。

『覚えてない？俺達、約束しただる。また会おうって』

『木登りが得意だったよな、琴乃ちゃん』

『この写真の女の子、一体誰なんだろう？』

私は先輩の思い出の中にいなかつたという事実にショックを受けた。

どこにもいない、忘れられた存在。

代わりに先輩の中にいたのはお姉ちゃんの存在だった。

彼女と過ごした日々だけは覚えていて……。

それが悔しくて、私は違うと言えなかつた。

先輩が私を勘違いしているのならそれを利用してでも好かれようとした。

幸いにも大抵の思い出は私も共有していて矛盾はほとんどなかつた。

いつだつて彼らを後ろから見つめていたもの。

鈴音お姉ちゃんの代わり、私は思い出の少女だと自らを偽った。どうせ、いつかはバレる嘘なのに、私は嘘をつき続けてた。

翔太先輩に好きでいて欲しかったから。

私が先輩の思い出の女の子になりたかったから。

先輩の初恋の相手、私じゃなくてお姉ちゃんだと気づいていたのに。

私はずっとと思い出の少女になりたくて、それを演じ続けることに最初は感じていたはずの罪悪感を抱かなくなり始めていた。

いつからか、私が先輩にとっての思い出の少女なんだと思っこむようになっていたの。

現実に目を覚ましたのはGWにお姉ちゃんが帰つてくると言うこと。

お母さん経由で私と翔太先輩が付き合つてるのを知られて、帰省中に会わせて欲しいと言われて私はどうしようもなくなつた。

嘘をつき続けた私への罰が下ろうとしている。

嘘つきは天罰をくだされる運命なんだ。

大雨が降る中で私は古い神社の大木の下で翔太先輩を待つっていた。思わず家からは逃げだしてしまつていた。

この場所は先輩と私だけの思い出がある数少ない場所。

実はこの神社は老朽化が進んで、別の場所に本殿は移動されている。

夏ごろには解体工事もされて完全に消えてなくなると言われていた。

なので、今、ここにあるのは思い出の残る大木だけだ。

私と先輩が縁結びを誓いあつた場所。

先輩は思いだしてくれるだろうか。

騙し続けていた事を怒つてはいるかもしねれない。

私は全ての批判を受け入れる覚悟はできていた。

最悪、関係が壊れてしまうと言つことでも……。

私は先輩を騙していた事実に違ひはない。

「……寒い」

まだ5月の上旬、さすがに雨に濡れ続けると寒氣がする。
けれど、私は物影に隠れることもせずその場に立ちつくしていた。

「もつと、先輩とたくさん思い出を作りたかったなあ」

思い返せば思い返すたびに、後悔の念がわく。

私と先輩が再会してから約3週間。

そんな僅かな時間しかまだ経っていない。

それなのに、思い出せば思いだすほどに私は幸せな記憶が蘇る。
たくさんの思い出を先輩は私に『教えてくれた。

「先輩も私を愛してくれて、これ以上の幸せないのに……」

今日だつて遊園地デートを思つ存分に楽しんできた。

私は最後のデートになるかもしねないと、少しハメを外すべくらい
に明るく振る舞つた。

素直に「『ごめんなさい』と言えばよかつた。

私じやなくて、先輩が好きだった思い出の少女はお姉ちゃんだつ
て言えればよかつた。

「言えなかつたのは知られるのが怖かつただけじやない。私はずつ
とお姉ちゃんになりたかつたんだ。先輩に愛されたかつた」

込み上げてくる涙をぬぐおうとするほど、我慢できず嗚咽が漏れた。

「ぐすり……うつ……」

震える身体を腕で押さえて誤魔化す。

「先輩に嫌われたくない……嫌われたくないよお」

先輩が好き、大好き。

あの頃は憧れだった、今は本当に心の奥底から先輩を愛している。泣き疲れかけていた頃、誰かが境内に登つてくる足音が聞こえた。私の心臓がドキッと鼓動がはねる。

翔太先輩が私の前に姿を現す、彼も髪の毛を雨に濡らしていた。

「……にいたんだね、琴乃ちゃん。ずいぶんと探したよ」

「……翔太先輩」

「俺、ようやく思い出したんだ。俺がずっと琴乃ちゃんだと思い込んでいたのは鈴音だつた。逆に鈴音だと思っていたのが琴乃ちゃんだつた。バカだよな、そんな勘違いをするなんて。矛盾とかいろいろとあつたはずなのに」

先輩を前に私は立ちすくんでしまう。
身動きも、喋る事もできずに彼の言葉を聞く。

「思い出の少女……それは琴乃ちゃんじゃなかつたんだ。正直に言うと、俺は子供の頃は鈴音の事が好きだつたと思つ。仲が良くて可

愛くて、一緒にいるのが楽しかった

先輩の口から聞かされる現実に私は涙があふれ出す。

我慢しなくちゃいけないのに。

これは私の罰、例えどんなに辛い先輩の言葉を受け入れるつて決めたの。

「鈴音の事ばかり気にしていたから、琴乃ちゃんの事は記憶にも薄かつた。鈴音の妹、それだけの存在でしかなかつたんだ」

「そうでしょうね。先輩はいつだつてお姉ちゃんと一緒で、羨ましいくらいに仲がよかつたんですよ。どこに行くのも、遊ぶのも、家にいる時も一緒だつたんです」

だからこそ、私はお姉ちゃんになりたかった。

私も先輩との思い出があるのに、思い出してももうえなかつた事が悔しかつた。

「先輩の大切な思い出の中に私がいない事が寂しくて、悔しくて、悲しかつた。それゆえに、私は先輩に嘘をつきました。先輩がホントの私を忘れていたし、10年もたつていれば記憶もあやふやです。私は先輩が覚えていない事を利用しました」

例え、偽りだとしても、先輩が私に向けてくれる優しさが幸せだった。

「……琴乃ちゃん」

「翔太先輩。覚えてますか?」ここに来ててくれたと言つことは少しは思い出してくれたんですね。10年前、この場所で私達が約束を

した事を

私が約束したのは再会の約束じゃない。

先輩と仲良くしたいと言つ些細な願いだつた。
縁結びなんて、神様に祈るよつた小さな願い事……。

「思い出した。俺達は教会で見様見真似のキスをして、ここで縁結びを誓い合つた。あの頃は意味も分からなかつたけどな」

「……私も本当の意味は知りません。仲良くなれるおまじない程度にしか理解できていませんでした。それでも、その2つの思い出だけは私と先輩だけの思い出なんです。それ以外は全部、先輩にとってはお姉ちゃんとの思い出です」

ふう、と深呼吸をひとつして私は先輩の瞳を見つめる。

「今まで嘘をつき続けて」「めんなさい。騙した事を責めたい先輩の気持ちを理解しています。思い出の少女を自分のために演じてきたこと。どんなに謝つても許される事じゃありませんけれど、私は……」

謝罪する私はぎゅっと先輩に抱きしめられていた。

「……………翔太先輩？」

思いもよらない展開に私は動搖するしかない。

「『めんな、そんな嘘をつかせてしまつて。琴乃ちゃん、久しぶり。
10年ぶりに再会できたね』

「あつ……はいっ。あつ、ああつ……つうつ……あああ……」

やつと出会えた……本当の私と先輩。

抑えきれない程の涙が瞳から溢れ出てくる。

類を伝う涙、それは悲しい涙じやなくて嬉しい時に流れる涙だつたの。

先輩がようやく私を認めてくれた、それが何よりも嬉しかったから。

「今、俺達はようやく再会できた。本当のキミと、再会できたんだ。だから、ここから始めるのか?俺と琴乃ちゃんの関係を、初めからやり直さないか。思い出の少女とか関係なくて、藤原琴乃という女の子として……」

泣き崩れる私を先輩は抱きしめながら私に想いを伝えてくる。

「俺は琴乃ちゃんが好きだよ。大好きで、本当に大事にしたい女の子だと思つている」

許されることも、好きだと言われるも思つていなかつた。
ここで私達の関係が終わつてしまふのだとばかり、思つていたのに。

先輩の身体の温もりが伝わつてくる。
顔を見上げた私には優しい微笑みを向けてくれていた。

「何度も言つよ、『琴乃』。俺と付き合つて欲しいんだ、いいよな?」

「……は、はいっ。私でよければ、先輩の恋人になりたいです」

涙をあふれさせながらも私は頷いて返事をする。

「よかつた。断られたらどうしようかと思つていたんだ」

「それは……私のセリフです。先輩に嫌われたくないて、それなのに、先輩は……」

どうしてこんなにも優しいんだろう。

優しすぎて私は彼にどんな風に接すればいいか分からなくなる。

「琴乃と過ごしたこの3週間、俺がどれだけキミに惚れているか分かつてないな？ 恋人としてこれだけ愛してるのに」

「翔太先輩……」

私達は10年前に会っていたけれど、それはただのいい思い出。この10年後の再会から全てが始まり、私たちは同じ時間を歩んでいく。

「琴乃が好きだよ、誰よりも好きだから俺の恋人でいて欲しいんだ」

先輩の腕の中に抱きしめられながらしばらくの間、優しい雨を浴び続ける。

縁結びの神様はもうここにもいないかもしけないけど、報告だけはしておきたい。

真っ暗な夜の神社、私達以外、誰もいないその場所で私は口づけをかわす。

「愛しています、先輩」

そして、本当の私達の恋人関係がここから始まつたの

。

第39章・10年ぶりの再会（後書き）

次回からクライマックスの新展開です。

第40章・父親は誰なのか？

【SIDE・井上翔太】

鈴音との再会に伴う“琴乃”の失踪事件は無事に解決をした。琴乃とは本当の意味での10年ぶりの再会を果たし、恋人としての新しい関係を築くことができたのだ。

彼女がついた嘘。

いや、正確に言うならば、琴乃につかせてしまった嘘。

俺はその嘘が悪いことだとは思わない。

誰もが嘘をついてしまうことはある。

何かを誤魔化す時、知られたたくない事を知らせる時。

嘘には二つの嘘がある。

悪意を抱き人を騙すための嘘。

もうひとつは優しい嘘だ。

相手を想つがゆえにつけた嘘は悩み、苦しむこともある。

琴乃是そうだった。

自分のついた嘘にこの数週間も苦しみ続けてきたのだ。

その苦しみから解放された彼女。

今は俺の恋人して明るい表情を見せてくれている。

琴乃が愛おしい、大切な恋人だと俺は幸せに満ちていた。

鈴音とも楽しく過ごせたゴールデンウィークが終わり、6月に入ろうとしていた。

そんな俺にある出来事が起きようとしていた。
己の出生に関わる重要なことが……。

「しょ、翔太っ、来てっ！？」

夜になつて俺が自室でのんびりとじつといふとソビングから母さん
の悲鳴が聞こえる。

「何だよ、母さん。何か変なモノでもいたのか？幽靈なら間に合つ
てるぞ」

「違うわよ、あれを見なさい」

彼女が指差す先には大きな蜘蛛が壁にへばりついてゐる。
普通の家に住む蜘蛛ではなく、足が長い気持ち悪い蜘蛛だ。

「あーっ。母さんって蜘蛛が苦手だっけ？黒いゴキは大丈夫なくせ
ば」

「うぬかこひ。いいから処理しなさい」

「はいはい。蜘蛛ぐらいで驚くなよ。びっくりするだら

俺はその蜘蛛には家の外へと退散してもらつ」とした。
ティッシュで掴んで、窓から放り投げて任務終了。

「はう……」

ぐつたりとする母さんに「虫ぐらいでびびらなくても」と呆れて
いた。

「私、蜘蛛だけはダメなのよ。小さな頃に実家の部屋の物置で大量
に溢れ出た蜘蛛の子供達を見てから気持ち悪くてトラウマなの。何
度もアンタにも言つたでしょうが。ああ、気持ち悪い……」

幼女時代にそんなグロい物を見れば当然だろ。

「つて、あれ？母さん、何で？今日は夜勤じゃなかつたのか？」

確かに看護師の都合が悪くて連續で夜勤が続くと電話があつたはず。
「その予定だつたんだけど、代わりに別の人に入つてくれて解放されたの」

「よかつたじやん。今から風呂をこれる？」

「うふ。任せせるわ。あつ、夕食はビーフすのもうだつたの？」

「まだどこかへ飯でも食べに行こうかなつて思つてた。ついでに母さんの弁当でも買つてしまつつか？疲れているんだろ？」

仮眠べらことは取つてゐようだが、疲れは田に見えてくる。

「わうねえ。やうしょりかな」

「〇。それじゃ、風呂をこれてへる」

俺はお風呂をいれてへると、コビングで母さんが携帯電話を片手に硬直していた。

「風呂にれてきたけど……どうしたんだ？」

「……お弁当を置つの中止よ。これから夕食に出かかる」とこなつたわ」

彼女は表情を強張らせながら呟く。

「え？ 外食？ 珍しいなあ、母さんが外で飯を食べよつなんて」

「……やつね。お風呂を出るまで待つていて」

言葉短く告げると彼女は風呂場へと入つて行つた。
母さんの様子が変だつたのは氣のせいだらうか？

風呂からあがつてきた母さんはすぐに出かける支度をしりと告げた。

そんなこんなで外へと出ると、ナリには前に見たことのある車が止まつてゐる。

「これって……？」

「いいから黙つて。翔太、何も余計なことは言わなにように

母さんの様子がいつもとおかしいのに気付いてた。

何て言つか、焦りと書動搖とかを必死に隠しているような。

その車に近づくと中から出できたのは母さんの勤める病院の院長さんである佐々木さんだつた。

「佐々木さん？」とばんばん無沙汰します

「ああ、翔太君。」とばんばん葉月も夜勤明けで大変だらう？

「……別に。慣れているもの。それで私達を食事に誘うなんじどりいづつもつ?」

佐々木さんの誘いだつたのか、なるほど外食と並び選択肢の理由が分かつた。

母ちゃんと佐々木さんはお互いに田で会話をしている。

「まあ、理由なんていいじゃないか。食事は皆で楽しく取りたいものだね?」

「何をバカな」と……」

「……いろいろと葉月とも話をしたくてね。翔太君、今日は悪いが冬美の面倒を見ていてあげてくれないかな?」

「ええ、分かりました」

どうやら大人同士で話があるようだ。

俺は車の後ろの席に座つていた冬美ちゃんに声をかける。

「じんばんは、お兄ちやん?」

「うふ。冬美ちゃんは今日も可愛いねえ。今日は赤色と黄色のリボンなんだ?よく似合つてるよ」

「ありがとつ。えへへっ」

俺が彼女の頭を撫でてやると嬉しそうに微笑む。それを見ていた母さんが思わずつぶやいた言葉。

「口リコン？……翔太つてまさかそういう趣味なの？我が息子としてそれはないわ」

「それは誤解だあ！？」

誰も口リ属性などない、冬美ちゃんが可愛いのは認めるけどね。親に疑惑の目を向けられることが寂しい。

しばらくして、以前に佐々木さんに連れてきてもうつたレストランに到着する。

今回もある極上のステーキを食べさせてもらひえるようだ。

「お兄ちゃん、フォークとナイフの使い方は覚えた？」

「おうよ。冬美ちゃんに教えてもらつたおかげでばっちりだ」

俺のセリフに母さんは頭を抱えて俺に言うのだ。

「「めん、翔太。私、貴方の育て方を少し間違えていたわ。フォークもナイフも使えない子だつたなんて。なんて不憫なの」

「まさか、母親に同情された！？」

ナイフとフォークの使い方が分からぬだけだダメな子ですか！？

恥ずかしさはあるが、俺はそれを恥とは思わない。

「ついの家庭事情を思えばそんなお店に行くことなんてないわけだ。

「ファミレスへひこ使えるよひにれかひせお金もあげるかひ」

「やめて、変な同情しないで！？」これ以上、俺を可哀想な子扱いしないで！？」

「……だつて、我が子としてあまりにも可哀想なんだもの」

ちなみにファミレスとかのナイフとフォークへひこ使つたことはある。

いついつ高級店のいくつもナイフとフォークがあるようなお店に来たのが初めてで困惑つただけで、決して、それすら使えない程可哀そつな子ではない、と思ひ……。そう思いたい。

「私達を夕食に誘つなんて、どういう意図を持つてるのかしら？」

食事をしながら、母さんは佐々木さんに視線を向ける。

「キリともじつへ話して見たい事があつてね。食事の後でいいから、まずは食事を楽しんでくれ。冬美、じつした？」

冬美ちゃんがジッと母さんの方を見つめていた。

「あのね、パパがすげ楽しそうだなって思つたの」

「……そうだね。葉月と話すのは楽しいよ

「な、何を言つて……」

「母さん、何が照れてる?」

母さんが戸惑いながら、俺に「こっち見るな」と睨んできた。
ぐすっ……俺だけ扱い悪くありませんか?
人生2度目の高級ステーキの味に大満足の俺。
そのまま楽しい雰囲気で食事を続けていた。

「ふたりだけで話があるんだ」

食後に佐々木さんに言われてテザートを食べ終わった冬美ちゃん
を連れて外へと出る。

彼女の小さな手を繋いで街をしばらく歩いてみることにする。

「お兄ちゃんのママと私のパパって仲がいいの?」

「やつ、なのかな?俺もよく分からないも」

佐々木さんと母さんの仲はいいのか、どうなのか。

過去を含めて俺はよく知らないのである。

古い友人と言つだけあって、親しそうではあるけども。

「1時間ほど時間をくれと言われたから、冬美ちゃんはどうかに行
きたい所ある?」

「うーん。そうだ。ゲームセンターに行きたい」

「おー、ゲーセンか。冬美ちゃんでもそつまつに行きたいとか思

うんだ?
「?

お金持ちの娘なのに庶民の娯楽、ゲーセンに行きたいとは意外だ。まあ、子供だからセレブちっくなところに行きたいなど言わないだろう。

「学校の友達が行つて楽しかつたつて言つてたの。パパはダメつて言つて連れて行つてくれなくて、私は行つた事がないから連れて行ってくれる、お兄ちゃん？」

「おう。そいつの事なら任せてくれ」

俺は彼女をゲームセンターへと連れて行く。

賑わうケー セン内でUFOギャラクチャーでぬいぐるみを何個か取つてあげたり、ふたりでゲームをしてしばらくの間、楽しむ。

「すうへ向かいの、このぬいぐるみ。ありがとうございます、お兄ちゃん」

ぬいぐるみを抱きしめるタツ美ちゃん、喜んでもらえて」ひかりも楽しい。

……それに、小学生の子と一緒にプリクラを撮る経験なんてそうあるものじゃない。

さもなくば俺に口り疑惑が……それだけは避けておきたい。

「次はあのゲームがしたいのっ。お兄ちゃんっ」

「よしつ、次は俺と勝負をしようか？」

「うるさい。えへへへ。お兄ちゃんは勝つよーっ」

彼女の笑顔に和みながら、俺達は次々とゲームで遊んで行く。
その間、レストランでのふたりが何を話していたのか。
それが俺の出生の秘密にも関わることなんて思いもしていなかつ
たんだ。

第41章・彼の母として

【SIDE・井上葉月】

佐々木信彦、私が唯一愛した男の人。

今は病院の院長をしているけれども、私が交際していた時はまだ新人の医者だった。

別れて17年が経つても、年に数回は会っていた。

彼が結婚して子供が出来たりして、私と会う回数も徐々に減りつつあった。

私たちの子供の翔太のことは絶対に伝える事は出来なかつた。あの日、私が決めた事だから彼が幸せならばそれでいいと思ったの。

彼の負担にならないように、とそれだけを考えてた。

嘘だ、私はずっと翔太が生まれてから彼に嫌われるのが怖かつた。お互いのために、と言い訳をしながら距離を取り続ける。それなのに、去年くらいから彼と会う頻度が高くなつた。私はそれを別に嫌と思わないし、望んではいる事だけども、彼も結婚している身だ。

相手の奥さんに下手な勘違いはされたくない。

私と翔太、彼に夕食を招待された。

その理由がよく分からずについたの。

何回か食事に連れて行ってもらつたことのあるホテルの最上階にあるレストラン。

食事を終えた私たちは一人つきりになつて話をしていた。

翔太と冬美ちゃんはしばらく席をはずしてもらつている。

「どういつもりなの、信彦さん？」

「……ん?」この料理は気に入らなかつたか?」

「そういうわけじゃない。翔太を連れて食事になんて。貴方の考へている事が分からぬ。貴方は結婚しているんでしょ?」

彼が何を考えて行動しているのか本氣で分からぬ。
こんなことしても、意味なんてないのに。

「言つてなかつたが、妻とは3年前にすでに離婚してゐる。今は冬美と一人で暮らしているんだよ」

「えつ! そんなの私は聞いていないわ」

彼の口から聞かされた思いもよらない一言に私は動搖する。
信彦さんがすでに離婚していいたなんて病院でも噂を聞いてない。

「3年も前だから、今さら噂にはならぬって」

「何で黙つていたの?」

「キミも息子がいるのはほづつと黙つていたじゃないか」

「それは、その…… そうだけど」

お互に秘密を隠し続けてた。

というより、こんな風に自分たちの事を話すのは久しぶりだもの。

「……黙つていたのは悪氣があつてのことじやない。キミの態度を確かめたかった。あの17年前の日に、別れだからも友人として接してきたが、諦めきれなくてな。葉月と再婚を含めて距離を詰めた

かつたのが僕の本音だ

「え、再婚…？私と……？」

「そのつもりで、キミを今の病院に呼び寄せたんだ。キミは来てくれた、その事に僕は勝手に期待していたんだ」

今回の事にそんな期待がなかつたとは言えない。
わざわざ彼が誘ってくれたことに期待したのは事実。
彼が結婚しているので考えないようになっていたのに、まさか離婚していたなんて……。

「キミだけなら僕が望めばついてきてくれると思つていた。しかし、翔太君がいると言われて、僕は驚いたよ。そして、17年前の事にも納得が言つた。キミがなぜ、僕の前から去る事を選んだのか」

「……」

私は黙り込んでしまう。

翔太が彼との子供だと言う事を伝える事はできない。
彼は落ち着いて「コービーを飲みながら、

「長い付き合いだと言うのに、僕は何も知らなかつた。あの時、既にキミが身籠つていたなんて。その後、僕も病院を離れてしまつたから全然知らなかつた」

「……やめましょつ、信彦さん。そんな話はしたくない

な？」

「正直に話してくれ。翔太君は僕と葉月の子供で間違ひがないんだ

私の沈黙に彼は肯定と受け取つたらしい。

翔太を一人で育ててきた事だけは知られたくなかつた。

「そうか。葉月はなぜ僕に相談しなかつた？僕が信用できなかつたからか」

「違う、そんなことじゃないの」

「ならば、どうして？確かにあの頃はまだ新人で生活も苦しかつたが、それでも一人の子供の父親としての責任は果たすつもりだつた。葉月との関係だつて、あの時に告げた結婚の意思を持ったものだつた」

「そう、彼は悪くない。

結婚の話も出ていたし、私はただそれに頷けばよかつた。できなかつたのは彼の未来と私の弱さを考えてしまつたせいだ。信彦さんは真剣な様子で私を見つめている。
もう誤魔化せない、嘘は重ねられない。

「そうよ。あの子は貴方との子供、私達が交際してた時に出来た子供なの」

「……僕に相談しなかつた理由は？真面目なキミのことだ。何かあつたんだろう？」

「子供が出来た時に色々と考えたわ。どうするのが一番いいのか。貴方に相談しようとした、けれども、信彦さんは他病院へ行くことが決まり、順調に出世していく事も分かつてた。私と結婚すれば、その道に影響が出るのは目に見えていたわ」

今までこそ院長と言う立場だけども、そう簡単になれたものじゃない。

いくら自分の一族の病院としても、彼は周りを認めさせるのに時間がかかった。

彼の努力が報われた成果、それが今の彼の立場なの。

「私は貴方に嫌われたくなかった。だから、逃げて話せなかつた。子供を嫌われたらどうしようつて本氣で悩んで、何も言えなかつた。だから、私たちが身を引くしかないって」

レストランだと言つのに、私は人目も気にせずにはに想いをぶつける。

「結婚のことも、立場作りのための結婚だと以前に貴方から聞いた。それを聞いた時に私は間違ひじゃなかつたって思えたの。私みたいなただの看護師じゃなくて、立場のある人と結婚するのが貴方にとつて正しい道なんだって」

「……今の立場に上り詰める前に子供が出来たと分かつていれば、確かに影響があつたかもしれない。だが、キミは僕の考えを勘違いしている。僕は誰かの幸せを踏みつけてまで出世して、偉くなりたかつたわけじゃない」

それは17年前に夢を語っていた彼の今。

「キミとの幸せを考えた事がなかつたと本氣で思うのか？あの時に告白した想いは遊びでもなければ、適当でもない。キミだからこそ、僕の傍にいて欲しかつた。キミ一人に負担を押し付けるつもりなんてなかつたんだ」

「……私は、今も自分のした事は間違いじゃないって信じてる。これでよかつたのよ。貴方はちゃんと夢を叶えることができたもの。無駄じやなかつたって思えるわ」

「その夢のためにキミと翔太君を犠牲にした僕の立場はどうなる？ 彼の出生を今まで知らず、何も知らないでたことは？」

「翔太はある程度受け入れてくれている。お願い、あの子には貴方の事を話さないで」

「自分の子供が生まれた事も知らずにいた僕には父親の資格がないと？」

「そういひことじやない。

これ以上、翔太を巻き込んで動搖させたくないの。

「僕はキミの本当の気持ちを知らなかつた。そこまで自分を追いかんでいた事も。今の僕には立場があり、冬美と言う子供もいる。違う未来を歩んでしまつていて。そんな僕をキミたちは責めるかい？」

「責めるはずなどない。私が望んだ事だもの。翔太には辛い想いをさせたけども、私のしたことは間違いじゃない」

私には信彦さんの未来が大事だつた。

彼の夢のために、それは言い訳だとしても私の覚悟でもあつた。

「……17年だ。本当に長い時間だけども、過去は当然ながら取り戻す事なんてできやしない。だからこそ、すべてを“今さら”で終わらせるには早い。葉月、僕の今の気持ちを伝えよう。僕は今もキ

「Kを愛している」

「何で、そんなことを……？」

私達が過ごしてきた時間、17年と言つて“時の刻み”。

「結婚して欲しい。17年も時間は経つてしまつたが、僕もキミと人生を歩みたい。今もその気持ちは変わらない。やり直したいんだ。翔太君の事も、責任を取りたい。葉月、キミをひとりにしておきたくない」

……この歳になつてまだプロポーズされるとは思つてもいなくて。彼の言葉に嬉しさは感じても、私は即座に言葉は返せなかつた。

「翔太は、いえ……少しだけ考え方をせて」

私はそう答えるに精一杯だつた。

「いい答えを期待しているよ。僕も男だからさ。こんな年齢になつてしまつたが、まだ人生は長い。キミと一緒にならば楽しい人生を過ごせると確信している」

「……信彦さん。貴方は私を許してくれるの？」

「それは僕のセリフだらう。キミたちが僕を許し、認めてくれるか。それだけなんだ。僕も一人の子の親としての責任は果たしたい。彼の父親だと名乗る資格を与えて欲しいんだよ」

すべての過去の過ちは私に原因がある。

あの時、信彦さんに嫌われ、捨てられるのが嫌で決断したこと。

今さら、翔太は認めてくれるだらうか。

私の気持ちは揺れ動き、今、信彦さんの方に傾こうとしている。

翔太はきっと私の幸せを認め、応援してくれるかもしれない。

だけど、17年も苦しめてしまったことに対する罪悪感が消えるわけじゃない。

私が信彦さんから離れたのは自分の意思。

けれども、あの子には私のHPで普通じゃない家庭を過ぐせってしまった。

翔太は決して寂しいと口にした事はないが、小さな頃から私も留守がちで寂しくないわけがなかつたはずなんだ。

私自身、両親との仲が悪くて幼い頃からとても辛かつた。

それと同じ事を結果として彼にしてしまった事は、母親としては最低だと自覚している。

ここで私だけが幸せを得てしまう現実はあまりにもあの子の気持ちを無視している。

どうすればいいの、私は……。

とても長い時間をして再び動き出した運命の歯車は、私をどう導くのか。

第42章・繋げる心

【SIDE・井上翔太】

俺には父親の記憶は一切ない。
生まれてからずっと母さんとの一人暮らし。
父親と言う存在がどういうものなのかもよく分からぬ。
けれど、俺は誰が俺の父親なのかは気になつていて。
母さんが俺に教えてくれたのは俺の父親は立場があり、別の家族
を持ち、俺は認知されていないと言う事実のみ。
一度でもいい、どんな人か会つてみたい。
父親と話をしてみたいな。
相手がどう思うかは分からぬけども、俺はそうしたい。

冬美ちゃんと遊んで、レストランに戻り、そのまま家に帰るはず
だった。

けれど、母さんだけが家の前に降りて、俺は佐々木さんの家に招
待されることになった。

「大事な話がしたいんだ」

佐々木さんは俺にそう言って、母さんもそれを了承したらしい。
彼の家は金持ちが多く暮らすエリア。

同じ市でもこの辺りは一度も来た事がない。
家の中もかなり広く、俺は素直に驚いていた。

応接間の方に通されると、緊張しながらも椅子に座る。

「待たせてすまなかつたね。冬美を寝かしつけてきた」

「いえ、かまいません」

「冬美がぬいぐるみを何個も翔太君に取つてもらつたと喜んでいたよ。今日は抱いて眠るそつだ。あの子の面倒を見てくくれて、ありがとう」

「俺も楽しかつたですよ。妹みたいで可愛かつたです」

俺の言葉に彼は微笑で答える。

俺は本題を尋ねるために彼に問う。

「……それで、俺に話があると云つたまぢうことじゅうへん」

「以前に話をしていた件だ。葉月の話だよ、キリの父親が誰かと言ふ事だ」

「母さんから名前が聞けたんですか!-?」

俺は向かい合ひ佐々木さんに尋ねた。

彼は何とも言えない表情を浮かべながら言つんだ。

「僕はキリに嘘をついてた。その事をまず謝らせて欲しい。すまない」

「えつと、佐々木さん。何のことですか……?」

「僕と葉月の関係だ。僕は葉月と友人だと言つていたが、それは違

う。当時、彼女と交際していたのは僕なんだ。僕が彼女の恋人だつた

佐々木さんが恋人だつた相手？
彼は神妙な面持ちで俺に真つすぐな視線を向ける。

「これから僕の知る限りの真実を話す。聞いてくれるかい」

「……はい」

「18年前の事だ。僕と葉月は互いに惹かれて、交際を始めた。約1年間ほどの交際で僕は結婚も考えていた。しかし、僕が別の病院に移ることになり、彼女にその話をしたら別れを切り出されてしまった

俺は黙り込んで彼の話を聞き続ける。

母さんが何で彼と別れたのか。

愛している相手と別れるには、理由として離れてしまう事は理解できる。

「僕は諦めたくはなかつたが、仕方なく別ることにして彼女と離れた。それから数年後に僕はある私立病院の理事長の娘と結婚した。やがて、冬美が生まれて僕は家族を持つた。順調に出来もし、僕は対外的に認められて、去年、ようやく院長にまでなれた」

医者としても人間としても、人生の成功者と言つていいだろう。
いくら実家が大病院の家系だとはいえ、院長になるのは大変そうだ。

「3年前、不仲となつた妻と離婚した。その後、僕は破局後も友人

としての関係を続けていた葉月と一年ほど前から会う機会が増えてね。僕は再び彼女に対しても……愛情を抱くようになった

「それで病院の方に母さんを誘つたんですね。俺の母さんの事が好きなんですか？」

「ああ。愛しているよ。だが、葉月は自分の事は一切話さなかつた。今、誰と暮らしているのか、結婚はしているのか。そういう自分に関する事は一切だ」

母さんが黙りつづけていた理由。

佐々木さんも俺と実際に出会つ今まで子供がいると知らなかつたらな。

「今日、すべての真実を彼女から聞いた。なぜ、彼女が僕の元を去つたのか。その理由は……キミが僕の息子である、という事だそうだ」

「佐々木さんが俺の父親……？」

話の流れ的に容易に想像はついてだが、本当なのか？

俺は今、自分の会いたいと望んでいた父親と話をしているのか？

「……葉月は僕が院長になるために身を引いたと言つた。あの頃、子供が出来て葉月と結婚していれば、今の立場はなかつたかもしない。それでも僕は、言い訳になるが、本当に葉月を愛して結婚したかった。地位よりも、葉月を、キミを選びたかった」

「母さんが黙つていた、それで俺の事は佐々木さんも知らなかつたんですね」

「17年間、僕は翔太君の存在を知らないままに過ごしてきた。これは罪だ、ひとりのこの親としての最低限の責務も果たせず、存在すら知らずにいたなんて」

母さんが言つていた通りだつたんだ。
相手には立場も別の家族もあり、俺は隠し子として認知されない。

佐々木さんは俺に頭を下げて謝罪をする。

「すまなかつた、翔太君。僕がキミの父親なんだ。キミと出会つまで僕は自分の子供は冬美だけだと思っていた。自分の子供が別にいるなんて思いもしていなかつた」

「……知らなかつたことならば、仕方がないんじゃないですか？」

「知らないと言えば済む話ではない。僕はキミに対して、父親としての……」

俺は父親と会えればいろいろと話がしたかった。

憎んでもいない相手を責めるつもりはない。

ただ、親子として認めてもらいたくて、話をしてみたかつたんだ。

「頭をあげてください。前にも言いましたよね。俺は父親が誰であらうと責めるつもりはありません。佐々木さん、俺は母さんとの二人暮らしでも不幸せだと、恨みを抱い事はないんですよ。父親がない、確かに小学生くらいの時は多少は嫌な思い出はあります。周りの友人達には当たり前の用にいる存在でしたから」

「……翔太君」

「だけど、母さんは俺を大切に育ててくれました。母親として、自分の時間を削り遊んでくれたり、一生懸命に働いてくれたり。そんな生活中に不満はないんですよ」

母さんにも事情があつたのだろう。

彼から身を引き、自分ひとりで俺を生み育てると決めた覚悟。それがどんなにも大変で辛いことだったのか。

俺には想像しかできなけれども、精神的に本当にしどごじだつたはずだ。

「佐々木さんは母さんを愛していると聞きました。結婚するつもりはあるんですか？」

「……僕は数年前から結婚したいと願っていた。先ほど、僕は彼女に正式にプロポーズをした。結婚して欲しい」と

「そうなんですか。母さんは了承したんですか？」

「すぐに返事はもらっていない。キニの事もあるだろう。だからこそ、僕は葉刃に頼んで、翔太君と話をする機会を作つてしまつたんだ」

なるほど、母さんが何も言わずに俺と佐々木さんを引き合わせたわけか。

俺の父親だと、彼は勇気を持つてカミングアウトしてくれた。

彼は彼なりに考えて、今、俺の目の前にいる。

「佐々木さん。俺に批判される事、覚悟してました?」

「僕には父親である資格がない。キミや葉月の事なんて思いもせず、別の家族を持ち、それなりに幸せな家庭を築いていた。責められて、憎まれて当然だろ？」「

「……当然、と言われても困るんですね。俺も貴方を知らなかつた。憎いと思った事はない、俺は俺で、本当に幸せな家庭で育つたと思つてます」

俺は彼にそつと手を差し出した。

「だけど、俺は父親である貴方の事をもつと知りたい、話したいと思つています。母さんと結婚したいと言つのなら、それに俺も賛成しますよ。彼女は幸せになるべきだ」

「……キミは優しいな。僕も翔太君の事を知りたいと思つよ。こんな僕でも父親だと認めてくれると喜ぶのかい？」

「誰だつて、最初があつて当然なんです。いつもして出会えた事に意味があると思いませんか、“父さん”。今さらだから、なんて言わずに、ここから始めたって遅くはないと俺は思いますよ」

俺が生まれて初めて、誰かを父さんと呼んだ。
人生において初めてだ。

彼はしばらく言葉を詰まらせていたが、やがて「ありがとうございます」と俺に言った。

それから俺達はいろいろな事を話をした。
母さんのこと、お互いの話や、俺は琴乃と言つ恋人がいること。
些細な事でもいい、話をして少しでも理解しあえるようにする。
まずはそこから始めて行こうと思つたんだ。

夜も遅くなつた頃に、俺は彼の車で家まで送つもらつた。

「父さん。今日は話がてきて楽しかつたです」

「僕もだよ、翔太君。キミに認めてもらえた事が嬉しい」

未だに敬語口調なのは互いの距離だが、これは仕方ない。呼び方と関係だけは変わつたのだ。

他はゆつぐりとえていけばいい。

俺達は……血の繋がりあつた家族なのだから。

「冬美ちゃんとも話をさせてください。彼女も、異母とはいえ兄妹ですか？」

「ああ、ぜひうつしてあげてくれ。それでは、また。おやすみ」

「はい。おやすみなさい。また、ゆつぐりと話をしまじょう」

彼の車が去るのを俺は眺めながらどこか不思議な気持ちだつた。その人が俺の父親だと言われて、すんなりと心で受け止める事ができた。

それは自分ではある意味の驚きではあつたんだ。

長い時間がかかつたが、俺と父さんの関係は何とかなつた。あとは母さんの方だな。

あの人は何気に俺の事をかなり気にしてくれている。

プロポーズされたとき、内心はずつと思い抱いてた感情で即答したかったはずだ。

俺は十分に幸せに生きている。

ならばこそ、母さんは本当の意味で幸せになつてもいいたい。

俺は家に帰ると、母さんは眠りもせずに待つていた。

彼女がテーブルに広げて眺めているのはアルバム。

けれど、俺が見たことない色のアルバムで、それは母さんが隠し続けてきた父さんとの思い出の写真の数々をのせていくものだった。

「おかえりなさい、翔太。信彦さんと話はできた?」

「話は全て聞いたよ、彼が俺の父なんだってこともね。母さん、話を聞いてくれる?」

俺が母さんに出来ること。

17年という時間に囚われた彼女の心を解放させられるのは俺だけなんだ。

第43章・愛の形

【SIDE・井上翔太】

リビングで向き合いつ形、こうして母さんと話をするのはいつ以来だ。

確か、俺の父親の話をした時以来かもしない。

「……まずは確認なんだけどさ。本当に俺の父さんは佐々木さんなんだよな？」

「ええ、そうよ。信彦さんが貴方の父親。彼にはこの事を一切、話していなかつた。信彦さんには今日、初めて真実を告げたわ。だから、信彦さんは悪くない。悪いのは全部、私なのよ」

母さんと父さんの関係。

何年もの間、嘘をつき続けてきた。

彼女の心境を思うと、何とも言えない。

「父さんが別の相手と結婚して、それでよかつたわけ？」

「それがあの人の夢を叶えるためなら、いいと思ったわ。私と付き合つよりも、将来性や立場のある女性と結婚する方がいい。私はそう思つて、彼と別れる事を選んだの。もちろん、翔太と暮らしていくことに不安がなかつたわけじゃない」

色々と悩んだ結果なんだろうな。

そんなのは分かり切つている。

苦しみながらも選んだ母さんの決意。

「そうして、父さんの事ばかり考えて、母さんは幸せだったのか?」

「それは……」

「好きな人を諦めて、距離も遠ざけて、それで父さんも幸せになれたのか?」

俺はあえてキツイ言い方をする。

母さんは顔を俯かせながら俺に言う。

「……私はそう信じているわ。私の行動に間違いはなかつた。翔太には本当に悪い事をしたと思っている。片親のせいで苦労をかけたことも、寂しい思いをさせたことも」

「父さんだけが幸せになつて、それでよかつたんだ?」

「翔太に対しても申し訳なく思つてゐる。私が辛いのは私の責任だもの。けれど、そんなエゴで貴方を巻き込み続けてきたのは本当に悪かつたわ」

初めて俺の父の事を語つて解きと同じく母さんは俺に謝罪をする。何ががズレている。

俺はそう感じざるを得なかつた。

そして、俺はようやく気づくんだ。

「そつか。そつこつことか……」

「……翔太?」

「結局、母さんの中には最初から俺と父さん、母さんの3人で家族になると話す選択はなかつたのか？母さん達が結婚して一緒になると言ひビジュコンは……」

「…………？」

母さんは何も言えなくなり、黙り込んでしまう。

母さんの中にある、父さんと一緒に生きていきたいうて本音。なぜ、それを彼女は表に出さない、出せない？

「彼の立場とか、そんなことよりも大事なのは母さんが幸せになりたいって気持ちじゃないのか？何で最初から諦めているんだよ。何で、父さんと向き合おうとしたしないんだよ。それってただ、一方的に愛を押し付けてるだけじゃないか」

「それしかなかつた。そうする」とでしか、私は「

「母さんは自分勝手なんだよ！」

責めるつもりはなかつたのに、俺は声を荒げてしまう。俺の言葉に彼女はハッとする。何で、母さんは平気なフリをするんだよ。こんなにも長い間、ひとりでいるんだよ。

「母さんの話が父さんの幸せは父さんが望んだ事なのか？」

「…………あつ…………」

唇をかみしめる彼女、それでも俺は言わなくちゃいけない。

「父さんの夢のために。言葉で言えば綺麗だけどさ、それはただ母さんがそつとして欲しいと望む未来を彼に押しつけただけだ。父さんは俺に言っていたよ。17年前、出来る事なら、母さんと一緒になりたかつた、と」

「そうしたい、ああしたい、そつしなければいけない、それがいい。彼女の想いは“愛の形”と言つ名の“エゴ”でしかない。その“結果”は誰も幸せになれない。

「父さんはこうも言つていた。俺の事があるから結婚の話だつて受け入れてくれない。今もまだ母さんが彼を拒み続ける理由なんてあるのか？」

「翔太のためよ。私だけが幸せになつたら、翔太はどうするのよ。貴方に与え続けてしまつた苦痛はとりかえしがつかない」

「俺の事を言い訳にするなよつーまだ逃げるのか？母さんが俺を育ててくれたのは感謝している。苦労ばかりしてきたはずだ。そんな現実を受け入れてる。母さんが向き合わなきやいけないのは父さんだろうがっ！」

「子供の事を思わない母親がどこにいるつていうのよ。子供を産むつて事は責任なのつ。親である私にはアンタを育てる責任があるの。私が信彦さんの事を優先して考えてしまつたら……しまつたら……」

「うなだれる母さんを俺は不器用な人だと感じていた。
自分を無理やり抑え込んでいる感情があるはずなのに。

「もつと素直になれよ、母さん。自分に嘘をついて、他人に嘘をついて、そうして作られた今の関係で本当にいいのか？」

俺は琴乃との事を彼女に話すことになった。

彼女との思い出も、今回の事によく似ているんだ。

「俺の話だけどさ。琴乃は俺に嘘をついていた。俺があの子の事を忘れてしまったから、鈴音だと勘違いしているのを利用した。そして、付き合いはじめて、彼女は嘘をつき続けた。その事を苦恼して、それでも俺と一緒にいたいと言う気持ちを優先した」

彼女を思いだせずに嘘をつかせ続けてしまった俺が悪い。
あの子を苦しめていたのは嘘をついたせいで生まれた罪悪感。

「琴乃は悪くない。嘘をつかせたのは俺のためだ、俺さえしつかりしていれば、あんな事をさせることがなかつたのに。俺はそれが悔しいんだよ。好きな子を悲しませるのが自分のせいだつてのはさ」

「……琴乃ちゃんと初めて会つた時に、翔太への対応が違うよううに見えたのはそのせいだったのね。嘘つきの恋、か」

「嘘をつくのは簡単だよ。嘘をつければ、自分を守れる。だけどさ、嘘をついたり、誤魔化したりして逃げるという選択をしても、幸せにはなれない。逃げてばかりじゃダメなんだ」

琴乃にそんな無理をさせてしまつた俺は自分を恥じた。
どうして、俺に素直に話してくれなかつたんだつて思った。
彼女一人を苦しめるつもりなんて俺にはなかつたのに。
それは奇しくも、俺の父さんと同じ気持ちだつたに違いない。

「俺と彼女の問題なんだ。真実を知りたいと思うのが当然だろ?。父さんもそうだ。俺の事を知らず、自分のために母さんに身を引か

せてしまつた。その事を悔いているはずなんだよ

嘘をついても、結局、いつかは嘘がバレる。
嘘は逃げだ、逃げても何も解決などしない。

「もう逃げずに父さんと向き合つて欲しい。俺が望むのはそれだけだ。俺は母さんと暮らしてきて幸せだったよ。俺は父さんも母さんも恨んじやいない、これから先、一緒に暮らせるようになればそれでいいと思つんだ」

「今から、そんな都合のこことなんて……」

「今から逃げるのをやめてから言つてくれよ。今からでも、何でもいい。物事を始めるのに、遅くなつていいんだよ。俺は今度こそ、母さんに幸せになつてもらいたい」

「……私はずっと怖かったのよ。信彦さんにも、翔太にも拒絶されてしまう事が怖かった。黙つていれば、責められる事はない。けれど、それは貴方の言うとおり、逃げでしかない。私だって、幸せにはなりたいの」

母さんは静かに目を瞑つてから、ゆっくりと見開く。
もう悩まないでいいんだ、と自分に言い聞かせていつも見えた。

た。

「私は今からでも幸せになつてもいいの、翔太？」

「当然。だって、俺達は家族なんだ。誰だって家族の幸せは望むものだろ?」

俺がそう言うと彼女は嬉しそうに笑った。

人が幸せで、笑顔で暮らしていくには障害はいくらでもある。

それを苦労して乗り越える時、入って言うのは幸せの大切さを知るんだ。

母さんも、父さんも、冬美ちゃんも、俺も……家族になればきっと何かが変わる。

家族の誰もが幸せになれるよ!」。

きつとなれるはずなんだと俺は信じたい。

第44章・愛しき者へ

【SIDE・井上翔太】

両親が結婚してから数ヶ月後。
母さんもようやく前に進むことができ、父さんと一緒に道を歩けるようになった。

俺はといえば、いきなり大病院の院長の息子といつ立場になり、家もあの豪邸に引っ越したりと少し戸惑いつつも新しい家族には満足していた。

父さんとの関係も徐々に改善されつつあるし、冬美ちゃんともちゃんと兄妹として仲良くしているのだ。

なぜか、いまだに母さんは口々コン扱いされるのが困るのが困るが。

本当にめまぐるしく変わる現実。

どんなに変わっても、変わらないものもある。

俺と琴乃も恋人関係はすこぶる順調だった。

季節は夏、夏休みに入つてから琴乃も俺の家で過ごす事が多くのなつた。

新しい家となつた屋敷はホントに広い。

留守がちな両親の代わりに料理をしてくれたり（大半のことは家政婦のおばさんがしてくれる）、冬美ちゃんと遊んだり、恋人の琴乃と愛を育みあつたりと楽しい毎日だ。

今日も夕食を作りに来てくれて、キッチンで料理中だ。

俺は琴乃の後姿を見つめながら声をかける。

「いつも悪いね、琴乃。助かってるよ」

「翔太先輩の役に立てるなら、それでいいんです。もう少し待ってください」

「ありがと。それじゃ、待たせてもらひよ」

俺は絵を描いている冬美ちゃんに囁く。

「冬美ちゃん。夕食はもう少しだつてさ」

「うんっ。ねえ、お兄ちゃん。琴乃お姉ちゃんとお付き合っていふんでしょ？」

「そうだよ。恋人同士なんだ、それがどうしたのかな？」

小学生の彼女の面倒を見るのも、俺の役割となりつつある。いくら家政婦がいるとはいえ、遊び相手ではない。じつして俺が遊んでもあげるだけでも彼女にとっては寂しさを感じさせずにする。

「あのねっ？好きな人がいるってどうって気持ちなんかって

「冬美ちゃんは恋愛に興味があるお年頃なのか

俺がこの子へらこの時はちゅうべい、鈴音に出会つて初恋のよつたものを作った。

だから、興味があるのは当然だと想つ。

「好きな人がいるって事は幸せなことだ。ほら、父さんと母さんだって、好き同士だろ？見てくれば仲がいいのはよく分かる。冬美ちゃんもそう思つから聞いたんだろ？」

「うん。パパもママも、すっごく仲がいいもんね！」

結婚してからはよく一人で旅行をしたりとか、デートに出かけたりとか、お互いの距離を縮めあうように彼らは仲がいい。十数年の月日は取り戻せなくとも、今からだつて遅くはないと思うんだ。

「冬美ちゃんには仲がいい男の子とかいるのか？」

「うーん。クラスでよく話をする子はいるよ。でも、恋とは違う気がする」

「そつか。冬美ちゃんがこの人いなつて思える相手に出会えればいいね」

俺はそう言つて彼女の頭を撫でると嬉しそうに俺の膝の上に乗つてくる。

「うやつて妹に甘えられると兄としては純粹な意味で嬉しいのだ。何気ない幸せ、手を伸ばせばそこにある。

俺は小さな彼女を抱きしめながら、家族の温もりを感じる。

「……ジーツ」

背後からの視線さえなければ、ね？

まさに絶対零度な冷たい視線。

俺は慌てて感じた視線の先を追うと琴乃が俺を微妙な表情で見つ

めていた。

「「」、「」飯、出来たんだ？」

「出来ましたけど……前から思っていたんですけど、先輩つて口つな人ですか？」

「だから、母さんみたいな事を言わないで！？」琴乃にまで誤解されたくないっ！？」

母親だけではなく、恋人にまで口づコン扱いされるのはマジで勘弁願いたい。

「だつて、冬美ちゃんとのす「」仲がいいですよね？」

「妹としてね？あくまでも、妹だからっ！？」

「……先輩はそういう言い訳をしているようにしか聞こえません」

俺の腕の中で冬美ちゃんは「ふにゅ？」と不思議そうな顔をしている。

可愛いけど、ものす「」可愛いけども、この子は妹なのだ。別に俺も口リ疑惑を抱かれるような属性もちではない。

「妹を可愛いがる兄の構図に見えませんか？」

「怪しいお兄さんが妹という無垢な少女に悪戯しようとしているように見えます」

「俺、犯罪者予備軍扱いつ！？」

何たるショック、恋人にそんな扱いされたくなー。

俺が凹んでいると冬美ちゃんが優しい笑顔で俺を癒してくれる。

「お兄ちゃん、どうしたの？元気ないよ？」

「ふふつ。何でもないさ」

「……はあ。先輩、ロリコンは犯罪なんですよ。自重してください」

呆れた声で俺を責める琴乃。

本当の意味で恋人になれてから互いに遠慮はなくなつた分、こうして琴乃に責められることも多々あるところ……。

俺つてもしや、ダメ彼氏？

「冬美ちゃん。夕食の前に手洗いをしてきて」

「はーい、琴乃お姉ちゃん」

彼女は俺から離れて洗面所の方へと言つてしまつ。さて、残された俺はロリコン疑惑を恋人に突きつけられて逃げ場がない。

「お、俺も手を洗いに……」

「行かなくていいです。はあ、先輩。のですね、冬美ちゃんが可愛いのは分かりますけど、ベタベタし過ぎるのはどうかと思います。ホントにそんな趣味があつたりするとか？私じゃ不満ですか？ロリ系じやないとダメなんですか？」

「ありません。妹に手を出す変態でもないです。それに冬美ちゃんつて俺にとつて異母兄妹で実妹なんだからさ。そこだけは俺を信頼して欲しい。愛しているのはキミだ」

ずっと兄妹がいれば、と憧れていた分、冬美ちゃんの存在は大きい。

システムと言われよつが可愛いものは可愛いのだ。

「……それに、冬美ちゃんばかり可愛いがられるのも何だか嫌です。私、先輩の恋人なのに。あんな風に抱きしめたりしてくれませんよね？あそこまで可愛いがってとは言いませんけど、もう少し愛情表現があつてもいいと思うんです」

「え？あ、あれは、その、恥ずかしいって言つか」

さすがに露骨な抱き締め方と言つのは俺としては抵抗がある。それを琴乃は拗ねた口調で俺を責めるのだ。

「別にいいんですけど。恋人くく越えられない壁く実妹、というわけですか」

「じめんなさい、お願ひだからそつひとつ事だけは言わないで？ね？」

俺は琴乃の「機嫌伺いに必死だ。

この子は案外、嫉妬深くて、そこが可愛いかつたりする。

ただその可愛さは時々、変な方向に發揮されるので要注意だ。

女の子の嫉妬が可愛いしつちが華つてね、それがヤンデレ化したら手に負えない。

「だったら、私もかまつてください」

「いいよ。それじゃ、明日は、テートでもしようか? 夏美ちゃんも友達と朝から遊びに行くらしいから、遠出だってできるよ!」

「ホントですか、先輩?」

不機嫌も一転して彼女は笑みを見せる。

恋人つてのは本当に大変です。

だけど、好きな子だから苦労は仕方ないと思つ。

人間だから時にはすれ違う事もある。

それでも、相手を信じあうことが大切なんだって俺は思つんだ。

恋人には嘘をつく事もなく、素直でいたい。

「それじゃ、夕食にしましょ。今日は先輩の好きなピーマンの肉詰めです」

「それ、俺の苦手な奴じやんつ! ?」

「子供じゃないんですから、ピーマンくらいで文句は言わないでください。好き嫌いしちゃダメなんですからね。冬美ちゃんんだって美味しいって食べるんですよ?」

琴乃は何だか最近、俺に厳しいです。

地味に仕返しされたりしてるのは気のせいじゃない、はず。

まあ、いいか。

こういう関係つてのも自然でいい関係だと俺は思つからさ。ただ、ピーマンだけは勘弁してください。

最終章・恋人と海と青空と

【SIDE・井上翔太】

ガールフレンド。

英語を日本語に直訳すると女友達。

だが、本来の意味で言うのならば恋人と言う意味だ。

俺はこの言葉にすごく意味がある気がする。

最初は友達、けれど親しみを持つとその関係は恋人へと変わる。

琴乃と俺は今、海へと来ていた。

眩しいくらいに照りつける太陽の日差し。

蒼い海は波打たせながら人々を楽しませている。

「翔太先輩と海に来るなんて初めてですねっ」

「そうだな。俺って実は海に来るのは5年ぶりくらいなんだよな」

「そりなんですか？」

「遠出してまで海に来るって事が中々なかつたからさ」

電車を乗り継いでまで、海にこようとは思わなかつた。

せいぜいプールがいい所だつた。

だから、泳げないって事はないんだけどね。

「先輩と海に来たかつたんです。またひとつ、私の夢が叶いました」

「琴乃つて小さい夢をいっぱい持つているな

「小さい夢の積み重ねは大きい幸せになるんですよ？」

可愛い顔をして、彼女は俺にそう言つ放つた。

……まつたぐ、こちらが照れくさくなるじゃないか。

「可愛い事を言つてくれる」

「あつ、先輩つてば照れます？可愛いのは先輩の方ですよ？」

くすりと微笑をする彼女に俺はやられた。

琴乃のような恋人がいて、俺は本当に幸せだなって思つんだ。

「はいはい。そんな事はいいから早く泳げ」つぜ

「ふふつ。先輩、そんなに私の水着が見たいんですか？」

「ぐふつ！？そ、それは……」

見たくないとも言えず、がっつくよつに見たいとも言えず。
彼女に俺はからかわれながら、逃げるよう更衣室に行く。
水着に着替えた後は砂浜で琴乃が来るのを待つていた。
砂浜が暑くて足が焼けそうだ。
さつさと海に入りたい。

「お待たせしました、先輩つ」

「おつ、来たか……琴乃？」

普段はストレートの髪の毛をツインにまとめた彼女。

それだけでも可愛いのに、青色の花柄模様のワンピースタイプの水着はよく似合つてゐる。

スタイルは……まあ、これからに期待つて」とで。

「先輩？ 凝視ばかりしてないで感想をください」

「スクール水着じやないんだな」

「くつ。 そうきますか？ 先輩はスク水派。 分かりました、 次からはそうします」

「しなくていいから！？」「冗談だよ、冗談。 僕にそのようなマニアックな趣味はない」

初めから言わなきゃいいのこといつ視線を向けられてしまった。

「素直に褒めてくださいよ？」

「分かつてるよ。えっと、その、うん。 可愛いと思ひだ？」

「？がついてますけど微妙ですか？ スタイルに問題があるのは仕方ありませんけど」

今度は不機嫌になりかけている。

マズイ、 そうなると琴乃是手強いのだ。

前に機嫌を損ねた時は麻由美に手助けしてもりつてやつやく解決したからなあ。

「可愛いよ。すいぐ似合つてると思つ。 スタイルだつて、悪くない」

「最後の辺りが何となくご機嫌取りが混じってる気がしますが、それでいいです。先輩に褒めてもらえると嬉しいですね」

「……本当だつてば」

可愛いと褒めても疑われるはどうかと。
俺の信頼度が足りてない?

「翔太先輩。私、実は……」

「胸はパッドあります?」

「先輩。女の子の秘密に触れたら　　が　　して、　　しますよ
?」

ちょ、おまつ!?

思わずふせ字にしなきや いけない事を笑顔で言つ琴乃にマジでび
びる。

本気で女の子の笑顔が怖いと思つた。

これ以上、琴乃を怒らせないよつこじよつ。

「じめんなさい」

「もうつ、先輩つてば女の子をなんだと思つてるんですか?」

琴乃が言いたかったのは「実は私、泳ぎが下手なんです」という
ものだつた。

浮き輪の着用を求める彼女に俺は承諾する。
こういう事は下手して溺れても困るからな。

俺達は海へと入ると、冷たい水の感触に心地よさを感じる。

外がこれだけ炎天下なので本当に海に入ると気持ちがいい。

「少し、波が荒いですね」

浮き輪で浮きながら彼女は海を進む。
俺もその後をついて行くと、いきなり足がつかない深さにならは
じめた。

ここからは泳がないとダメか。

「なあ、琴乃？ 鈴音はどうしているんだ？」

「お姉ちゃんですか？ お盆前に一度だけ帰つてくるやうですよ」

全寮制の高校なので鈴音に会えるのは本当にわずかなのだ。
麻由美は学校では昼飯を食べる時によく顔を合わすけどな。

「そうか。 また会えるといいな」

「むう。 もしや、お姉ちゃんを狙つつもりでは？」

「琴乃がいるのにそんなことするはずないだろ？」

「分かりませんよ。 時々、不安になることもあります。 あの一件で
私達の関係は変わりました。 本当の意味での再会、それは意味があ
つたと思います」

「ゴールデンウィークのあの出来事。

俺が琴乃を鈴音と勘違いしていた奴だ。

だが、お互に受け入れて、前を向きました」とによつ、今はこ
うして甘い恋人関係を続ける事ができている。

「……先輩の初恋つてお姉ちゃんですよね？」

「まあ、そうだけど。今、好きなのは琴乃だぞ」

「分かつてます。分かつてるんです。だけど、どうしても気になる事があつて。私、本当にダメだなつて……。先輩が好きと言つてくれるのに、心のどこかで本当に私でいいのかと思つてしまつんですよ」

静かに波に浮く俺達は黙り込んでしまつた。

琴乃是時折、そういう自信のなさを見せる。

性格的なものだから無理は言えないけども、俺は俺を信じて欲しい。

「琴乃、おいで？」

俺は琴乃の手を引きながら、海で足のつく所まで戻る。
顔を俯かせる彼女に俺はポンッと軽く頭を撫でた。

「俺は、琴乃と一緒にいられて幸せだよ。可愛い彼女がいて、毎日が楽しくて満たされている。琴乃、自分で言つたよな。小さな夢の積み重ねが自分の幸せだって」

「……はい」

「俺も同じなんだ。」つして一緒にいる、楽しい思い出を作り、同じ時間を過ごしていく。その幸せは俺も同じなんだよ

琴乃が不安に思つ事なんてない。

俺の気持ちを信じてくれれば、それでいいのに。

だけど、人間はそう言つ事は言葉にしないと伝わらない。
他人同士が理解し合つには本当に傍にいなきや分からんんだ。
両親のようなすれ違いを俺は琴乃とはしたくない。

「俺は琴乃が好きだ。本当に好きなんだ」

「……翔太、先輩」

「だから、これからも俺と一緒にたくさん思い出を過ごして欲しい。俺の隣で微笑んでいて欲しい。これが俺の望み、俺の夢なんだよ」

人を信じるのは難しい。

だからこそ、話をして分かりあう事が必要なんだ。
分かつたふりをして、嘘をついて、誤魔化して。

そんな関係を続けていたらダメになるのはお互いに理解している。

「琴乃のそういう不安、俺は話してほしいよ。俺は琴乃を理解したい。琴乃の想いを知りたいからさ。ふたりで解決していけば、俺達はずつと幸せなんじゃないかな」

琴乃はしばらく黙りつづけていた。

瞳に端につつすらと涙を浮かべていたが、やがて、落ち着いたのか笑顔を見せる。

「ありがとうございます、先輩。そう言つてもらえると、私も嬉しいです」

「琴乃には笑顔でいてもらわないとな」

「私、先輩の事を好きになつて本当によかつたと思いまよ」

俺達は海の中でも抱きしめあつ。

周囲の視線が少し気になるがまいやしない。

「……皆の前で抱擁されるとそれが恥ずかしいですね」

「どこのでもいるカップルの構図だ。気にしないでいい」

「先輩つて意外な所で大胆ですよね」

俺は琴乃を抱擁していた腕をゆっくりと離した。

「いつかちゃんと態度に出さないと琴乃が不安があるからね」

「……先輩つて優しいです。時々

「ちよい待て。時々つていつもね?」

「べすつ。それは、まあ、気にしないでください」

こつもの関係、こつもの琴乃がそこそこいる。

「ああて、それじゃまた泳ぐとするか。何なら勝負でもするか?」

「浮き輪OKなら私は負けませんよ?」

「いや、浮き輪じや絶対に俺には勝てないから」

水しぶきとともに笑い声が海に響く、大切な子が俺のすぐ傍で笑っている。

その現実に俺は幸せを実感している。

これから何度も互いに喧嘩したり、不安になつたりしていくんだ

うつ。

それでも、俺達はどんな試練も乗り越えて見せる。

この幸せな日々を続けていくために。

【 THE END 】

最終章・恋人と海と青空と（後書き）

これで完結です。

思い出つて、人間、つい忘れて行くモノなんですね。ふと懐かしい過去を思い出す、小学生時代、仲の良かつた友達、好きになつた異性の相手。……あれ、でも、名前とか顔とか思い出せねー。と言つのが普通なんですけど。だからこそ、初恋だつたり、昔をふと思い出してみる時間も必要なのではないでしょーか？

基本的に過去の回想、翔太が琴乃だと思っていた相手は鈴音です。作品は少し分かりづらいところもあると思うので、もう一度読み返してもらえば、なるほどねと思つてもうれるはずです。この作品を楽しんでもらえたなら幸いです。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3402q/>

G・F～ガールフレンド～

2011年2月28日09時10分発行